
バカとリリカルと召喚獣

2級審問官

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとリリカルと召喚獣

【Nコード】

N0130Q

【作者名】

2級審問官

【あらすじ】

バカとテストと召喚獣と魔法少女リリカルなのはのクロス小説です。

明久にはハーレムの意味での女難がありますのでご注意ください。

現在合宿編（原作三巻）です。

『バカとリリカルと召喚獣、始まります』（明久&なのは）

設定・バカテスト（前書き）

やってしまった……

設定・バカテスト

バカテスト 現代社会

問題

三権分立は何で成り立っているか答えなさい。

姫路瑞希、フェイト・T・ハラオウンの答え

『司法・立法・行政』

教師のコメント

正解です。流石ですね。

吉井明久の答え

『司法・立法・憲法か漢方』

教師のコメント

一つ目と二つ目は合っていますが、最後が違います。ですが二つ出てきただけでもいい方でしょう。

八神はやての答え

『司法・立法・行政 ※アキ君は最後なんかは憲法とか書きそうやなあ』

教師のコメント

解答は正解ですが、テストと関係ないことは書かないように。まあ、実際そう書きました。

高町なのはの答え

『連邦軍・JUDA・時空管理局』

教師のコメント

とりあえず二次元と三次元の区別をつけてください。

~~~~~

〈設定〉

・本作では以下の設定が起用されます。

？なのは達、リリカル側のキャラは魔導師ではなく普通の人間です。

？当然ですが、レイジングハートなどのデバイスも出てきません。

？フェイトやエリオなど、『プロジェクトF・A・T・E』で生まれたキャラクター達は普通の人間という設定です。（ぶっちゃけてしまえばリリカルなのはにある殺伐・重苦しい設定はありません）

？なのはは数学・家庭科以外はバカです。（上記のテストの解答がその証拠）

？本作での文月学園には、原作にあるかどうかは分かりませんが生

徒会があります。

？更新がかなり遅いかもしれません。（極力早く更新できるようにはしますが）

？「ひよつとして、なのは×明久？」と思った読者様方へ。明久となのはは幼馴染という設定ですが、小さいころから一緒にいすぎて二人の間には一種の倦怠期のようなものがあります。なので『明久×なのは』は難しいかもです。

以上の設定は耐えられない、と言うかたは戻ることをお勧めします。

それはおバカな始まりなの？

バカテスト 化学

問 以下の問いに答えなさい。

『調理の為火に掛ける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点と、マグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい』

姫路瑞希、フェイト・T・ハラオウンの答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応して危険であるという点。

合金の例……ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目という引っ掛け問題なのですが、二人は引っかかりませんでしたね。

土屋康太の答え

『問題点……ガス代を払っていなかったこと』

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

高町なのはの答え

『問題点……鍋を自作したこと。  
(鍋は普通二〇リとかの家具屋さ  
んで買うべきです)』

教師のコメント

そこも問題じゃありません。

吉井明久の答え

『合金の例……未来合金(↑すごく強い)』

教師のコメント

すごく強いと言われても。

~~~~~


私達がこの文月学園に入学して、二度目の春が訪れました。

校舎へと続く坂道には、新入生を迎える桜が咲き誇っています。そんな桜に私、高町なのはは一瞬目を奪われます。

そしてこんなことをしてる場合じゃないと思い出し、私は全力疾走で坂道を駆け上がります。

「高町、遅刻だぞ」

玄関までたどり着くと、そこには筋骨隆々という言葉が似合う男性がいました。

「おはようございます、西村先生」

「ああ、おはよう。それはそうと、他に何か言うことはないのか？」

そんな西村先生の言葉に、私は「え？」となります。ああ、そういえばそうだった。

「今日も遅しい筋肉ですね？」

「お前は遅刻の謝罪より、俺の筋肉の遅しさのほうが重要なのか？」

あ、そっちでした……。おいしい、ケアレスミスなの。

「でも先生。私はそんなに遅刻はしませんよ？」

むしろ遅刻する方が珍しいです。

「遅刻はな……。それはそうと、受け取れ」

そう言うと、西村先生は持っている箱から封筒を一つ取り出しました。その封筒には『高町なのは』、つまり私の名前が書かれていました。

「あゝ……高町」

「はい？」

封筒を開けようとしたら西村先生が声を掛けてきます。何でしよう？

「俺は去年のお前を見てきて、もしかしたら高町はいい奴だが馬鹿なんじゃないか？　と言う疑いをもっていたんだ」

「それは大変な思い違いです。私、結構頑張ったんですよ？」

振り分け試験も、その前の勉強も私は頑張りました。親友のフェイトちゃんとはやてちゃんにちゃんと教わったから、今回のテストはすごく自身があるの。私の得意科目の数学は元より、フェイトちゃんからは英語と現代社会を。はやてちゃんからは現代文と古典、あと保健体育を教わったから、きっと私はかなり上の方にいるはずなの。そりゃ、AクラスやBクラスはムリかもしれないけど。たぶんDクラス、もしくはCクラスくらいかな？

「ああ。そうかもな……。先生は間違っていた」

「そうですよ」

あ、封筒がやっと開いた。えーと、私のクラスは……

「高町、お前はバカじゃない」

『高町なのは Fクラス』

「高町……お前は大バカだ」

こうして、私の新たなクラスでの生活は始まったのでした。

バカと自己紹介とFクラス <前編>

バカテスト 国語

問 以下の意味を持つことわざを答えなさい。

『(1)得意なことでも失敗していしまうこと』

『(2)悪いことがあった上に更に悪いことが起きる喩え』

姫路瑞希の答え

『(1) 弘法も筆の誤り』

『(2) 泣きっ面に蜂』

フェイト・T・ハラオウンの答え

『(1) 河童の川流れ』

『(1) 踏んだり蹴ったり』

教師のコメント

正解です。他にも(1)なら『猿も木から落ちる』、(2)なら『弱り目に祟り目』などがありますね。

土屋康太の答え

『(1) 弘法の川流れ』

教師のコメント

シュールな光景ですね。

吉井明久の答え

『(2) 泣きっ面蹴ったり』

教師のコメント

君は鬼ですか。

高町なのはの答え

『(2) 泣きっ面にスターライトブレイカー』

教師のコメント

あなたは悪魔ですか。

~~~~~

「なんだろう、このボロボロの教室……」

『2-F』と書いてあるクラスを示すプレート（それも良く見れば『F』の下から『E』が見えるの）を見て、私は呆然と呟きました。ここが旧校舎なのは知ってるけど、これはいくらなんでもボロ過ぎな気がします。というか、教室より廃屋と言った方がぴったりに来る気がします。

「これが格差社会なんだね……」

私は目の前の現実には、ただそう呟くしかありませんでした。

「まあ、駄々こねても始まらないし……」

私はそう決心して教室の戸に手を掛け開きます。

「すいません、遅れました」

「早く座れ、このうじ虫野郎」

え……？

私は思わず鞆を落としてしまいます。そりゃそうでしょう。いき

なりそんなこと言われれば、誰だって傷つくし、ショックを受けます。

「な……お、女……？」

私にうじ虫と言った人は、私を見てなにか驚いています。というか、よく見れば教壇に立っているのは制服を着ています。ということはこの人、男子……？ いや、よく見ればこの人、明久君の友達の確か……坂本雄二君だったかな？

そんなことを考えながら、私の中にふつふつと何かが沸いてきます。確かに、遅刻してきた私にも原因あるかもしれませn。でも、いきなりうじ虫は酷いと思います。それに、私は女の子だよ？

「ねえ……君、坂本君だっけ？」

「あ、ああそうだが……」

「おかしいな……どうしちゃったのかな……？ そりゃあ、遅刻した私にだって非はあるよ？ でも、いきなり女の子に『うじ虫野郎』だなんて……それに、私は女の子だよ……？ 女の子に『野郎』なんて使うの……？ 私は少しだけど誠意を込めていったんだよ……？ それなのに、『うじ虫野郎』だなんて……。それじゃあ、誠意込める意味、無いじゃない……」

「あ、いや……それはその……別におま……君……あなたを悪く言おうとしたわけじゃ……」

「少し……OHANASHIしょっか……？」

そう言って私は坂本君の肩にポンツと手を置く。そう、別にこれはお仕置きじゃない。OHANASHIだもん。だから笑顔でなくっちゃ。あれ……？どうして坂本君、顔がムンクみたいになってるの……まあ、いっか……。

「お前……まさか、高町なのはか！？ちょ……まてっ！悪気は無かったんだ！は、話し合おう！！」

「だから言っただじゃない……OHANASHIしよって……？」

全く。坂本君は何を言ってるんだろう？さっきからそう言ってるのに……

「いや分かったから！！謝れってんなら謝るから！！だからやめ……って、おま！！その杖しまえ！！というかこの小説じゃお前は普通の人の設定だろ！！？なんでそんなものあるんだ！！？ちょ、やめ……あ、ああああああああああああっっ！！！！！！」

~~~~~

「すいませーん、遅れちゃいましたー」

そんな風におどけた様に僕、吉井明久は教室に入った。それにし

ても、流石は最低クラスの教室。教室と言うより廃屋と言ったほうがしっくり来る。

「おお、明久ではないか」

そこに僕に話しかけて『だからちよ……ま……!!』くる声がつ。声『防御打ち抜いて、魔力ダメージでノックダウン。逝けるね、レイジングハート?』のした方を向くと、そこには僕の親『Yes! Here we go!!』友である木下秀吉の姿があった。うん相変『おおい、頼むからちよと待ってくれ!』というかなんだこれ!? バインド!?』わらず可愛い……って落ち着け、吉『全力ウ! 全ッ開!!』井明久! アイツは男だぞ! そ『ま、待ってくれ! ホントに悪かったから……!!』れにしても、今日も元『スターライオトオ!!! ブレイカァー……!!!』氣に性別の垣根『だああああああっ!!』を曖昧にする秀吉『ブレイクウツシュー……トッ!!!!!』もFクラスか……ひょっとして『チュドオオオオオオオオオンッ!!』、他にも知り合いがいるかもしれないな。それにしてもうるさいな。

ドサッ!

「あれ、雄二? それになのはも」

後ろを振り向くと、そこには去年からの悪友と、昔からの付き合いである幼馴染がいた。それより……

「雄二、どうしたの? そんなにこんがりと焼けて。日焼けサロンにでも行ったの?」

「どこをどうすりゃこんなにこんがりと焼けるんだ、ボケッ!!」

こんがりと焼けた悪友は、そう言ったのだった。

バカと自己紹介とFクラス <後編>

「はい、それではみなさん。自己紹介から始めたいと思います」

あの後教室にやって来た先生、福原先生によってFクラスの少しばかり遅いHRはスタートしました。

「まずは廊下側の人からお願いします」

そんな福原先生の言葉を合図に、一人の生徒が立ち上がります。
あれ、あの子は？

「木下秀吉じゃ。演芸部に所属しておる」

やっぱり、秀吉ちゃんだ。それにしても、去年から思っていたことだけど秀吉ちゃんってなんで男子の制服を着てるんだろ？生徒手帳には『女子が男子の制服を着ていい』なんて校則は書かれてないはずなのに。……ん？なんだか視線を感じるの。

「えゝゝ土屋君。高町さんのスカートの中を覗いてないで自己紹介をお願いします」

「えっ!？」

私が下を向くと、そこには色白の男子、土屋康太君ことムツツリーニ君がいました。

「えゝっと、ムツツリーニ君？」

「……覗きなんてしてない」

まだ何も言っていないよ？

「覗いてたでしょ？」

「……覗いてない」

「……今日の私の下着の色は？」

「赤のワンピースのついたライトピンク」

……………語るに落ちるってこのことを言うのかな？

「……！！……今のは適当」

そう言ってプイッとそっぽを向くムツツリーニ君。

「本当に適当？」

「……適当」

「本当に覗いてないの？」

「……俺ほどの紳士はこの世にいない」

どんな紳士なの、と思ったけど。それなら……

「そうなんだ、じゃあ、Hなことには興味ないんだ？」

「……当然」

「女の子の下着にも？」

「……興味ない」

そっか……。それじゃあ、

「あーっ！フェイトちゃんのパンツがーっ！」

「……（クワッ！）」

次の瞬間、ムッツリーニ君は窓から身を乗り出してあちらこちらを見る。ううん、ムッツリーニ君だけじゃなく……

『なに！テストロッサさんのパンツだと！？』

『なんだ！？パンツがどうなったんだ！？』

『お前等どけっ！テストロッサさんのパンツは俺のものだ！』

次々に窓から身を乗り出すFクラス男子のみんな。というか……

『え！何々！？パンツがどうしたの！？』

……アキ君……

私は、幼馴染の行動に、呆れるしかありませんでした。

ちなみに、ムッツリーニ君はあその後で私とOHANASHIした

ときなんとなくパンツを見つけてどうするつもりだったのか聞いてみると、『本人に返してあげるつもりだった』そうです。……嘘つき。

~~~~~

紆余曲折はあったものの、何とか自己紹介は再開した。（ムッツリーニはあの後黒焦げになって戻ってきた）

さて、何はともあれ自己紹介はそのなの番。

「始めまして、高町なのはです。テニス部に所属してます。一年間宜しく願います」

そう言ってペコリと頭を下げる。こうしてると可愛いんだよね。

『おい、高町って……』

『ああ、テニス部のエースオブエース……』

あちこちでもそんなのはの事でひそひそと話しをしてる。

さて、次は僕か。これから一年間共に戦っていく仲間達だしっかり覚えてもらおう。そのためにはインパクトだよね。

「えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って読んでくださいね？」

『『『『ダアアーーーーーリイーーーーンッッ!!』』』』

次の瞬間、むさい男達の大合唱。これはこの上なく不愉快だ。

「すみません、忘れてください。とにかく一年間よろしくお願いします」

そう言ってさっさと席に戻る。ちなみに席は窓側の一番後ろだ。

それにしても、女子がいないなあ……

なんて思ったとき、教室のドアがガラリと開かれた。そして、

「あの、遅れて、すみま、せん……」

彼女、姫路瑞希さんは教室に入ってきた。

## 戦いの切っ掛けは差別なの？

「ああ、ちょうど良かったです。姫路さんも自己紹介をお願いします」

「は、はいっ。姫路瑞希と言います。よろしくお願いします……」

小柄な身体を、更に縮こませるようにして声をあげる瑞希ちゃん。

「はい、質問です！」

すると突然、一人の男子が声を上げます。まあ、なんとなく何を言いたいかは分かるけど。

「何でここにいるんですか？」

傍から見たら失礼なこの質問。でも、別に不思議ではありません。だって瑞希ちゃんは定期テストでは常にトップ5にランクインするほど成績がいいですから。誰だって瑞希ちゃんはAクラスに配属されると普通は思ってますから。実際、私だって事実を知らなければ驚いてるはずですよ。

「えっと実は……試験中に熱を出して途中退席しまして……」

モジモジとそう答える瑞希ちゃん。すると……

『そういえば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに……』

『ああ、化学だろ？ あれは難しかったな』



『俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力を出し切れなくて……』

『黙れ一人っ子』

『テストの前の晩、彼女が眠らせてくれなくて』

『今年一番の大嘘をありがとう』

あちらこちらから出てくる言い訳の数々。これは予想以上にバカだらけなの。

「そ、それでは今年一年宜しく願います！」

そんな中、逃げるように私とアキ君の間の席に着く瑞希ちゃん。こうして見ると、同じ女子としても可愛く見えます。

「き、緊張しました〜」

そう言って卓袱台に突っ伏す瑞希ちゃん。声ぐらい掛けてあげようかな？

「「瑞k……」」「姫路」

ちょ、誰なの？人が話しかけようとしたら横から割り込んでくるのはっ！

「は、はいっ。何ですか？えーっと……」

「坂本だ。坂本雄二。よろしく頼む」

「あ、姫路です。よろしくお願いします」

そう言って深々と頭を下げる瑞希ちゃん。やっぱり育てがいいなあ。

「ところで、姫路の体調はいまだに悪いのか？」

「あ、それは僕も気になった」

と、アキ君がそれに乗じて聞いてきます。やっぱり心配なんだね。

「あ、明久君!？」

「姫路、明久が不細工ですまん」

坂本君……フォローになってないよ、それ……。

「そ、そんな! 目もパッチリしてるし、顔のラインも細くて綺麗だし、全然不細工なんかじゃないですよ! その、むしろ……」

「そう言われると、確かに見てくれは悪い顔をしてるかもしれないな。俺の知人にも、明久に興味を持ってる奴がいた気がするし」

なんて事を言う坂本君。へえ、アキ君に興味を持った人啊。誰だろ？

「確か、く「ねえ、坂本君」な、なんだ高町？」

「その人って、まさか同性とかじゃないよね？もしそうだったら…」

本日三度目のスターライトブレイカー。頑張らなきゃね。

「あゝその、すまん姫路。俺の勘違いだったと思う。うん、俺の勘違いだ！」

「そうですか（……よかった）」

ホッとする瑞希ちゃん。それにしてもあの坂本君の様子。絶対男の子の名前を言うつもりだったと思うな。

「あれ……な、なのはちゃん!？」

あ、ここでもうやく私に気がついてくれたみたい。

「やつほー瑞希ちゃん。ところで、話がそれちゃったから聞けなかったけど体調はどう？大丈夫？」

「あ、そうだった。どうなの、瑞希ちゃん」

「あ、はいっ。もう大丈夫です。お騒がせしました」

「そっか、それなら良かった。いやゝ春休み中アキ君がずっと心配しててさゝ」

春休み中、アキ君ずっと心配してたんだよね。

「ちょ、なのは！なに人の秘密を喋ってるのさ!？」

「えーその人達、少し静かにしてください」

と、そこで福原先生が教卓をばんばんと叩いて警告をしてきた。

「あ、すいませー」

バキィッ バラバラバラ……

突如、教卓がゴミ屑になってしまいました。まさか少し叩いただけでこうなるなんて……

「えー替えを持ってきますので、自習しててください」

そう言って教室を出る福原先生。

「すごい設備……当然酷い方で」

「あはは……コホッコホッ！」

すると、埃でも吸い込んだのか瑞希ちゃんが咳き込みます。

これは……もはや学校設備とは呼べないと思うなあ……。いくら最低設備だからってこれはやり過ぎな気がするよ。

『……………。雄二、ちょっといいかな?』

『なんだ、明久?』

『ここじゃ何だから』

『わかった……』

と、なにやらアキ君が坂本君に話しかけています。何でしょう、  
一体？

## 戦争と引き金と決意表明（前書き）

久々に投稿します。

## 戦争と引き金と決意表明

バカテスト 英語

問 以下の英文を訳しなさい。

[This is the bookshelf that my  
grandmother had used regularly  
]

姫路瑞希、フェイト・T・ハラオウンの答え

「これは私の祖母が愛用していた本棚です。」

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。

土屋康太の答え

「これは

」

教師のコメント

訳せたのはThisだけですか。

高町なのはの答え

「それは

」

教師のコメント

Thisくらい訳せるようになりました。

吉井明久の答え

「☆●◆▽?♪※×

」

教師のコメント

できれば地球上の言語で

~~~~~


「それでは最後に坂本君、自己紹介をお願いします」

「りょーかい」

そう言って坂本君は教壇に立ちます。そういえば……

「アキ君。さっき坂本君と何を話してたの？」

「ん？ああ、すぐに分かるよ」

「???」

アキ君の思わしげな言葉に私は首を傾げます。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも好きなように呼んでくれ。……さて、みんなに一つ聞きたい」

そう言って坂本君は視線を教室の設備に移していきます。

――かび臭い教室

――古く汚れた座布団

――薄汚れた卓袱台

「Aクラスは冷暖房完備の上に座席はリクライニングシートらしいが……」

『勝てるわけが無いだろう』

『これ以上設備が落とされるなんてイヤだ』

『姫路さんがいれば何もいらぬ』

『高町さんがいればそれでいい』

『木下がいればご飯七杯はいける』

やっぱりアチコチから否定的な言葉が聞こえてきます。まあ、最後の三つは明らかに違いますが……。

「安心しろ。勝てる根拠と可能性があるからこんなことを言うんだ」

『勝てる根拠……だと？』

『可能性だと……？』

「ああ。それを今から説明してやる」

そう言って、坂本君はにやりと笑ったのです。

……まるで悪人風に。

使用者は危険がいっぱいなのか？（前書き）

久々の投稿です。

使者は危険がいっぱいなのか？

「さて、まず一つ目の根拠だが……」

そう言って坂本君はこちらに視線を向けます。……？

「おい康太。畳に顔つけて姫路のスカートの中を覗いてないでこっちに来い」

「……………！！（ブンブン）」

「は、はわっ」

必死になって顔と手を左右に振り否定のポーズをとるムッツリーニ君。ムッツリーニ君、君って人は、さっきOHANASHIをしたばかりなのに。

そんなムッツリーニ君は顔についた畳の跡を隠しながら壇上へ歩き出した。それにしても、あそこまで恥も外聞もなく低い姿勢から覗き込むなんて、ある意味では感心するの。

「土屋康太。コイツがあ有名な、寡黙なる性識者だ」
ムッツリーニ

「……………！！（ブンブン）」

土屋康太という名前はそこまで有名じゃない。でも、ムッツリーニという名前は別。その名は男子生徒には畏怖と畏敬を、私達女子生徒には軽蔑を以って挙げられる。

『ムツツリーニだと……?』

『バカな、奴がそうだというのか……?』

『だが見ろ。あそこまで明らかな覗きの証拠をいまだに隠そうとしているぞ……』

『ああ。ムツツリの名に恥じない姿だ……』

そんな会話が聞こえてきます。そんな中で畳の跡を手で押さえる姿が果てしなく哀れを誘うの。

「???」

隣では瑞希ちゃんが頭に多数の疑問符を浮かべていました。

もしかして、彼のあだ名ムツツリーニの由来が分からないとか?別にただの『ムツツリスケベ』なんだけど。

「姫路のことは説明するまでもないだろう。皆だってその力はよく知ってるはずだ」

「えっ?私ですか?」

「ああ。ウチの主戦力だ。期待している」

確かに、試召戦争では彼女ほど頼りになる戦力はいないだろうな。

『そうだ。俺達には姫路さんがいるんだった』

『彼女ならAクラスにも引けをとらない』

『ああ。彼女さえいれば何もいらない』

誰でしょう、さっきから瑞希ちゃんにラブコールを送っているのは？

「木下秀吉だっている」

木下秀吉。彼女（あれ？『彼』だっけ？）は学力ではあまり名前を聞かないけど、ほかの事で有名なの。演劇部のホープとか、双子のお姉さんのこととか。

『おお……！』

『ああ。アイツ確か木下優子の……』

「高町なのはもいる」

え、私？

『そうだ、彼女もいるんだ』

『ああ。テニス部のエースオブエース』

『え？エースオブエース？『文月の白い魔王』『冥王の嫁』じゃなくって？』

『なんだそりゃ？』

『いや、いつも試合で相手を弄るだけ弄って最後に相手の顔面にトドメの一撃を叩き込むので有名なんだけど……』

『うわ……………』

変な二つ名を言った子。後でO☆H A☆N A☆S H Iしよっか？

「当然俺も全力を尽くす」

『確かになんだかやってくれそうな奴だな』

『坂本って、小学生の頃は神童とか呼ばれてなかったか？』

『それじゃあ、振り分け試験の時は姫路さんと同じく体調不良だったのか』

『実力はAクラスレベルが二人もいるってことだよな！』

いけそうだ、やれそうだ、そんな雰囲気は教室に満ちていました。

そう。気がつけば、クラスの士気は確実に上っていた。

「それに、吉井明久だっている」

……シン————

そして一気に下がるの。

「ちょっと雄二！どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ！まったくそんな必要ないよね！」

となりではアキ君が席を立てて叫んでいます。

『誰だよ、吉井明久って』

『聞いたこと無いぞ』

「ホラ！せっかく上りかけてた士気に翳りが見えてるし！僕は雄二と違って普通の学生なんだから、普通の扱いを——って、何で僕を睨むの？士気が下がったのは僕のせいじゃないでしょう！」

「そうか。知らないなら教えてやる。こいつの肩書きは《観察処分者》だ」

「……それって、馬鹿の代名詞じゃなかったっけ？」

誰かがそんな致命的な一言を口にします。

「ち、違うよ！ちょっとお茶目な十六歳に付けられる愛称で」

「そうだ。馬鹿の代名詞だ」

「肯定するな、バカ雄二！」

「そうです。そんなこと言っちゃ駄目だと思います」

と、アキ君のそれに乗るように瑞希ちゃんが言ってきます。
そんな言葉を聞いて、坂本君は驚いた顔をしています。まあ、当然

でしょう。頂点に近い場所にいた瑞希ちゃんにはこの単語はなじみない筈ですから。

「姫路。お前観察処分者のこと、っていうか明久が観察処分者だっ
て知ってたのか？」

「はい。去年私もその件に関わっていたので」

「そうなのか？」

「はい」

「ちなみに、私もそのことは知ってるよ」

念のため、私もそう言っておきます。

『なあ。それはそうと、観察処分者って何なんだ一体？』

「ん？ああ、それは「まって」な、なんだ高町？」

「それは私が話すよ。坂本君が話したら有ること無いこと余計なこ
とまで言いそうだし」

「ぐっ……」

坂本君の言葉を遮り、二の句を告げられないようにあらかじめ言
っておく。これでよしなの。

「さて、それじゃあ話すけど。観察処分者ってのは、具体的に言
うか簡単に言っていると教師の雑用係かな？力仕事とかそういった類の仕

事を、特例として物理干渉……もとい物に触れるようになった試験召喚獣でこなすといった具合ね」

そう、本来なら召喚獣は物に触れることができない。彼らが触れることができるのはお互いの召喚獣だけ。要するに、幽霊みたいなものかな？まあ、学園の床には特殊な処理が施してあるらしいから立つことはできるみたいだけどね。

『へえ……それってすごいんだな？』

『ああ。確か召喚獣って一桁だけでもかなりのパワーを出せるらしいぜ？』

『それが物理干渉できるんならすごいよな』

辺りから関心するような声が聞こえてきます。

「まあ、教師が承認しないと呼べないし、なにより痛みとか疲れとかがフィードバックされるんだけどね。何割か」

『おいおい。ってことは、観察処分者は試召戦争でそう簡単に召喚できないってことじゃねえのか？』

『だとしたら役立たずじゃねえか』

『なるほど、吉井はオチか』

「それは違いますよ」

今度は瑞希ちゃんが声を上げます。

「確かに観察処分者の召喚獣はそう簡単に召喚はできませんけど、そのかわり何度も召喚獣を操作してるので操作に慣れてるんです。明久君は何度も観察処分者の仕事をやってますから操作技術はかなり高いんです。多分、学年のトップクラスだと思いますよ？」

「そう。アキ君の強みは成績じゃなくて召喚獣の操作技術。多分だけど相手の点数が三〜四倍くらいなら対等に戦えると思うよ？」

『そうなのか……吉井ってすげえんだな？』

『ああ、俺達なら同じ点数の奴らでやっとなのはずだし……』

『そうか、だから坂本は吉井の名前を挙げたのか』

あちこちからアキ君の評価がいいほうに変わっていくのが分かります。よかったです。

「はい、それじゃあ坂本君。あとよろしく」

そう告げて私と瑞希ちゃんは席に戻ります。戻るとアキ君が私達に「ありがとう、ほんつとにありがとう」と頭を下げてきましたもう、別に気にしないでいいのに。

「とにかくだ。俺達の力の証明として、まずはDクラスを征服してみようと思う。みんな、この境遇は大いに不満だろう？」

『『『『当然だっ！』『』『』『』』』』

「ならば全員ペンを執れ！出撃の準備だ！」

『『『『『おおーッ!!』』』』』

「お、おー……………」

クラスの雰囲気には圧されたのか、瑞希ちゃんも小さく握りこぶしを作っていました。

「よし、明久にはDクラスへの宣戦布告の使者になってもらう。無事に大役を果たせ!」

「……下位勢力の宣戦布告の使者って大抵酷い目に遭うよね?」

「大丈夫だ。だまされたと思って逝ってみろ」

字が違う気がします。

「本当に?」

「もちろんだ。俺を誰だと思っている」

「えーっと、穴掘りシ○ン?」

「そうじゃねえ。とりあえず逝け」

しょうがない。ここは一つ……

「ちょっと待ってられない、坂本君」

「な、なんだ高町?」

「アキ君にはちょっと用事があるから宣戦布告の使者はやれないと思うの」

「じゃあ、誰がやるんだよ？」

「えーっとね……あ、その君」

手近にいた男子を呼び止める。

「えっと、何？」

「お願いがあるの」

「お願い？」

「うん。あのね……」

上から目線にして、胸元を強調して……

「宣戦布告の使者、やってくれる？」

「須川亮、突貫します!!」

効果絶大。自分でやっというのもおかしいけど、ここまで効果があるなんて……

ダダダダダダッ！ガラッ！

『俺達Fクラスは、Dクラスに対して試験召喚戦争を仕掛ける!』

『なんだと!?!』

『Fクラスの癖に生意気なんだよ!』

『やっちなえ!』

『来るなら来やがれ!俺には、絶対勝利の女神がついとるんじゃあ
ああああああああっ!!』

そんな騒ぎが聞こえたのは、ほんの数秒後のことでした。

戦いと理由とブラスタモード

バカテスト 数学

以下の問に答えなさい。

『(1) $4 \sin X + \cos 3X \parallel 2$ の方程式を満たし、かつ第二象限に存在する X の値を一つ答えなさい。

(2) $\sin(A+B)$ と等しい式を示すのは次のうちどれか、
 ？　？　？の中から選びなさい。

$$\sin A + \cos B$$

$$\frac{\sin A}{\sin B}$$

sin A cos B

$$\sin A \cos B + \cos A \sin B$$

姫路瑞希、高町なのはの答え

$$\neg \bigwedge_{X \parallel \pi} \frac{1}{6}$$

(2) ?

教師のコメント

そうですね。角度を『 θ 』ではなく『 π 』で書いてありますし、完璧です。ただ、高町さんはこれ以外の教科もちゃんと答えられると嬉しいです。

土屋康太の答え

『XⅡおよそ3』

教師のコメント

およそをつけて誤魔化したい気持ちは分かりますが、これでは解答に近くても点数はあげられません。

吉井明久のコメント

『(2) およそ?』

教師のコメント

先生は今まで沢山の生徒を見てきましたが、選択問題でおよそをつける生徒は君が初めてです。

さて、須川君の宣戦布告から約三時間後。私たちFクラスとDクラスとの試験召喚戦争はスタートした。

……したんだけど。

「坂本君。私と瑞希ちゃんは前に出なくていいの？」

そう、私と瑞希ちゃんは本陣待機しているの。

「これでいいんだよ。お前や、特に姫路がこのクラスにいることはギリギリまで隠しておく必要がある。お前は他はともかく、数学の成績は学年トップクラスだからな。そして、姫路は総合で学年トップクラスだ。だから、お前らのことは隠す」

「でも坂本君。前線は大丈夫なんですか？」

そんな瑞希ちゃんの言葉に、坂本君は「大丈夫だ」と言って頷く。

「元々、こっちは向こうよりも点数が全体的に低い。おそろく向こうはいきなり全員で掛かってくることは無いだろうからな。というか、前線はある意味じゃ時間稼ぎみたいなもんだ」

「時間稼ぎ……って？」

「文字通り、時間を稼ぐことだ」

「そういう意味じゃないよ！聞きたいのは時間稼ぎの意味じゃなくて、どうして時間稼ぎをするのかって事！」

「なんだ、意味は分かってるのか？」

坂本君が普段どういう目で私を見てるのか小一時間ほど問い詰めた気分なの。

「ま、理由は簡単だ。さっきも言ったとおり、こっちは向こうより点数が低い。向こうから見れば俺達Fクラスはザコだと思ってるんだろう。ところが、そんなザコにいつまでも時間を掛ける結果となれば、やがては苛立ち、痺れを切らして向こうの本隊、そして代表が出てくる。あとは簡単だ、出せる戦力を出し、Dクラス代表の平賀へと道を作る。そして、その道を姫路が通り平賀に勝負を仕掛ける。それで、勝負は決まる」

なるほど。こっちに瑞希ちゃんがいるなんて向こうは思っていないからこそその作戦か。もしかしたら『Aクラスの瑞希ちゃんがこの場所を偶々通りかかっただけ』なんて思ってたっさり通れちゃうかも……あれ？

「ねえ、そこは瑞希ちゃんじゃなくて私のほうがいいんじゃない？だって、瑞希ちゃんの方が成績はいいんだし普通は瑞希ちゃんを隠すのが得策じゃない？」

「普通ならってか、今やってるフィールドが数学で固定されて変化しないならそうするんだがな。……高町。お前数学を除いてら総合点数いくつだ？」

「え……………、あ、あと一点なの！」

そう、後一点で……！

「三桁になるの！」

「すっこんでろ、ザコ」

「あはは……」

あれ？ なにかおかしかった？

「ま、とにかく。フィールドが数学で固定されない以上、この場は姫路が適任だ」

なんて話をしていたら……

『死になさい、吉井明久！ 試獣召——』

『誰か！ 島田さんが錯乱した！ 本陣に連行してくれ！』

『島田、落ち着け！ 吉井隊長は味方だぞ！』

『違うわ！ コイツは敵！ ウチの最大の敵なの！ くら、放しなさい須川！ 吉井！ 絶対に許さないからね！』

『は、早く連れてって！ なんかその禍々しい視線だけで殺されそうだ！』

『ちょっと、放し——殺してやるんだからあ————っ！』

そんな会話が聞こえました。そっか、そうなんだね？

さーてと、準備しなきゃね？OHANASHIの。

「あー、高町？」

「なあに、坂本君？」

「あー、その……ブラスター2までなら、その、許す」

「うん、分かった♪」

さてと、カートリッジは……あ、よかったまだ五本ある。

「さてと、しっつつかりOHANASHIしなきゃね、レイジングハート？」

<Y……Yes! my master!!>

さーて、OHANASHI、悪破無死^{おはなし}♪

「いつだって～どんな時だって～なのはさ～ん手加減な～し～し～し」
♪」

そんな歌（曲名、『ナノハサンは手加減無し（はあと）』（自作））を歌いながら私は教室を後にしたのでした。

決戦！終結Dクラスなの！（前書き）

こっちはネタっていうか話の基盤はあるので結構書きやすい……つと、Dクラス戦終結です！

決戦！終結Dクラスなの！

「さて、島田さん？しっかりとOHANASHIしよっか？」

そう言っレイジングハートて私は島田さんに相棒をチャキリと向ける。

現在Dクラスとの試召戦争中。

そんな中、私は島田さんと空き教室に来ていた。

え、理由？そんなの決まってるじゃない？

「ちょ、ちょっと待ってよ！？ウチが何したって言うの！？？」

「自覚が無いんだね？」

可哀想になの。でも、安心して？

「疑問に思ったことすら忘れさせてあげるから（はあと）」

「ひiiiiiiiiiiiiっ！！？？」

<Good luck, Miss Shimada……>

「ちょっとおおおおおっ！アレはむしろ被害者はウチよ！悪いのは吉井！」

ふーん。そんなこと言うんだあ？

「嘘はいけないよ？嘘は？」

「ほ、ホントよ！現に吉井はウチを見殺しにしようとしたのよ！？」

「本当……？」

「ほ、本当よ！」

そこまで言われて、私は少し思案する。うーん、本当かなあ？

ガシヤアアンツ！

すると、どこからか何かが割れる音が聞こえてきました。何？何なの？

『な、なんだ！？なにごとだ！？』

『うわっ！島田さん！そんな物をどうする気だよ！』

そんなアキ君言葉が聞こえてきました。あれ？うちのクラスに島田って苗字の人、もう一人いたっけ？

「ウチしかいないわよ！Fクラスに島田は！」

アキ君ったら、何言ってるんだろう？島田さんの言うとおりなら、なんでそんなこと……

ブシャアアッ！

今度は景気のいい音が聞こえてきます。この音、消火器？

『う、うわっ！何だ！？』

『ぺっぺっ！こりゃ消火器の粉じゃねえか！』

『前が見えない！』

『島田さん、君はなんてことを！』

『Fクラスの島田め！なんて卑怯な奴なんだ！』

『許せねえ！彼女にしたくないランキングに載せてやるからな！』

『そうだ！在学中は彼氏のできない状況にしてやる！』

『……でも、男らしくてステキ……。お姉さま……』

そんな一連の会話が聞こえていたのです。

「……………」

「……………ね？ウチじゃないでしょ？さっきのも全面的に吉井が原

「因よ」

「わかった。しょうがないから……」

本当にしょうがないから今回は、

「デイベインバスターで勘弁してあげる」

「結局はこうなるの!？」

何言ってるの? これでも譲歩したんだよ?

「(ま、あとでアキ君にもちゃんと言っておかないとね?)」

そう思いながら、私はカートリッジを五連発でのデイベインバスターを発射したのでした。

それから間もなくして、瑞希ちゃんがDクラス代表の平賀君を打ち倒し、この戦争がFクラスの勝利で終わったことを私は知ったのでした。

弁当と微少年と宣戦布告（前書き）

さて、お待ちせしました。ついに彼女が登場です。

弁当と微少年と宣戦布告

バカテスト 物理

問 以下の文章の（ ）に正しい言葉を入れなさい。

『光は波であって、（ ）である』

姫路瑞希、フェイト・T・ハラオウンの答え

『粒子』

教師のコメント

よくできました。

土屋康太の答え

『寄せては返すの』

教師のコメント

君の解答はいつも先生の度肝を抜きます。

高町なのはの答え

『破滅の殲光』

教師のコメント

君の解答はいつも先生の肝を冷やさせます。

吉井明久の答え

『勇者の武器』

教師のコメント

先生もRPGは好きです。

~~~~~

さて、Dクラスとの試召戦争が終わった翌日。今日からDクラス設備といきたい所なんだけど、残念ながら私たちのクラスはFクラス設備のまま。

え、理由？それはまあ、坂本君曰く目標はDクラスじゃなくAクラスだからと、Dクラス設備になることで戦争を反対する人をなくすためみたい。あと、次の戦争に必要なんだって、Dクラスが。

いったい、どうする気なんだろう……？

そんなことを考えながら、午前は過ぎていった。その間、私たちは総合科目のテストを受けて、消費した点数を補充した。

そして、お昼休みとなった。

「うあー……づがれだー……」

昼休み開始のチャイムが鳴ると同時に、アキ君は卓袱台に突っ伏す。まあ、実際私もそうしたい気分なんだよね。

「うむ、疲れたのう」

そう言ってアキ君の言葉に賛同する秀吉ちゃん。今日はポニーテールかー。女の子っぽくていいね、それ？

「……………（コクコク）」

ムツツリーニ君も同じみたいだね、どうやら。

「よし、昼飯を食いに行くぞ！今日はラーメンとカツ丼と炒飯とカレーにすっかな」

そう言って勢いよく立ち上がる坂本君。それにしても、その昼食のメニュー……身体に悪いよ？そんなに炭水化物を摂ってると。

……それはそうと、

「みんな、忘れてない？昨日のこと」

そう言うのと、皆が振り返る。

「昨日って……ああ、約束の弁当か？」

そう。昨日の帰り、たまたま食事の話になって、私の料理の腕を見せるために今日は私が皆にお弁当を振舞うことにしたのです。

「そういうこと。どう？皆で屋上にでも行って食べない？」

「ふむ、それもいいのう」

「異議なーし」

「……問題ない」

「そんじゃ、ご馳走になるとするか」

みんな私の誘いに同意してくれたみたい。よかったの。

「あの……みなさん」

すると、瑞希ちゃんが持ってくる。あれは……まさかお弁当の包み？

「私も、作ってきました。宜しければ私のもどうぞ？」

そう言って包みを渡す瑞希ちゃん。それはそうと……。

「瑞希ちゃん、その……大丈夫？その、いろいろと？」

「だ、大丈夫ですよ！もう………塩酸とか酢酸とか青酸とか硝酸カリウムとかはいれてませんよ！」

「待て姫路！それは料理に入れる物じゃないだろう！？」

瑞希ちゃんのあまりな発言に、坂本君は驚愕するしかありませんでした。

~~~~~

|| 同時刻、翠屋 || ||

「ブツブツブツブツ………」

その男、高町士郎は厨房を見ながらブツブツと呟いていた。その様子はハッキリ言って……あぶない。

場所が場所なら、間違いなく110番されることは間違いないだろう。そのくらい危なかった。

「……なのはが……あんなに張り切って、弁当を……一体、誰のために……？」

士郎の脳裏に映るのは、エプロンをして、一生懸命お弁当を作っている娘、なのはの姿だった。

「ちょっとアナタ。早く仕事してください。もうすぐお昼のピークが来るんですから」

そう言って士郎に文句を言うのは一人の女性だった。

高町桃子。なのはの母親である。

ところが、当の士郎はそんな妻の言葉など耳に入りはしない。それぐらい……やばかった。それはもう、警察どころか精神科に連れてった方がよくね？と思うくらい。

「なのはが、なのはが、な・の・は・が・あああああああああああ
ああーーーーー！！！！！！！！！！」

そうこうしている内に士郎の妄そ、もとい想像はどんどん膨らんでいく。ついには、どこをどうすればそうなるのか、なのはは子供が沢山いる大家族の母親になるまで妄そ、想ぞ、幻覚はレベルアップしていた。

「どうしよう桃子！ついに十人もの孫がいる祖父になってしまった
！！！」

「いったいどういう経緯をたどればそうなるの！？」

夫の言葉に、彼女はただ驚愕するしかない。

今日も翠屋は、ある意味ではいつもどおりだった。

~~~~~

「はい、それではどうぞ？」

そう言って私はお弁当箱の蓋を開ける。

「それでは私も……」

そう言って瑞希ちゃんも蓋を開ける。

「これは美味そうじゃの？」

「……美味しそう」

「流石だね、なのは」

入っているおかずに、アキ君たちがそれぞれの感想を言う。えへへ、そう言ってもらえると嬉しいな。

「それじゃあ早速<sup>ひょい</sup>あ、ずるいぞムツツリーニ！」

「……パク、もぐもぐ……（グツ）」

するとムツツリーニ君は美味しいの意思表示とばかりにサムズアップ。よかった。

「明久君。私のも食べてください!」

そう言って瑞希ちゃんはお弁当箱をアキ君に差し出す。もう化学薬品は入れてないらしいけど、はたしてその味は……?

「それじゃあ、このエビフライを」

そう言いながらアキ君はエビフライを手取る。そしてまず、匂いを嗅ぐ。それも鼻でくんくんするのではなく、化学の実験で薬品を嗅ぐ時のように手で煽って。

「それじゃあ、いただきます」

匂いは大丈夫そうなのか、アキ君は食べ始める。はたして……!

「(パクツ、もぐもぐ……) お、おいしい……美味しいよ! 瑞希ちゃん!」

「本当ですか? 嬉しいです!」

「前から言おうと思ってたけど、僕前から君のことが好き……」

「明久よ。ここで失敗したら関係が危うくなるぞい?」

「……にしたいと思ってました!」

「アキ君……それじゃあまるで変態さんだよ？」

あ、まるでアキ君が「しまったああああー！ー！」とでも言いたげな顔をしていたのでした。

☆☆☆☆

あらかじめお弁当を食べ終わると、話は試召戦争のことに移ってきました。

「それで雄二、どうするの？」

「次の目標はBクラスだ」

「Bクラス？Aクラスじゃなくて？」

「正直に言おう」

そういうと、坂本君は神妙な顔になりました。

「どんな作戦でも、うちの戦力じゃAクラスには勝てない」

戦う前から降伏宣言。坂本君らしくないな。

とはいえ、無理も無いかな？FクラスじゃAクラスとの差が大きすぎるし、

「もっとも、それはクラス単位ではの話だ。だから、一騎打ちに持

ち込むつもりだ」

「一騎打ち?」

「でも、どうやるの?」

「Bクラスを使う。Bクラスを使って攻め込ませるぞとも言え、向こうはその話に乗ってくる。そうだな、『Bクラスとの勝負直前に攻め込むぞ』とでも言えば何とかなるだろう」

「なるほどのう。じゃが、一騎打ちで勝てるのかのう?」

「その辺に関しては考えがある、心配するな。で、明久」

「ん?」

「今日のテストが終わったら、Bクラスに宣戦布告をしてこい」

「断る。雄二が行けばいいじゃないか」

そう言ってそっぽ向くアキ君。まあ、しかたないよね。

「やれやれ、それじゃあじゃんけんでいいか?」

「じゃんけん?……うーん。OK乗った」

「よし、負けたほうが行く。それでいいな?」

「わかった、それじゃあ行くよ!さーいしょーは……」

「……俺の勝ちだな」

アキ君 パー

坂本君 チョキ

「ば、バカな!？」

「お前の考えなんざ見え見えなんだよ。ホラ、逝ってこい」

だから坂本君、字が違うよ。

「いやだと言ったらいやだ!」

「そうか、残念だな。Bクラスは美少年が好きなんだがな」

「そ、それなら大丈夫かな?」

「でも、お前不細工だしなあ……」

「な、何を言うのさ雄二! 365度、どこから見ても美少年じゃないか!」

365度……

「アキ君、5度多いよ」

「実質5度じゃな」

「……微少年」

「みんな嫌いだ！」

そう言って走り去って行くアキ君。大丈夫かな？

~~~~~

明久SIDE

「まったく、雄二のやつめ……」

僕はあの悪漢に対して不満を抱きながらBクラスに足を運んでいた。

「はあ……。さてと、どうなるかな？」

意を決してドアを開ける。

「すいませーん。Fクラスなんですけど、Bクラス代表はいますかい？」

そんなことを言うと、あちらこちらから視線を向けられる。うう、嫌だな。この視線。

「はいはい。私がBクラス代表の八神はやてやけど、なんか用かい

な？」

そう言って出てきたのは関西弁交じりの女子だった。

「えっと、Fクラスからの使者として来ました」

「ほーシシヤって死者？それとも使者？」

「いちおう使者の方で」

前者はごめんだ。

「それで、なんか用かいな？」

「えーと、僕達FクラスはBクラスに対して試験召喚戦争を仕掛けます」

「試験召喚戦争？……マジで？」

「えーと、はい。マジです」

すると、あちこちから不穏な空気になり始める。これは、ヤバイ！早く逃げる準備をしないと……！

「みんな待ちい。そんなことする必要あらへんよ」

「え？」

「だから、別にボコツたりせえへんってことや」

「ほ、ホントに？」

「せや。ほんなら開戦は明日の午後でええか？」

「え、うん。それでいいよ」

明日の午後か。それなら問題ないだろう。

「ほんなら、また今度な？」

「うん」

「それはそうと、自分、名前はなんて言うん？」

「え？ あ、僕は吉井明久」

「ほお、君がああ……」

「あ、僕がどうかした？」

何だろう、僕何かしたかな？

「ん？ ああ、なんでもあらへんよ。ほな、また明日にな？」

「あ、うん」

そんな会話をして、僕は無傷でBクラスを後にしたのだった。

相手はBクラス、負けられない戦いな

バカテスト 化学

問 以下の問に答えなさい。

『ベンゼンの化学式を答えなさい』

姫路瑞希、フェイト・T・ハラオウンの答え

『C₆H₆』

教師のコメント

簡単でしたかね。

土屋康太の答え

『ベン+ゼン=ベンゼン』

教師のコメント

君は化学をなめていませんか。

吉井明久の答え

『B—E—N—Z—E—N』

教師のコメント

後で土屋君と一緒に職員室に来るように。

高町なのはの答え

『CCCCCHHHHH』

教師のコメント

まだまともな間違いにホッとすべきかどうか悩ましいところです。

|||||

さて、始まりましたBクラス戦。正に桁が違う相手との戦いに、私たちは苦戦しながらも必死に必死に前に進みます。

坂本君の作戦だと、まずは相手を教室に押し込むことらしいの。だから、この廊下での戦いは絶対に負けられないの！

「高町さん！そっちのフォローをお願いします！」

「うん、分かった！」

Bクラスの生徒を相手にしながら須川君の言葉を聞いて私は崩れそうになってる戦線のフォローに向かう。

「Fクラス高町なのは、行きます！試獣^{サモン}召喚！」

Fクラス 高町なのは 数学 453点

『な、なんだあの点数は！？』

『あんな点数をとる奴がFクラスにいるなんて！』

皆私の点数を見て、驚いているの。

「じゃあ、行きます！」

私の召喚獣は私の掛け声と共に相手の召喚獣に向かっていく。やっぱり点数が400点以上あると向こうが驚きと恐れで攻撃してこなくなるの。

「よし！みんな、このまま行くよ！」

『『『『『おおおおおーーーーっ！！』』』』』

「くっ、怯むな！所詮はFクラスなんだ！」

相手も負けられないのか攻撃をしてくる。こっちだって負けないの！

なんて思ってたら……

『現国の先生を連れてきたぞ！』

え……………？

『竹内先生、お願いします！』

『はい、分かりました』

そんなやり取りを終えた瞬間、竹内先生がフィールドを展開する。しかも、後ろにいる数学の長谷川先生が戦闘の影響で離れてしまった。結果、今私がいるのは現代文のフィールド。つまり、

Fクラス 高町なのは 現代文 21点

「撤退いいいいーっ！っ！」

『』『』『た、高町さんンンンっ！？』『』『』『』

このままじゃ戦線は崩壊するの。

『いまだ！高町を討ち取れーっ！』

そんな掛け声と共に、Bクラスは突進してくる。きゃあーっ、マズイってーっ！

「なのは、待たせた！試獣召喚！」

「なのはちゃん、お待たせしました！試獣召喚！」

「高町さん、お待たせしました！試獣召喚！」

と、回復を行っていたアキ君たちが援護に来てくれた、良かった！助かったの！

「なのはは一度戻って！」

「うん！分かった！」

そう言われ、私は一度教室に戻ったのでした。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「な、何これ……」

教室に戻ってきた私が見たのは、ボロボロになった教室設備でした。え？元々ボロボロだったって？それは言っちゃいけない約束なの。

「教室を補習した奴らの点数を確認するために一時空けててな。帰ってきたらこのザマだ」

「酷い……」

「しかし、Bクラスの奴ら。ここまでするか。まあ、修理はできなくはねえが。それにしても、Bクラスの代表はなかなかえげつないな。こんなことをする「違うよ」あ……?」

「Bクラスの代表は、こんなことしないよ。絶対」

「おい、高町。何を根拠にそんなことを言ってるんだ?」

「だって、Bクラスの代表は、私の友達だもん。こんなことする子じゃないよ」

「つつてもな……」

「なら、確認してみる」

そう言って私は携帯を取り出して電話を掛けた。友達のはやてちゃんに……

|||||||

はやてSIDE

「それにしても、随分とねばるね。相手も」

私は思わずそう呟く。別に油断をしとるわけじゃないけど、なかなか上手くいかないもんやね。

「ですが、それでもFクラスです。負けるはずありませんよ」

隣にいる、俗にいう近衛兵のクラスメイトがそう告げる。

「そう思って、Dクラスは負けたんやで？」

「それは、相手に姫路さんがいると知らなかったからではないでしょうか？」

「まあ、それもあるね」

とはいえ、油断は禁物……

『ゼオライマー！ パーツを呼び戻せ！ お前の次元連結システムをなあっ！ ゼオライマー！ パーツを呼び戻せ！ お前の次元連結システムをなあっ！』

「……？」

「あ、ごめん。私の携帯や」

この着信メロディー(?)は、なのはちゃんやな。

『俺は！ 貴様らの造物主にして、冥お『ピッ』』

「あ、なのはちゃん？どうしたん、試召戦争中に？」

『あ、はやてちゃん？あのさ、はやてちゃん、クラスの誰かに教室を襲わせるように指示した？』

親友から掛かってきたいきなりな内容に、私は思わず『ほえ？』となる。

『えっと、さっき教室にもどったら設備が誰かにボロボロにされてて……』

「ちょ、ちょっと待ってや、何のことや？私、そんなこと知らんで？」

『本当？』

「本当やねん。いくらなんでもそんなことまでせえへんよ」

『そっか……。じゃあ、一体誰がそんなこと』

「こっちでも、探してみようか？」

『え、いいの？』

なのはちゃんの意外と思う感じが電話越しに感じる。

「かまへんよ。実際、そりゃやりすぎやと思うし」

『ありがとう、はやてちゃん』

「それにしても、そんなことしそうな人物か……Bクラスやと……」

「あの、代表。その人物、根本ではありませんか？」

と、隣にいたクラスメイトがそんなことを言ってくる。へ？根本？

「電話の内容が聞こえたもので。それで、うちのクラスでそんなことをするのは、私が思いつく限りでは根本だけなのですが」

「うーん……」

『はやてちゃん？』

「なのはちゃん。ひとりだけ、心当たりがある」

私はそれを教えた。ただ、今の状況ではそれしかできないのが、辛いところやけど……

夜天と魔王と拳の一撃（前書き）

Bクラス戦終結です。

夜天と魔王と拳の一撃

『あんな、なのはちゃん。一人だけやけど、心当たりがあんねん』

電話の相手、はやてちゃんが神妙な口調でそう告げてきました。

「本当!？」

『うん。相手は根本っちゅう、うちのクラスの生徒や。なのはちゃん、知っとる? 根元の噂』

「……知ってる」

根本恭二。学年、ううん。学園を代表する卑怯な生徒。『喧嘩に刃物は標準^{デフォルト}装備』、『カンニング常習犯』、『球技大会で相手に衣服盛った』とか色々悪い噂が絶えない。そのため、周りからある意味で『観察処分者に近い男』と呼ばれる。その酷さは『ちび○るこちゃんの藤○君がとても正々堂々としたキャラに見えるほど』らしい。

『クラスのみんなの話やと、そいつがどうもスタンドプレーでやりたい放題やつとるらしい。せやから『代表』ん、ごめん。ちよっとまっとな?』

そう言っではやてちゃんの話が一端止まる。どうしたんだろう、一体?

「高町。どうだ? なんか分かったか?」

と、坂本君が様子を聞いてくる。一応教えておこうかな？

「うん。どうも、根本って人が勝手にやったみたい」

「根本……。なるほどな、アイツならこのくらいはやりそうだな」

そう言って坂本君はボロボロになった設備の教室を見回す。

そんな時、

バンッ！

「雄二！」

アキ君が教室のドアを乱暴に開けて入ってきた。どうしたんだろ
う。よく見たら瑞希ちゃんも一緒にいる。それに、どこか具合が悪
そう。気分でも悪いのかな？

「どうした明久、敵前逃亡か？それとも愛の逃避行か？もしそうなら
チヨキでしばらくぞ」

「頼みがある！」

「……聞こうか？」

「根本君の制服が欲しい！」

「明久、お前に何があった？」

「あ、アキ君……？」

どうしたんだろう、そんなこと言うなんて。というか、今ほどアキ君が分からないと思ったことは無いんだけど……。

「まあいい。勝った暁にはそれぐらい何とかしてやろう」

え、認めちゃうの？

「それと、今回の戦闘。瑞希ちゃんを参加させないで欲しい」

「……理由は？」

「言えない、こればかりは」

「あ、明久君！私、大丈夫ですからっ、だから……！」

「戦闘どころか、援護すらまともにできないで大丈夫も無いよ！」

瑞希ちゃんが、戦闘どころか援護もしなかった……？一体、どうして……？

「お願いだ、雄二！」

「……いいだろう、ただs「坂本君、ちょっと待って」なんだ、高町？」

「電話の続きが来てるの。今、スピーカーにして聞かせるから」

そう言って私は携帯をスピーカーモードにする。

『えーと、ごほん。私がBクラス代表の八神はやてや。始めまして
と言うべきかな、ここは?』

「そんな事より、何か用か?」

『内容は根本のことや』

「……!」

『根本やけど。さっき入った情報によると、前線で戦闘もせずにな
にかをヒラヒラと見せてたそうなんやけど。その後、姫路さん……
やったつけ?その子の調子がおかしくなったらしいんやけど』

「そうだよ、八神さん」

と、アキ君が身を乗り出してそう答える。

『その声、吉井明久君かいな?』

「うん。そうだよ八神さん」

『それより、さっき言ったことに肯定するって事は……』

「うん。僕も近くにいたんだ。それと、瑞希ちゃんもいるよ。今こ
こに」

『そっか……その、ごめんな?』

「八神さんが謝る事は無いよ。悪いのは……」

『わかつとる。根本やろ?』

「うん」

そんなはやてちゃんの間に、アキ君は頷く。

『根本は、情報によるとFクラスの後ろの階段にむかつとるらしい』

「そうなの、はやてちゃん?」

『うん。信頼できるクラスメイトからの情報や』

「ありがとう、はやてちゃん」

そんな情報をくれたはやてちゃんに、私はお礼を言う

「雄二、あの……」

「分かってる。とつと行っ来てい」

そんなやり取りをアキ君は坂本君としている。

「うん、分かった。瑞希ちゃん」

「は、はいっ」

「大丈夫、任せてよ」

「……はい」

そんなやり取りをして、アキ君は教室を出て行った。多分、階段に向かつてるんだろうな。

『それにしても、彼が『あの』ねえ……』

「うん。アキ君がその『あの』なの」

はやてちゃんの言う『あの』が何なのか私は知ってるからそう答える。

「どうなるかな？アキ君の恋模様は？」

「せやね」

|| || || || || || || || || ||

明久SIDE

階段を登り上に。すると、階段のところにある踊り場で目的の人物を見つけた。

「見つけたぞ、根本恭二い！」

「ん、なんだ。誰かと思ったら観^{バカ}察処分者か」

「根本、今すぐ持ってるものを返してもらおうか！」

「断る。これはお前ら頼みの綱を抑える大事なカードだからな」

そう言って胸ポケットから一つの便箋を見せる。

「卑怯だと思わないのか？」

「卑怯？ちがうな。これは立派な戦術だ」

そうかい。それなら……

「貴様を倒して返してもらう！」

「やってみろ、観察^{バカ}処分者」

「「試^{サモン}獣召喚！」」

Fクラス 吉井明久 現代国語 63点

VS

Bクラス 根本恭二 現代国語 201点

「ハンッ！お粗末な点数だな。オラッ！これで戦死……」

「するか！」

相手の斬撃をギリギリのところで避ける。そして鎧で守られてないところを攻撃。相手が攻撃してきたらまた避けて攻撃。この繰り返しである。

「このっ！チヨロチヨロと！メタル○ライムみたいな奴が！」

そこまで弱くない。

「センターに入れてスイッチ、センターに入れてスイッチ……」

「エヴァン○リオンかあっ！」

うるさい。

「これでえっ！ラストォ！」

最後の一撃を叩き込む。

Bクラス 根本恭二 現代国語 0点

「戦死者は補習うううううっ！」

戦死と共に、鉄人がどこからとも無く現れて根元を強制連行して行く。

「ぐわっ！離せ鉄人！」

「さあ来い、この負け犬が！ みっちり戦争終結まで補習をしてやるからな！」

「あ、先生。ちょっと待ってください」

僕は慌てて目的を思い出し、根元の胸ポケットに手を入れて一枚の便箋を取り出す。よし、これで任務完了だ。

「吉井、もういいか？」

「あ、すみません先生。呼び止めちゃって」

「いや、構わんぞ。さあ、行くぞ根本」

そう言って鉄人は根本を連れて補習室に連れて行く。僕もここにはもう長居は無用だな。

『覚えてやがれ吉井 いいいいいい！』

そんな叫びを背に受け。僕は前線に向かって走り出した。

|| || || || || || || || || ||

なのはSIDE

「それじゃあ、行くよ？瑞希ちゃん」

現在私は瑞希ちゃんと前線いる。

作戦は私と瑞希ちゃんです。Bクラスに対する奇襲。

「はい。でも……」

「大丈夫だよ、瑞希ちゃん。アキ君を信じなきゃ」

まだ不安があるのかもしれない。声にどこか迷いがあつた。

「アキ君は絶対何とかしてくれるよ」

「……そう、ですねっ！わかりました、行きましょう！」

瑞希ちゃんも決意を固めたみたい。

「よしっ。須川君。準備は大丈夫？」

「はい、任せてください！」

「上手くいったらうちでパフェでもご馳走するね？」

「須川亮、全身全霊で任務に取り組みさせていただきます！！」

おお、なんだか知らないけど、須川君がパワーアップした。

「行くよ、瑞希ちゃん」

「はい、なのはちゃん」

意を決し、私たちはフィールドの中に入る。

「^{サモン}試獣召喚！」

Fクラス 高町なのは 数学 420点

&

Fクラス 姫路瑞希 数学 412点

召喚される私たちの召喚獣。

「それじゃあ……スターズ1、高町なのは、行きます！」

「えっと……エンジェル1、姫路瑞希、行きます！」

ちなみにこの掛け声。須川君が『是非そう言ってください！』と
土下座までしていたんだよね。なんでだろう？

「瑞希ちゃん！」

「はい！」

私は召喚獣の杖を、瑞希ちゃんは腕輪を前に突き出す。

「デ
イ
バ
イ
イ
イ
イ
イ
ン
……
！」

「ヒイイイー……！」

私たちの掛け声に、杖と腕輪が『キイイイイイーイーーン』とチャージされる。

「バスタアアアアアー！」

「レエエエエーイーイズ！」

その瞬間。私の杖から、瑞希ちゃんの腕輪から光線が放たれる。その射線にいた相手の召喚獣はあっという間に、文字通り消し飛んだ。

「須川君！」

Yes, you, r
majesty!

えーと、今何て言ったんだろう？英語だから良く分からないや。

それはともかく、須川君と何人かの男子が私と瑞希ちゃんの光線の中を走って行く。そんな須川君達に、だれも近づけないでいる。まあ、近づいたら召喚獣は一瞬でやられちゃうからねえ。だけど、召喚獣を出さない須川君達は気にせず通ることができる。

近寄れない。だから勝負を仕掛けることができない。その間に須川君達が一気にBクラス代表、はやてちゃん近づく。

「な、なんちゅう策を……。近衛兵！」

流星のはやてちゃんも驚愕し、慌てて教室の奥に移動。教室に入ってきた皆を抑えようとする。その瞬間。

ダンッ！ダンッ！ドンッ！

教室の、開け放たれた窓からムツツリーニ君が体育教師と共に入ってきた。そう、私の瑞希ちゃんのあの攻撃はこのための複線なの。

「なんやて！？」

「……Fクラス、土屋康太。Bクラス代表八神はやてに保健体育勝負を申し込む。試獣召喚^{サモン}」

Bクラス 八神はやて 保健体育 356点

「ははは、焦ったわ。私は保健体育が一番得意なんや！」

「……確かにキサマの点数は高いだろう。しかし……」

Fクラス 土屋康太 保健体育 441点

「……俺よりは低い」

「な、なんやてえっ！？」

そんなはやてちゃんの驚愕と、ムツツリー二君の召喚獣の小太刀による一閃のと共に、Bクラス戦は終結した。

|| || || || || || || || || ||

「はあゝゝ、負けてもうたゝ」

そんなことを言いつつも、はやてちゃんは悔しいと思うような顔はしてなかった。それこそ、ゲームに負けてしまったような、そんな顔をしてる。本当に悔しくなさそうに見える。

「それで？設備が欲しいんやろ？Fクラス代表はん」

そう言っ、はやてちゃんは坂本君を見る。

「ああ、普通ならそうしてる所だが。そっちがこっちの条件を飲むつーなら免除してやってもいい」

「……？それってどういうことや？」

「何、こっちも色々と考えてな。それで、どうだ？」

「……条件は何や？」

クラスの設備を守るための条件となると、流石のはやてちゃんも真面目な顔をする。

「なに、これを来てAクラスに戦争の準備をしていると言って来るだけだ」

そう言って坂本君が取り出したのは……女子の制服。

……どこで手に入れたんだろう？

「は？ あんな、私は女子やから元々着てるで？」

「違う。着るのはお前じゃない。根本だ」

「は？」

「想像してみろ、これを根本が着て、ついでにロングヘアの桂を被ってる姿を」

「……………ぷっ、くふふ……………くっくっく……………うゝゝひゃっひゃっひゃっひゃっひゃっひゃ！」

すると、想像できたのかはやてちゃんはお腹を抱えて笑い出す。それにしても、ぷっくく……………

「おい待て坂本！ 俺はそんなことはしない……………」

『Bクラス全員で必ず実行させよう！』

『任せて！ 必ずやるから！』

『それでクラスの設備が守れるならやららない手はないな!』

「なっ!?! お前等!」

満場一致で決まったようなの。あ、そうだ

「その前に坂本君。少しだけ根本君を借りたいんだけど?」

「あん? どうして?」

「だって、いろいろとやってくれたみたいだから何でそんなことをしたのかきっちりOHANASHIしなきゃ!」

「そ、そうか……。やってもいいが、顔はあまり攻撃するなよ? 色々やった後撮影会があるんだからな」

「うん、わかった。善処する」

「おい待て! お前等俺をどうしようってんだ!?!」

「あゝゝ……………処刑?」

「ふざけんなああー!」

まったく、坂本君は何を言ってるんだろう? これからやるのはOHANASHIなのに。

「ちょっと待って、なのは」

と、アキ君が待ったを掛ける。なんだろう？

「よ、吉井！助けてくれるのか！？」

「……助ける……？………フンッ！！」

バキィッ！

「ごっ！？」

次の瞬間。根本君はアキ君の見事なアッパーカットで空を舞う。
わあ、すごい。歯も何本か折れてる。

「ふう、あーすっきりした。あ、なのは。連れて行っていいよ」

心底すっきりした顔をいているアキ君がそこにいました。

「うん。それじゃあ、さっそく体育館裏でOHANASHIを……」

「あ、なのはちゃん。私も混ぜて？」

「うん、いっしょにやろう？」

「ちよつまったすけ……」

バタンッ！

さて、きっちりOHANASHIしようね？

「それにしても明久。顔はやめろよ」

『行くよ、はやてちゃん?』

「え、なんで?」

『うんっ』

「顔がおかしかったら商品価値が落ちるだろう?」

『全力全開! スターーーライトオオオオーーー!』

『響け! 終焉の笛! ラグナロク……………!!』

「あ、そっか。でもさ、もともと商品価値なんて0円だからいいんじゃない?」

『『ブレイカアアアアアアーーー!』』

「ま、それもそうだな」

『チュドオオオオオオオオーーー!』

それぞれの放課後の話なの

バカテスト 保健体育

問 以下の問に答えなさい。

『女性は（ ）を迎えることで第二次性徴期になり、特有の体つきになり始める』

姫路瑞希、フェイト・T・ハラオウンの答え

『初潮』

教師のコメント

正解です。

吉井明久の答え

『明日』

教師のコメント

随分と急な話ですね。

高町なのはの答え

『先生のH』

教師のコメント

そんなこと言われまして……。

土屋康太、八神はやての答え

『初潮と呼ばれる、生まれてはじめての生理。医学用語では、生理のことを月経、初潮のことを初経という。初潮年齢は体重と密接な関係があり、体重が43?に達するところに初潮をみるものが多い為、その訪れる年齢には個人差がある。日本では平均12歳。また、体重の他にも初潮年齢は人種、気候、社会的環境、栄養状態などに影響される』

教師のコメント

二人そろって詳しすぎです。

「それじゃあ私、部活があるから」

Bクラスとの試召戦争が終わった放課後。私はアキ君にそう告げて教室を出て行く。背中越しにアキ君の『頑張って』という言葉に後ろ手に手を振りながら部室を目指した。

ちなみに、教室にはそんなに人はいない。何故かって言うと……。

『オラッ！ キリキリ歩け！』

『くそっ！ 覚えてろよお前等！』

『さっさと歩け！ これから撮影会もあるんだからな？』

『な、聞いてないぞ！？』

とまあ、こんな感じにクラスのほとんどが根元君のバツゲームに参加してるから。それにしても、さっきも思ったけど坂本君。どうやって女子の制服を手に入れたんだろう？

興味はあるけど聞いちゃいけない。そんな考えを抱きながら、私は部活に急いだ。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

はやてSIDE

「……てなことがあってなあ」

「そうなんだ。でもよかったね？設備を交換しないで済んで」

放課後の帰り道。私は親友のフェイトちゃんとおしゃべりをしながら歩いていた。内容はまあ、今日の試召戦争のことや。

「ま、そのことはFクラスの代表様なんやけどね」

実際あの提案には正直助かったわ。

「それにしても、話には聞いたけどまさか姫路さんがFクラスにいるとは思わなかったわ」

「（ピクリ）そうなんだ。やっぱり瑞希はFクラスだったんだ？」

姫路さんの名前を出した途端。フェイトちゃんの反応が少し変わった。確かに。

「うん。それに吉井君もな？姫路さんの為にめっちゃがんばったで？」

「（ピクピク）へへ、そう？」

なんや、一気にフェイトちゃんの雰囲気が悪くなった気が……。

気のせいかな？ 気のせいやと信じてるで。

「そーいやな？」

「なに？ はやて」

「これは噂なんやけど、戦争が終わった後、吉井君が姫路さんと教室でハグしとったって噂が……」

バガンッ！！

「……………フエ、フェイトちゃん？」

「あ、私ったら何でこんなことを」

そこには、フェイトちゃんの拳が貫通しとる、

……貫通しとる……………

電柱があつた……………

「ごめんはやて。さっ早く帰ろ？」

「あ、ああそうやな……うん」

いや、分かつたけど。分かつてはおったけど。なのはちゃんから『この』ことでフェイトちゃんを怒らすな的なことは言われつつたけど。

まさか、これほどとは……………

「（くわばらくわばら……）」

そう思いながら、私はフェイトちゃんの後を追いかけた。後には、拳大の大きさに貫通した電柱がのこつつた。

交渉と一騎討ちと処女協定

バカテスト 生物

問 以下の問に答えなさい。

『人が生きていく上で必要となる五大栄養素を全て書きなさい』

八神はやての答え

『?脂質 ?炭水化物 ?たんぱく質 ?ビタミン ?ミネラル』

教師のコメント

正解です。

姫路瑞希の答え

『?脂質 ?炭水化物 ?たんぱく質 ?ビタミン ?明久君』

フエイト・T・ハラオウンの答え

『?脂質 ?炭水化物 ?たんぱく質 ?ビタミン ?明久』

教師のコメント

何かがおかしい気がします。

クロノ・ハラオウンのコメント

フェイト……後でちゃんと話をしよう（涙）。

吉井明久の答え

『？塩　？砂糖　？水　？油　？翠屋のまかない』

教師のコメント

それで生きていけるのは君だけです。ですがまかないとはいえ、まともな食事があるだけマシと言うべきでしょうか？

高町なのはの答え

『？友情　？愛　？信頼　？魂　？補給』

教師のコメント

先生もSRWは好きです。

|| || || || || || || || || ||

「一騎討ち？」

「ああ。Fクラスは試召戦争として、Aクラスに一騎打ちを申し込む」

恒例の宣戦布告。

今回は代表の坂本君を筆頭に、アキ君、瑞希ちゃん、秀吉ちゃんにムッツリーニ君。そして私という首脳陣勢ぞろいでAクラスにきました。

「うーん、何が狙いの？」

「もちろん俺達Fクラスの勝利だ」

そう言う彼女、木下優子さんは訝しんだ表情をする。まあ、ムリ無いことだろうと思うけどね。

「面倒な試召戦争を手軽に終わらせることができるのはありがたいんだけどね、だからといってわざわざリスクを犯す必要も無いかな」

「賢明だな」

「ところで、Bクラスとやりあう気はあるか？」

「Bクラスって、昨日来てたあの……」

恐らく彼女の脳裏には、女子生徒の制服を着た根本君が映ってるのかもしれない。

「でも、BクラスはFクラスに負けて三ヶ月は試召戦争はできないはずだよな？」

「なんだ、知らないのか？ 実情はどうあれ、対外的にはあの戦争は『和平交渉にて終結』ってことになってる。だから規約にはなんら問題はない。……ちなみに、BクラスだけじゃなくDクラスもな」

これが設備を入れ替えなかった理由。ちょっとずるい感じがするけど。

「……………わかったわ。何をたくらんでるかは知らないけど、代表が負けるなんてあり得ないからね。それに、あんな格好をした奴がいるクラスとやるなんてヤダもん。でも、こっちからも提案。代表同士の一騎討ちだけじゃなくて、五回戦勝負と行かない？ 三回勝った方の勝ちって感じで。それなら受けてもいいよ？」

「……………いいだろう。ただし、教科はこっちが三回。そっちは二回選択できることにさせてもらおうぞ」

「え…………？ うーん…………」

坂本君はできるだけクラスの差を埋めるために提案を提示する。

だけど、これには流石の木下さんは思案顔しているみたいなの。

「……受けてもいい」

どこからか、そんな声が聞こえてきた。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

明久SIDE

「……受けてもいい」

「てっ、うわっ！」

び、びっくりしたあー。

「雄二の提案。受けてもいい」

突然現れた、静かだけど凜とした声。

いつの間にかAクラス代表の霧島さんが近くに来ていた。物静かな人だとは知ってたけど、全く気配スラ感じさせないだなんて。まるで武道の達人みたいだ。

「……その代わり、条件がある」

「条件？」

「……勝った方は、負けたほうの言うことを何でも聞く」

そう言って霧島さんの視線は瑞希ちゃんとはに向く。そういえば霧島さんは同性愛者説がある。ま、まさか霧島さん、僕らに勝ったら瑞希ちゃんとなのはを！？僕の脳裏に映るのは完全にR-18、CERO-Zな光景。な、なんてことだ！こうしちゃいられない！急いで僕も今日のうちにデジカメを用意しなくては！でも最新式は高いからとても手が出せない。どうしよう、そうだ！中古ならなんとか手が届くはずだ！それでもムリならいっそのこと土郎さんをお願いしてカメラを貸してもらおう！でもなんて言えばいいんだろう？女の子の裸を撮る為に貸してくださいなんて言ったらそれはもう大変な事態になる。道場で素振り一万本、座禅五時間は確実に。クソっ！どうすればいいんだ！

「アキ君？どうしたの？」

「……ハッ！？」

いかん、トリップしてた。

「いや、ちょっと考え事をね」

そう言って誤魔化しておく。まさか百合シーンを撮るためのカメラをどうやって入手するか考えてたなんて口が裂けても言えない。

「よし分かった。それで構わん」

「ちょ、雄二！瑞希ちゃんとなのはがまだ了承してないじゃないか！」

コイツ、人の貞操とかその辺のことを何だと思ってるんだ！？

「安心しろ、誰にも迷惑は掛けねえ。それに、どっちにしろ俺達が勝つんだからな」

そうか、そうだよな。勝つつもりじゃなきゃそう簡単に了承できはしない。なんだかんだでコイツ、クラスの奴らを信用してるんだな。

「……時間はいつ？」

「そうだな。10時からでもいいか？」

「……わかった」

「よし、交渉成立だな」

「もう用はない。帰るぞ」と言わんばかりな表情を雄二がする。さて、それじゃあかえろ……

「……帰る前に、吉井。アナタに会いたいという人がいる」

……うとしたら霧島さんがそんなことを言ってきた。僕に会いた人？誰だろう？

そんなことを考えている内に、その人物が現れた。

「明久、久しぶり。瑞希となのはも」

そう言って笑顔を向ける彼女。

長い、腰まで届く金髪。

ルビーのような赤い瞳。

静脈が見えそうなくらいの白い肌。

一部の生徒から『女神の微笑み』と称されるその笑顔。

そして瑞希ちゃんにも負けず劣らずなプロポーション。

「フェイト……」

フェイト・T・ハラオウン。僕を巡って、瑞希ちゃんと時には親友、時には恋敵である一人だった。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「久しぶりだね、フェイト。なのはから……っていうかフェイトならAクラスだと思ってたけどね」

「ありがとう、明久。それはそうと、明久と会いたいと思ったのは挨拶だけが目的じゃないの」

そんなことをフェイトは言ってくる。え？それだけじゃないって、どういうこと？

「……明久、瑞希。聞いたよ、Bクラス戦の後に二人が教室でしたこと」

「あ……」

それか……。あれはいろんな意味で驚いたんだよなあ。いきなり抱きついてきたこととか。

「あの、フェイトちゃん。あれは、その……」

「分かってる。いろいろあったんだってことは分かってる。同情の余地もあるよ。でも、それとこれとは話は別。瑞希……」

ホンの少しだけ間を空け、フェイトは言った。

「協定違反だよ？」

「はい……うう……」

そう言って瑞希ちゃんはシュンとなる。

協定。もっと正確な名称を言うなら『処女協定』。瑞希とフェイト、そして僕の間に交わされた一種の約束事。まあ、その内容って言うのは……

（処女協定規則）

？ 抜け駆け禁止

？ の補足

（１） 抜け駆けをした場合はしてない方は抜け駆けをした方と同じ行為、もしくはそれと同レベルのことをしていい。

（２） 成り行き（本人の意思ではなくアクシデントのようなもの）に関して言及しない。

？ 決して妬んだり僻んだりしない。

？ 明久がどちらかを選んだ場合は素直に祝福すること。

こんな感じだね。というかこの規則、瑞希ちゃんとフェイトが話し合って決めたことらしい。いやはや、なんというか……。

ちなみに、もっと言ってしまうならば。実は僕、去年の秋に二人から同時に告白されてたりする。なんでも、お互いがお互いの僕に対する気持ちがあることで知ってしまったらしい。それで、「じゃあ、いっそのこと二人で一緒に告白しよう」ということになったらしい。

そして僕は告白を受けたんだけど、そのとき僕はかなり曖昧というか煮え切らないというか、まあ要するにハッキリしない態度をと

ったことがこの『処女協定』発足の切っ掛けだったりするんだだけだね。

「じゃあ、そういうことだから……明久？」

「う……うん。わかった」

フェイトの言葉に僕は頷く。そしてフェイトは僕に更に近づき……

ぎゅっ……

僕に抱きついた。

ちなみに、僕は抱き返したりはしない。というか、僕の記憶が正しければ確かあの時僕は瑞希ちゃんに抱きつかれて抱き返してないはずだからだ。

それにしても、フェイト……胸が……。

抱きつく、ということは当然身体を密着させなければならぬ。で、まあフェイトのプロポジションはかなりいいから……

必然的に、フェイトのいろんなところが当たるわけである。

いかん。明鏡止水、煩惱退散。立つな、立たないでくれ！僕の股間のジョーよ！

「（明鏡止水、煩惱退散、明鏡止水、煩惱退散、明鏡止水、煩惱退散、明鏡止水、煩惱退散……）」

VS Aクラス、最後の戦いなの！〈前編〉

Aクラス男子の猛攻を何とか凌いだ僕はどうかこうにかFクラス教室に辿り着いた。

生きてるって素晴らしいよ、ホント。

それから約二時間。回復試験を受け、僕らは再びAクラスの教室にやって来た。それにしても、ついにここまで来たのか。いろんな意味でいろいろあったなあ……。まあ、ここまで来たんだ。やるかには勝ってみせる！

「それではこれより、Aクラス対Fクラスによる試験召喚戦争を開始いたします。一番手の方は前に出てください」

そんな高橋先生の言葉に、Aクラス側の生徒の一人がスクツと立ち上がる。彼女は……木下さん。秀吉のお姉さんか。

「よし、それじゃあ頼むぞ明久」

「え、僕!？」

雄二の意外な指名に僕は驚く。

「ああ。ここはお前しかいない。それに明久、もういいじゃないか。お前の本当の実力を見せ付けてやれ!」

本当に実力……か。確かにそうだね。ここで出し惜しみしても意味が無い。

「わかったよ、雄二。ここは任せてくれ」

悪友の意外な期待に応える為、僕は前に出た。

~~~~~

なのはSIDE

「わかったよ、雄二。ここは任せてくれ」

そんな言葉を言って、アキ君は前に出る。

「坂本君。その、何でここはアキ君なの？」

「いや、単純に明久の操作技術を買ったことだ。それに、本当の実力とでも言って相手がビビってくれりゃあ儲けもんだしな」

「あの、じゃあ本当の実力って……」

まさか……

「ああ。ただの嘘。もしくは明久に対する発破だな」

「大丈夫なの？」

「まあ、大丈夫かどうかと言われれば……」

『確か、吉井君だっけ？まさか、君……』

『そうだよ木下さん。今まで黙ってたけど、実は僕……』

Aクラス 木下優子 現代文 367点

VS

Fクラス 吉井明久 現代文 89点

『左利きなんだ』

ボカンッ!!

Fクラス 吉井明久 現代文 0点

「大丈夫じゃねえわな」

「だね……」

そこには討ちのめされてるアキ君の召喚獣がいました。

~~~~~

雄二SIDE

「戦争に利き腕は関係ないでしょ！」

戻ってきた我らが切り込み隊長は戻って早々に島田のプロレス技の餌食になっていた。というか島田。今、俺はお前が明久にそんなことをするお前の無謀に等しい勇氣に感動してるぜ。なぜなら……

「……………」

「……………」

「……………」

明久絶対防衛部隊といっても過言ではない奴がこのクラスに二人、そしてAクラスに一人いるというのに……。

「ちょ、な、なによ？ウチがなんかした！？」

「自覚が無いんだ？へえ……………」

「自覚が無いんだね？ふうん……………」

そこには、杖を島田の眉間に突きつけてる高町。そして島田の喉元に金色の刃の剣を突きつけたテストロッサの姿があった。というかテストロッサ。お前がなんでここにいる？

「ちょ、なによ！なんなのよ一体！」

「美波ちゃん……」

「み、瑞希！助けてくれない？！」

「なのはちゃん、フェイトちゃん。私にも何か貸してください」

「瑞希い！？」

四面楚歌だな。島田よ。

「じゃあ瑞希。これを使って？お兄ちゃんの机からくすねてきたの」

「これは……カード、ですか？」

「これは『デュランダル』っていうものの。ここをこうすると……」

「わ！杖になりました！」

「後はデュランダル言うとおりにやれば大丈夫だから」

「はい！ありがとうございます、フェイトちゃん！」

版権的に、及び技術的に大丈夫なのか？と思う出来事が目の前で

起きていた。

「（そういや、テストロッサが明久に抱きついたことをまだクラスの奴らに言ってなかったっけ）」

なんとなく、そんなことを思い出す。クラスの奴ら、もといFF F団。通称、異端審問会の奴らにこの事を話せば間違いなく色々なことが起きるだろうが……

「（まだ、死にたくないしな。俺も……）」

目の前で起きてる出来事に、俺は視線を逸らしてそう思った。

V S Aクラス、最後の戦いなの！ ～中編～（前書き）

今回はなのはとフェイトが戦うんですが、無印での二人の戦いを想像していただけると分かりやすいと思います。

V S Aクラス、最後の戦いなの！〜中編〜

「それでは二番手、前に出て来て下さい」

そんな高橋先生の言葉に、坂本君はこっち、私を見る。あれ、もしかして……。

「高町。二番手はお前だ」

「わかったの。やってみる」

そう言って私は前に出る。相手は……

「フェイトちゃん……」

「なのは……」

相手は親友のフェイトちゃん。まさかフェイトちゃんと戦うことになるなんて……。

「なのは、手加減しないよ？」

「分かってるよ。全力全開、手加減無し！」

「教科は何にしますか？」

そんな高橋先生の言葉にフェイトちゃんが視線を高橋先生に向ける。そっか、今度は向こうが教科を選択するんだっけ。

「数学でお願いします」

「フェイトちゃん。いいの？私、数学得意だよ？」

「うん、分かってる。でも、私だって得意だよ？」

そう言ってフェイトちゃんはおどけた表情を作る。そっか……。

「負けないよ？」

「私だって」

「それでは、試合開始！」

「「^{サモン}試獣召喚！」」

Aクラス フェイト・T・ハラオウン 数学 453点

VS

Fクラス 高町なのは 数学 453点

『同じ点数だと！？』

『すげえ。それじゃあ二人の力は互角って事か』

『こうなったら勝負の鍵は操作技術だな』

あちこちから私たちの点数に驚きの声が広がる。確かに私も同じ点数だとは思わなかったの。

「いくよ、フェイトちゃんっ！」

「負けないっ！」

そう言い合って、私たちの召喚獣はぶつかり合う。

「ファイアッ！」

「シュートッ！」

私は桜色、フェイトちゃんは金色の光弾を撃ち出す。お互いそれを避け、更に撃ち合う。避けるたびに、フィールドは削れ、えぐれていく。

別に撃ってばかりじゃない。お互い、お互いの召喚獣が持つてる杖で近接格闘もする。

ガキイインッ！

甲高い音を立て、距離を取ってまた撃ち合う。

「シュートッ！」

撃ち出す光弾。だけど、フェイトちゃんはその光弾を杖で弾き飛ばして一気に距離をつめる。

「(は、速い!)」

慌てて杖で防御する。だけど、勢いもあつたためか召喚獣が弾き飛ばされて転がる。

私は急いで立ち上がらせようとする。そして立ち上がったとき

キンッ!

「え!?!」

金色の輪が、私の召喚獣の両手両足を拘束した。

私はその拘束を解こうともがくけど、拘束は一向に解ける気配はない。

そして、

「なのは、行くよ?」

フェイトちゃんの召喚獣がパワーをチャージする。私やフェイトちゃんのような杖が武器の召喚獣は攻撃をチャージすることが出来る。そして、チャージするほど攻撃力は増すし、杖によっては攻撃法も変わる。

「フォトンランサー、フアランクスシフト……。撃ち碎け! ファイアッ!」

そして、大量の光弾が一斉に撃ち出された。

~~~~~

明久SIDE

撃ち出された大量の光弾。それがなのはの召喚獣に叩き込まれる。

「なのは！」

「なのはちゃん！」

「なるほど、テストロッサの腕輪は『拘束<sup>バインド</sup>』か。地味だが効果のある能力だな」

思わずそう呟く雄二を他所に、僕はフィールドを見る。

大量に放たれてる光弾は未だに止まる気配を見せない。まるでガトリングみたいだ。

それがあと十秒近く続いた所で、ようやくその攻撃は収まった。だけど、

「なのはの召喚獣は……」

あんな攻撃を喰らったら、どんな召喚獣だって耐えられるはずが

無い。これは、負けたか!?

「明久君、あれ……」

瑞希ちゃんがディスプレイを指差す。そこには……

Fクラス 高町なのは 数学 321点

なのはの召喚獣が未だに健在であることを示す表示があった。

それを見て、僕は思わずフィールドを見る。煙が晴れると、そこにはほとんど無傷のなのはの召喚獣があった。

「たはー、なんとかなったよー」

「そ、そんな……」

驚くフェイトを他所に、なのはは杖を構える。

「今度はこっちの……番だよ!」

なのはの召喚獣の杖に、桜色の光が形成されていく。

「ディバイイイイイン、バスターーーツ!」

放たれた太い閃光はフェイトの召喚獣に真っ直ぐに向かっていく。それをフェイトは杖で強引に防ぐ。だけど、徐々にだけ点数は減っている。

やがて、閃光は小さくなって消える頃にはボロボロのフェイトの召喚獣があった。

「フェイト……」

思わずそう呟いてしまう。フェイトは今敵だけど、そう呟きたくなっただ。

そして、その間になのは更に攻撃のためのチャージをする。

それを見たフェイトは慌てて回避運動をしようとするけど……

キンッ！

「え！？こ、これは！？」

フェイトの召喚獣の両手両足を桜色の輪が拘束する。これって……

「高町の召喚獣の能力も、『拘束』バインドなのか！」

「受けてみて！デイバインバスターのバリエーション！」

そう言ってなのは更にチャージする。さっきの攻撃デイバインバスターよりも長く。

「これが私の全力全開！スターライトッ！！ブレイカー……！！」

そんな言葉と共に、それこそ極太の閃光がフェイトの召喚獣に叩き込まれる。フェイトの召喚獣はその攻撃に成すすべも無く飲み込

まれた。

Aクラス フェイト・T・ハラオウン 数学 0点

「勝者、Fクラス高町なのは！」

そんな言葉に僕は一気に沸く。これで一対一だ！

**V S Aクラス、最後の戦いなの！〜後編〜**

バカテスト 歴史

問 次の（ ）に正しい年号を入れなさい。

『（ ）年 キリスト教伝来』

霧島翔子の答え

『1549年』

教師のコメント

正解。特にコメントはありません。

坂本雄二の答え

『雪の降り積もる中、寒さに凍える君の手を握った1993』

教師のコメント

ロマンチックな表現をしても間違いは間違いです。

土屋康太の答え

『雪が振り続ける夜、ベッドの中で凍える君の《検閲削除》を握った0721』

教師のコメント

卑猥な表現でも間違いは間違いです。

~~~~~

「負けちゃった……」

そんな風に、それでいながらどこかすっきりした顔でフェイトちゃんと言う。

「えへへ、私の勝ちだよフェイトちゃん」

「うん。それにしてもすごかったね、今の攻撃？」

「うん。でもまあ長くチャージしないといけないからそう簡単には使えないけどね？」

実際あの攻撃は数学だからできたようなものだった。それ以外ならどうしようもなかったと思う。

「フェイトちゃん、手を貸すよ?」

さっきから座り込んでるフェイトちゃんにそう言って手を差し出す。

「うん、ありがとう。なのは」

そう言って私の手をとってフェイトちゃんは立とうとするけど、

「わっ!」

「きゃっ!?!」

フェイトちゃんに引っ張られるように倒れこんでしまう。

「ど、どうしたの?」

「あはは、さっきのなのはの攻撃を見て、少しだけ腰が抜けちゃって……」

「そっか」

~~~~~

## 明久SIDE

二回戦はなのはの勝利。これでなんとか勝負は振り出しに戻ったけど、次は誰が行くんだろう？

「……………（ボタボタボタ）」

隣をなんとなく見ると、そこには鼻血を垂れ流しにしているムツツリーニの姿があった。何でこうなってるのか。それはまあ、今僕らの目の前でなのはとフェイトはもつれるように倒れてるんだけど、その構図がなんというか、まるでなのはがフェイトを押し倒してるように見える。そうなたら隣のムツツリスケベが何の反応も起こさないわけが無い。ちなみにムツツリーニほどでないにしろ、他のクラスの皆は中腰になっていた。

それから数分してようやく二人は立ち上がってそれぞれのクラスに戻った。よし、ようやく次の勝負だ。

「では、三人目の方どうぞ」

「……………（スクッ）」

ムツツリーニが立ち上がる。どうやら次の勝負は保健体育のようだ。そして保健体育でムツツリーニはAクラスだって負けはしない。この勝負は確実にこっちの勝ちだろう。

「それじゃあ今度はボクが行こっかな？」

そんな言葉と共に一人の女子生徒が立ち上がる。誰だろう？あま  
り見たことが無いけど。

「去年の終わりに転校してきた工藤愛子です。よろしくね」

パッと見少年のように見える彼女。なるほど、去年の終わりに転  
校してきたのなら見たことが無くても当然だ。

「教科は何にしますか？」

「……保健体育」

「土屋君だっけ？保健体育が得意なんだ？でも、ボクだって得意だ  
よ？……君と違って、実技でね？」

なんて問題発言！？どうしよう、僕は今とときめいている！

「そっちに君、吉井君だっけ？勉強苦手そうだし、よかったボクが  
保健体育を教えてあげようか？もちろん……実技でね？」

「フッ、望むところ……」

「明久君にそんなこと必要ありません！」

「そうだよ！明久にはそんなの必要ないよ！」

答えようとしたら左腕を瑞希ちゃんが、右腕をフェイトが抱きつ  
く形で握ってる。なに、どういうこと？

「明久（君）には私たちがしっかり教えますから！もちろん実技



「……えー、それではFクラス。だれか代わりの方を」

クールな印象を受ける高橋先生も流石のこれには予想外というか衝撃を受けたのか、若干頬が引きつってる。

結局、代わりに須川君が出たけど負けたのは言うまでも無い。

「そ、それでは四番手前に」

「それじゃあ、行ってきます」

今度は瑞希ちゃんが立ち上がる。今のところ二対一。これで負けたらこの戦いは雄二に行かないまま終了してしまう。これはなんとしても勝ってもらいたい。

「それでは、僕が相手をしよう」

そう言っ出てきたのは、

「出たな、学年三席」

「それじゃあ、彼が」

「ああ。テストロッサと翔子の次に強い。それに、アイツ……久保と姫路の総合得点はそんなに大差は無かった」

「ちょっと待ってよ雄二。それじゃあ」

「ああ、この勝負はどうなるか正直分からない。姫路の力を信じるしかない」

「教科は何にしますか？」

「総合科目でお願いします」

オマケに教科は学年の順位がダイレクトに出る総合科目。これは、本当に瑞希ちゃんを信じるしかない。

「「試獣<sup>サモン</sup>召喚！」」

Aクラス 久保利光 総合科目 3997点

VS

Fクラス 姫路瑞希 総合科目 4409点

す、すごい！まさか400点以上の差をつけるなんて！

驚いてるのは僕だけじゃない。アチコチから驚き声上がる。

「くっ！姫路さん。どうしてそんな点数を！」

「私、好きなんです。このクラスが」

「Fクラスが、好き？」

「はい、だから頑張れるんです」

そして勝負は、一瞬で決着が着いた。

「勝者、Fクラス」

高橋先生の声にも驚きが見え隠れしている。確かにこれには誰だ  
って驚くだろう。

「それでは、五番手前に」

「雄二。頼んだよ？」

「ああ、任せてくれ」

隣にいる悪友に、僕は声を掛ける。ここまで来たんだ。勝っても  
らわなきゃ困る。

「Fクラス、坂本雄二だ」

「……Aクラス、霧島翔子」

お互いの名前を告げる。いよいよ最後の戦いだ。

「教科は何にしますか？」

「教科は日本史。それと、小学生レベルで上限ありのテストでお願いします」

『小学生レベルだって……?』

『満点確実じゃないか』

『集中力の勝負だな』

Aクラスから驚きの声がる。まあそうだろうね。最後の勝負がテストなんだから。（それも小学生レベル）

「分かりました。では問題を用意しますので少々お待ちください」

そう言って高橋先生は教室を出る。後は雄二次第だ。

~~~~~

なのはSIDE

『それでは準備はいいですね?』

『ああ』

『……はい』

『それでは、始め』

スクリーンに映る二人のテスト風景。どうなるだろう？坂本君曰く『大化の改新』ができれば勝てるらしいけど……。

スクリーンにテスト風景と一緒に映る問題を私たちは見る。大化の改新、大化の改新……

（ ）年 平城京に遷都

（ ）年 平安京に遷都

小学生レベルの問題。これは、出てるかな？

（ ）年 鎌倉幕府設立

（ ）年 大化の改新

あ……出た。

「アキ君……」

「うん。これで……」

「はい、私達の設備が……」

『『『『システムデスクに！』』』』』

《テスト結果》

霧島翔子 97点

坂本雄二 53点

私達の卓袱台がみかん箱になった。

終結と告白と担任交換

「三対二でAクラスの勝利です」

そんな風に淡々と事実を告げる高橋先生の言葉を、まるで聞き流すかのように私達は目の前の画像を見る。

坂本雄二 53点

……うん。やっぱり何度見ても点数は変わらないの。

「……雄二、私の勝ち」

「……殺せ」

「いい覚悟だ！殺してやる！そして虚数空間に沈めてやる！！」

どこからかレヴァンティンを取り出しアキ君が坂本君に斬りかかろうとしている。……って、ちょっと待って！

「アキ君落ち着いて！」

「明久君待ってください！」

私と瑞希ちゃん慌ててアキ君を取り押さえる。それでもアキ君はジタバタと暴れる。

「離すんだのはに瑞希ちゃん!というか何で止めるの!?!今から僕はこのバカに『ミンチ　?50円』にする体罰をしなくちゃいけないんだ!」

「それはもう体罰じゃなくて処刑です!」

そう言って瑞希ちゃんはアキ君を止める。やがて「チッ」と舌打ちをしてアキ君は止まった。

「といふかなんだよ53点って!?!0点ならまだ名前の書き忘れとかあるのに53点って!」

「いかにも俺の実力だ」

「このアホウがあーっ!っ!」

坂本君の一言で再び斬りかかろうとするアキ君をまたも必死に抑える。まったくもう……

「……雄二、約束」

と、霧島さんがこっちにやってくる。約束って……ああ、勝った方は負けたほうの言うことを何でも聞くって言う。

その言葉を聞いた瞬間、ティッシュで鼻栓をしたムツツリー二君がカメラを準備し始める。なに?何なの一体?

「分かってる。何でも言え」

「……それじゃあ、雄二、私と付き合って」

そう言い放った。

~~~~~

明久SIDE

そんな霧島さんの言葉に、僕はポカンとなる。えっと、これって……？

「やっぱりか。お前まだ諦めてなかったのか」

「……私は諦めない。ずっと雄二のことが好き」

「拒否権は？」

「……ない。約束だから。だから今からデートに行く」

そう言って霧島さんは雄二の襟首を掴んで歩き出す。

「おいちょっと待て！ やっぱこの約束は無かったことに……！」

つかつかつか バタンッ

二人がいなくなった所で、僕は思わず呟く。

「えーっと、これって……」

「雄二は霧島に告白された。そう言うことじゃな」

「えっと、じゃあ霧島さんが瑞希ちゃんやなのはを見てたのは？」

「単に雄二の近くにいる異性が気になっただけじゃなかろうかの？」

……なるほど、それならある程度は理解できる。それにしても、雄二の奴。「やっぱり」ってことはこうなると分かってたな？

「さて、Fクラスの諸君。遊びは終わりだ」

そんなことを思っていると、なぜか鉄人がそう言ってくる。なに？ なんなの？

「あの、鉄じ……西村先生？何か御用で？」

「なに、わがFクラスの補習に関してのことだ」

……わがFクラス？

「喜べ。今回の件でお前達Fクラスの担任は福原先生から俺になった。これから一年、死に物狂いで勉強できるぞ」

『『『『な、なにいつ?!?!?』』』』

僕らFクラス男子はそろって悲鳴を上げる。な、何だと!?

「いいか、お前達は今回実に良くやった。それは認めてやろう。だがな、人生には勉強は必要なのだ。その証拠に、坂本が不勉強だったから最後は負けたのだ」

畜生! 雄二のせいでこんな、最悪な事態になったじゃないか!

「吉井。特にお前と坂本は念入りに監視してやる。なにせ学園始まって以来初の観察処分者にA級戦犯だからな」

「そうはいきませんよ! なんとかしても監視の目を掻い潜って今まで通りの楽しい学園生活を過ごしてみせます!」

「……お前には悔い改めると言う考えはないのか?」

そんな風に呆れる鉄人。とはいえ、今僕は少しでも監視の目を掻い潜って今まで対してやる気がある。三ヶ月後にまた試召戦争を起こしてこの教師から逃れるために。

「とりあえず。今日は今までの頑張りに免じて補習はしないでおいでやろう。ただし明日から授業とは別に二時間補習時間を設けてやろう」

「先生、そうは言わずに今からやりましょう! 思い立ったが仏滅です!」

「吉日だ。お前にしては珍しいことを言うものだが、そう言ってる間に皆帰ってしまったぞ?」

そう言って後ろをさす鉄人。あれ？皆いつの間に！？残ってるFクラスは瑞希ちゃんに須川君と何かを話してるのはただだ。この、薄情者どもめ！

「さっ、明久。今日はもう帰ろう？」

「そうです。今日はもう帰りましょう」

そう言って瑞希ちゃんとフェイトが僕の腕を掴む。というかいつの間に！？

「明久、駅前においしいクレープ屋さんがあるんだけど一緒に行かない？」

「駅前って『ラ・ペディス』ですよ？だったら私も行きたいです！」

「うん。もちろんだよ瑞希。一緒に行こう？もちろん明久も」

「いや、その今月はもう懐がピンチで……」

なにやら色々と相談し始めてる二人に僕は意見しようとする。僕の生活状況は二人も知ってるはずだからこれさえ言えば分かってもらえて……

「あ、アキ君。はいこれ、先月のバイト代」

そう言っただけされるバイト代。まるで狙ったかのように思えるのは僕の気のせいだろうか。



「いや、その、今日は僕、西村先生と自主補習を」

「いや吉井、今日は先生も用事がある。じっくり青春を謳歌するといいい」

いけしゃあしゃあとそんなこと言う鉄人。おのれ鉄人!!

「さっ、明久(君)行こう(行きましょう)」

「ちょ、ちょっと待って!せめて鞆くらい取りに行かせて!ちょ、襟、襟が切れる!襟が切れるってばああっ!」

僕の叫びは、学園に響き渡った。

## デートは突然になの　　SIDE FATE

「とーきーをー超え刻まれたー、かーなーしーみーの記憶ー……♪」

そんな歌を口ずさみながら、私は姿見で服を着る。私は黒が好き  
な色だから持つてる服も黒基調が多い。一度は女の子っぽい色の服  
も買おうかと思ったけど、結局は「いつもどおり」ということで黒  
基調の服にした。それに……

「明久も好きだっていつてくれたしね♪」

半年ほど前、着てきた服を見た明久が言ってくれたんだ。

『フェイト、その服っていうか黒ってフェイト似合うね?』

「あの時はうれしかったな」

思わず顔を綻ばせながらそのときを思い出す。うん、やっぱり嬉  
しい。

コンコン

『フェイト、入るぞ』

突然のノックに驚きながらも、私は一呼吸入れて対応する。

「うん、大丈夫だよ。お兄ちゃん」

そう伝えると扉が開き、お兄ちゃん……クロノ・ハラオウンは部屋に入ってくる。

「おはよう、フェイト。どうしたんだ、随分と機嫌がいいじゃないか？」

「え？そう見える、やっぱり？」

「まあ、お前が歌を歌うなんて事は早々しないからな」

あ、聞かれてみたい。

「あはは……つい」

「それで？どうしたんだ、そんなに上機嫌で。それに着ている服も随分と気合が入ってるみたいじゃないか？」

「あ、やっぱりそう思っちゃうかな？」

まあ、結構気合が入ってるということは分かっていたけどね。

「えっとね？今日……デートなんだ、私」

そう、今日は明久とデートなんだ。まあ、映画を見るだけなんだけどね。母さんが映画の割引券を手に入れて、三枚それがあるから私と明久、そして瑞希の三人で行こうというわけなんだ。

「……デート……そうか……」

「どうかしたの？お兄ちゃん？」

「いや、なんでもない」

そう言っ、お兄ちゃんは部屋を出て行く。どうしたんだろう、ホントに？

『あら、クロノ。そんな杖をもってどこ行くの？』

『母さん、止めないでくれ。これから僕は大事な用があるんだ』

『あら、そんなヤクザすら逃げ出しそうな顔をしてまでどんな用事なのかしら？』

『決まってる。、フェイトのデート相手を抹っさ……デートをやめるように交渉するだけだ』

今、抹殺って言いかけなかった！？

私は慌てて部屋を飛び出す。

「お兄ちゃん、そんなことやめて！そんなことをしたら迷惑だよ！」

周りにも、私にも！

「そうよ、クロノ。それにいい加減アナタも妹離れしたら？」

そう言っ、お兄ちゃんをいさめているのは私とお兄ちゃんのお母さんのリンディ・ハラオウン。今日も今日とて歳とかを感じさせない若さがそこにある。

「そうだよ!」

「何を言うんだ、母さん。それにフェイトも。僕はただフェイトに悪い害虫が付かないようにしてあげようとしてるだけだ」

ああ言えばこう言う、とはこのことを言うんじゃないかな? と思った今日この頃。

「それにしても、フェイト。今日は一体だれと行くんだ?!」

「誰って……瑞希に、明久と……」

「あらクロノ、どこ行くの?」

「止めるな母さん! 僕は今からアイツを完全凍結して虚数空間に沈めなきゃならないんだ!!」

何てことだろう。たった一言で明久は『闇の書』と同じ対処法を受けることになるなんて。あれ? 闇の書? 私っては何言ってるんだろう?

「そうだフェイト。今度その明久君を家に連れてきたら?」

「え、いいの?」

「母さん! 何を言うんだ!!」

「いいじゃない。私も一度会ってみたいわ。フェイトの初恋相手に」  
♪

そんな母さんの言葉に、私は頬が熱くなるのを感じた。

## デートは突然になの

日曜日のこの日、僕は瑞希ちゃんとフェイトの三人で映画に行くことになった。

財布におととい貰ったばかりのバイト代を入れ、ポケットにケータイごとねじ込んで家を出た。マンションから出る途中、土郎さんから電話がきた。出てみると、開口一番に「一緒に害虫退治をしないか?」といきなり言われて驚いた。何が一体どうしたのかと思っただが、「先約があるので」と言っただけのまま切った。土郎さんの暴走は今に始まったことじゃない。触らぬ神にたたりなし、だ。

待ち合わせ場所の噴水の所に行くと、もうすでに二人とも来ていた。もう少し早く来るべきだったかな?なんて思いながら二人のところに向かう。二人とも僕に気がついてないのか、互いが着ている服について話をしている。洗いやすさ優先の僕の服に対して、二人は気合の入った服装だ。そんな服を着て来てくれたのも、僕に思いを寄せてくれてるからだと思うとすごく嬉しいと思う。

なんとなく二人の会話が気になったので、そのまま聞いてみることにしようかな?なんて思ったので聞いてみることにした。

『フェイトちゃんのこの服、どこで買ったんですか?』

『水無月デパートだよ』

『あ、あそこで買ったんですか?へへ、今度私も行ってみます』

『うん、今度一緒に行こう?』

うん、実に女の子らしい会話だ。

そろそろ行こうかな？なんて思い、二人に近づこうとした瞬間。

『でも、私だって今日は勇気を出して着てきました』

『え……？まさか、瑞希も？』

……？勇気を出して着てきた？何のことだろう？

『はい、着てきました』

『そっか、私も着てきたんだ』

『そうなんですか……。フェイトちゃんも着てきたんですね？』

『うん、瑞希も着てきたんだね？』

『『勝負下着を』』

なぜだろうか、今とてつもない死亡フラグが立ったような気がする。

「二人とも、その……お待たせ」

「あ、明久君!？」

「あ、明久!？」



色々と我慢の限界だったので二人に合流すると、二人は顔を赤らめて僕を迎えてくれた。

そして僕は誓う。今度から僕はこういうことがあったら一番に集合場所に来るようにしよう、と……

~~~~~

クロノSIDE

僕こと、クロノ・ハラOWNは多少の苛立ちを抱えて学園に向かっていた。なに？なんで日曜に学園に行くんだって？仕方ない。何せ僕は文月学園の生徒会長だからね。学園長がほとんど放任主義、教頭先生は学園の利益を上げることしかないもんだから、生徒で片付けられる問題や仕事は生徒会が片付けなきゃならないんだよ。まったく……。

なに？何で苛立ってるんだって？そりゃあそうだろう、なにせ僕の妹のフェイトが今日デートをするそうだからね！オマケに相手は学園始まって以来初の観察処分者、要するに問題児だ。そんな問題児がフェイトとデートするんだ。苛立たないわけが無いだろう！？更に言ってしまうば、もう一人の女子と一緒にいたいじゃないか。フフ……吉井明久、君は僕を苛立たせるのが得意みたいだな？

そんな苛立ちを抱えたまま学園に行こうとしてたその道中だ。

『会長代理、ターゲットはまだ動かないんでありましょっか？』

『慌てるな、五十嵐一級審問官。逃れられない証拠を掴めばわれらの勝利なのだからな。我慢も戦略だ』

『はっ！』

彼らに出会ったのは。

「あー、そこに君達。一体何をしてるんだ？」

「何だキサマは？我ら神の加護を受けた聖なる団体。『FFF団』、通称『異端審問会』に何か用か？」

なんだ？新手の宗教団体か？

そう思って、ざっと彼らを見渡す。人数は40人以上か、随分といるな。

「いちおう聞くが、何をする団体なんだ？」

「フッフ、知りたいのなら教えてやろう！我ら異端審問会は異性と交流をするというこの世の真理、世界の理に反する畜生共を駆逐する神聖なる団体なのだ！」

そう言って持ってる得物を見せる覆面をしているこの男。

なるほど、彼女持ちを大人数でボコにしようという団体のようだ。

「そして今、我らはその畜生を駆逐しようと画策しているところなのだ！」

そう言って一方を指差す。そこにいるのは……

「（フェ、フェイト！？）」

今朝、デートだと張り切っていた妹だった。

……まさか

「聞かせて欲しい。君達が制裁を加えようとしている男は、もしか吉井明久という名前ではないか？」

「その通りだ。よく分かったな？」

なぜだろうか？体の血液が踊りだすような感覚を覚える。

「もう一つ聞きたい。この団体……異端審問会とやらは誰でも入れるのか？」

「この世の真理、この世界の理に反しなければ我らは悪魔でも受け入れよう！」

そうか、よし！

「僕も入れて欲しい」

そう決意したのだった。

デートは突然になの？

さて、最初から色々あったけど僕は目的の映画館にやって来た。そうか、僕らは今日映画を見るはずなんだよね。別にラブホに行つて大人の階段を五段飛ばしで登るわけないもんね。……………そう、だよな？ なんだか色々考えてたら自信がなくなってきた。

「それでさ、どの映画を見るの？」

気を取り直して、今回の言いだしっぺであるフェイトに聞いてみる。ひょっとしたら何か見たいものがあるのかもしれない。

「えっとね、明久や瑞希の意見も聞きたいから実は決めてないの。なんとなく見たい奴はあるけどね」

少々申し訳なさそうにフェイトは言う。なるほど、そういうことか。

「それじゃあまずは、映画のポスターやパンフレットで『雄二』、どれが見たい？』…………？」

言おうとしてたことを言い終わる前に、聞き覚えのある声が遮った。

「…………俺の願いは、叶え、られるのか…………？」

声のしたほうを振り向くと、そこには両手にシックな木製の腕輪（これまたシックな鎖付き）をつけた我らがFクラス代表と、まるで手綱を握ってるかのように鎖を持ったAクラス代表の姿がそこに

はあった。

「雄二……？それに霧島さん？」

「……吉井？」

「明久！頼む、後生だ！俺を助けてくれ！」

僕に気がつくと、雄二は僕に駆け寄ってくる。その顔はまるで絶望の中で希望を見つけた人間のようなのだ。

「……雄二、浮気の現行犯」

「おい待て！これのどこを見ればそういう風に映るんだ！？」

そんな雄二の言葉などどこ吹く風とばかりに、霧島さんはポシェットからバチバチと稲光るスタンガンを取り出した。

「おいこら！そんなもんどこで手に入れやがった！つか俺の話を聞け！」

「……土屋という人が売ってた」

「ムツツリイニイイイイ……！！！」

驚愕の事実には僕は驚くしかない。それにしてもムツツリニめ、ムツツリ商会謹製盗撮写真、通称『ムツツリソウル』だけじゃなくこんな物まで売り出したのか。

とはいえ、こんな人の多い映画館でそんなことしたら最悪警察沙

汰になりかねない。しょうがない。あの方法を教えよう。

「えっとさ霧島さん。スタンガンより効果的な方法があるよ?」

「……?」

「ちょっとお耳を拝借。……………ゴニョゴニョ……………ゴニョニョ……………」

以前瑞希ちゃんとフェイトにやられた方法。なに、これをする位なら映画くらいなんてこと無いだろう。

「……わかった。雄二」

「あん?」

「……手を出して」

「なんで?」

「……いいこととしてあげる」

「お前の言う『いいこと』は俺への死刑宣告と受け取っていいのか?」

死刑宣告……。まあ、ある意味ではそうだし、ある意味ではそれ以上にまずいことなんだけどね。

「……出さないと（バチバチ）」

「わ、分かった!分かったからそれしまえ!」

流石にスタンガン相手ではどうすることもできずに、雄二は両手を差し出す。

「……えい」

ふにょん

「なにをする翔子おおおおおー！　！　？」

霧島さんに確保された雄二の手は、突っ込まれていた。

霧島さんのスカートの中に。

「……吉井が教えてくれた」

「明久！てめえ！俺に何か恨みでもあるのか！？」

恨み？ そんなの腐るほどあるじゃないか。何をいまさら。

「……雄二、映画を一緒に見る」

「ふざけんな！映画を見る以前に俺の手を開放しろ！！」

「……見ないなら、下着の中に手を入れる」

「俺の命が社会的な意味でも風前の灯に!？」

霧島さんの問題発言に雄二の表情はムンクになりつつある。言いだしっぺは僕だけど、雄二に対してなら大した罪悪感はないから不思議だ。

ちなみに、僕の場合は映画を見る見ないじゃなくてお金の問題。今にしてみれば、よく警察沙汰にならなかったものだ。

「わ、分かった！分かったから！映画を一緒に見てやるからやめてくれ！！俺を社会的に抹殺しないでくれ！」

ようやく観念したのか、雄二はついに折れた。いやまあ、これには折れる以外の選択肢なんてないんだよね、実際。

~~~~~

## クロノSIDE

『ようやく……、ようやく家族になれたんに……！こんなあらへん！』

銀色のスクリーンに映る、車椅子の少女の叫びが映画館に木霊する中で僕はそんな、それこそ涙を誘いそうな台詞すら左から右に流してソイツを凝視し続ける。



「(吉井、明久あ……!)」

椅子のアームレストを握りつぶさんと言わんばかりにギリギリと握り締め、妹を誑かす怨敵を睨む。

ふふふ……。吉井明久、早く、早くキサマを真正面から見たい。そしてフェイトがこれ見よがしとばかりに手を乗せてる手を早く切り刻みたい。大丈夫。なぜかデュランダルは見つからなかったが、S2Uは用意した。ついでに靴下にたっぷり砂を詰めた。大丈夫。ヤレル。僕なら殺れる!

「くへへ……くへへへへ……」

『あの、会長代理?ほんとに彼を迎え入れてよかったのでしょうか?』

『大丈夫……と信じたい』

他の奴らが何か言ってるが気にしない。僕の目的はアイツだけだ。

『大丈夫です、主。私は、『祝福の風』リインフォース……。この世で、もつとも幸福な魔道書です……』

そんな、物語を締めくくる言葉にすら耳を貸さず僕はアイツを見続けた。クハハハハ!血沸き肉踊るとはこの事のようなあ!!

デートは突然になの？

『――お忘れ物のないよう、お気をつけください。なお――』

そんなアナウンスが聞こえる中。僕らは一息ついていた。いやまあ、つかなきやならないんだよね。なにせ……

「ひつく、ひつく……あんなの、悲しすぎます」

「ぐすつ、戦いが終わったのに、あんなのって……」

目の前で未だに泣いてる二人がいるせいでもある。というか、映画がラストに近づいてる辺りからグズリ始めてたんだよね。

さて、どうしたものか。僕は男の性とでもいうのか、グツとはしたけど泣いてはいなかった。でも、二人はまだ泣いてるし……。

「ちよつと、飲み物でも買ってくるよ」

とりあえず、泣いて水分も減ってるだろうから飲み物でも買ってくるかな？

そう思って二人にそう告げ、僕は席を立って自動販売機に向かう。えーっと、自動販売機は……カウンターの向こうか。

「えーと、瑞希ちゃんは紅茶かな？フェイトは……コーヒーかもしれないけど、砂糖は入ってたほうがいいのかな？それとも……」

瑞希ちゃんはよく翠屋で紅茶飲んでるから分かるけど、フェイト

はどうなんだろう？たまにお昼と一緒に食べるときはコーヒーの缶を持ってるけど……。

「フェイトはコーヒ―は無糖。完全なブラックで飲んでる。母さんが極度の甘党なせいかどうかは知らないけどな」

なるほど、フェイトは無糖なんだ。それじゃあ………あれ？

今、誰が教えてくれたんだ？フェイトの声じゃないし、瑞希ちゃんの声でもない。はて？声の主を知るために、僕は振り向く。

「しゃっああー……っ！！」

振り向くと、いきなり靴下で作った即席ブラックジャックの一撃が叩き込まれるところだった。……って！？

「うわっ！」

ドガンッ！

突然の攻撃を慌ててしゃがんで避ける。ちょっ、何！？今のはいつたい何！？

「ナルホドナルホド……今のを避けるとはヤルジャンイカ……」

振り向くと、そこには右手に杖を、左手には先ほどのブラックジャックがある。そしてそれを持ってる人物は……

「く、クロノ……会長……？」

そこには我らが文月学園生徒会長、クロノ・ハラオウンの姿がそこにあった。

「吉井……聞いておこう」

「な、何をですか……？」

「頭をこれ（ブラックジャック）でトマトのようにされて天国に行くか……。それともコイツ（S2U）で粉々にされて地獄にいくか……。特別に選ばせてやろう。なに、僕はこれでも生徒の意見はちゃんと聞く方だ。安心しろ」

どちらにせよ、それは死刑宣告ではないだろうか。

「さあ、どっちがいい？両方いつてみるか？それもイイゾ……ケケケケケ……」

ヤバイ、これは色々ヤバイ。というか忘れてた。この人が重度且つ極度のシスコンだと言うことを……。

それはそうと……

「えっと、Fクラスの皆？なんでそんな怯えた風なの？」

なんとなく、クロノ会長の後ろにいるFFF団の皆が気になったので聞いてみる。

「……我々は……魔王を呼んでしまった……」

そんなことを言ってそっぽ向く近藤君。なるほど、確かにこれは



「あの、クロノ会長とフェイトのお姉さんで……？」

「あらやだ、お世辞が上手いのね？こんなおばさんに」

へ？おばさん？？

「母さん！なんでここに！？」

と、ようやく落ち着いたのかフェイトがこっちに慌ててやってきた。どうやら泣き止んだみたいだ。……て、いま、なんて……？

「あの、フェイトやクロノ会長とはどういったご関係で……」

「え？この子達の母親よ？」

へ……、母、親？

「バカなっ！？」

ちょ、母親って！？若すぎでしょ！？というか、桃子さんといい、瑞穂さんといい、なんで僕の知り合いの母親ってこうも若い、っていうか20代にしか見えないの！？まあ、瑞穂さんは20代にも見えないけどさ！

「ウフフ……。それにしても、ごめんなさいね？邪魔しちゃって」

「えと、いえその……」

「さっき署の方に通報があってね？映画館に変な集団がいるって。」

だから来てみたら……、まさか家の子が主犯とはね……」

そう言ってリンディさんは呆れ顔でため息をつく。まあ、その気持ちは分からんでもない。なにせいざ現場に来て見れば自分の息子が騒ぎの中心にいるっていうんだからね。

「まったく。クロノ、今朝もいいかげん妹離れしなさいって言ったでしょう？」

「くそっ！ 離してくれ！ 僕はこれからあの害虫を粛清しなければいけないんだ！」

「話は署で聞こうかしらね？ ま、今日中には帰してあげるけどね」

そう言ってリンディさんはクロノ会長を連行（こうとしか言いようが無い）して行く。

「あ、そうそう。これからもフェイトをよろしくね？ 吉井明久君？」

「え？ あ、はい！」

そう言って、ウインクをしてリンディさんはその場を後にしたのだった。

『うがああああー！ー！ー！ー！ 覚えてろよヨシイアキヒサアー！ー！ー！ー！ー！ー！』

とんでもない雄たけびを置き土産にして。

「明久、何があったの？」

「えと、まあ、色々だね」

そうとだけ言っておいた。

「あ、そうだ。フェイト、ハイこれ。コーヒー」

そう言っ、少々冷めてしまった缶コーヒーを手渡したのだった。

ちなみに、戻ったら瑞希ちゃんは微妙にだけど泣き止んでいたのだった。



デートは突然になの ｝SIDE SUGAWA｝(前書き)

今回の主役は須川君です。

デートは突然になの　SIDE SUGAWA

やあみんな。俺の名前は須川亮。文月学園2年F組、異端審問会の会長を務めてる。だが、俺は今日はその『異端審問会会長』の職務をしない。悪い言い方でいうと職務放棄ってやつだ。

じゃあ、職務放棄までして何をやるんだって？それは……

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「ここか……」

日曜日。俺は今日、クラスメイトであり数少ない女子の一人、高町なのはさんの自宅を訪れていた。コラそこ、ストーカーとか言うな。

理由としては、まあ俺は今日彼女にお呼ばれされたんだよな。

試験召喚戦争の時、何度か高町さんに特攻（またの名を突貫）をして欲しいと言われ、俺は彼女の頼みならとその都度やってきた。そしてAクラス戦を終えた放課後、俺は高町さんに今までのお礼ということパフェをおごって貰うことになったのだ。

「さて、早速中に入るか」

扉を押すと、カランカランと小気味のいい音が響く。と、奥一

恐らく厨房――から黒のエプロンを身に付けた一人の女性が出てきた。

「あ、いらっしやいませ」

そう言って笑顔を見せるその女性。気のせいか、高町さんに似ているような……。

「あの、すみません。高町なのはさんはいらっしやいますでしょうか？」

とりあえず、目的の人物である高町さんのことを聞いてみることにした。

「あら、なのはのお友達？珍しいわね、あの子がアキ君以外を呼ぶなんて」

アキ君……？ああ、吉井のことか。それにしても、高町さんを名前で呼び捨てにしてるって事は、身内だろうか？

「あの、失礼ですが。高町さんのお姉さまで？」

「あらやだ、こんなおばさんに。お世辞が上手いのね？」

「へ？あ、いや。別にお世辞とかではなく……」

いや、おばさん？どう見ても『おばさん』ではなく『お姉さん』とかの方がピタリとくるんだが？

「高町桃子。なのはの母です。よろしくね？」

「え、ああどうも。ご丁寧に。……………へ？」

いま、この人なんて言った？えと、なのはの母って言ったよな？え？あれ？？それじゃあ……………

「バカなっ!？」

ちよっ、若すぎだろ!？高町さんが今年で17のはずだから、と言うことは最低でも33〜34歳って事だよな!？いや、それにしたってこの若さは何だよ!？充分20代で通じるぞ!？というか33〜34歳でこれなら俺のお袋なんてババア同然じゃねえか！

「あの……………どうかしたのかしら？」

「…………え、ああすみません、ちよっと考えごとを」

まずい。ちよっとトリップしてた。

「あ、すみません。自分は須川亮といいます。高町さんおクラスメイトです」

「そう。それで、今日はなににしに？」

「えっとなですね。実は高町さんにいろいろあってお呼ばれされました」

まさかその原因が特攻（突貫）とは思えない。

「あら、そうなの？それにしてもなのはったら。アキ君以外にこ

んな男の子を連れてくるなんて、以外に隅に置けないわね？」

「あの、吉井って、よくここに「桃子、どうしたんだ？」……？」

俺の声にかぶさるように、一人の男性が奥から出てくる。誰だろうか？

「あら、アナタ」

なるほど、旦那さんのようだな。そういえば、家族でこの店を経営してるって言ってたっけか。

「おや、そちらの方は？」

「ああ、彼は須川亮君。なのはがアキ君以外で呼んだ男の子よ？」

「……ほう、男……か……」

なんだろうか、目の前の人の雰囲気が一気に変わったのだが。あえて表現するならプラスが一気にマイナスになったような感じだ。

「ちょっと失礼……」

そう言って桃子さんの旦那さんは置くに引っ込む。どうしたんだろうか？まさかとは思うが、俺を高町さんに近付く男として成敗しようとか、か……？

『……ああ、明久君。私だ、ちょっと一緒に害虫退治をしないかい？』

男どころか害虫という予想の斜め上を行くともない立場に思わず涙が出そうだ。

「気にしないでね？これはいわゆる病気みたいなものだから」

だとしたら間違いなくこれは奇病にカテコライズされるだろう。

カランカラン……

「ただいまー、って須川君もう来てたんだ？」

振り向くと、テニスラケットの入ったバッグを抱えた高町さんがいた。どうやら部活があったらしい。

「ええ、まあ」

「じゃあ、ちょっとだけ待ってくれないかな？この通り、部活をやったせいで汗びっしょりだからシャワーを浴びてきたいの」

「え？ええ、分かりました」

それにしても……

「高町さん、そんなに長袖着て暑くないんですか？」

いくら今はまだ春とはいえ、今日は結構暑い日だ。

「え……？あ、うん。まあ、平気だよ？大丈夫。これでも私寒がりだから」

そう言って、高町さんは逃げるように二階に引っ込んでいった。

「どうしたんだ、一体？」

なんとなく思った疑問だが、特に気にする必要もないかと思って  
その場で忘れたのだった……。

デートは突然になの　　SIDE　SUGAWA　　？　　）

「ごめんね、さっきは？」

そう言いながら申し訳なさそうに誤る高町さん。だが、正直今の俺にはそんな言葉すら上手く聞き取れないでいた。いや、何でかっ  
ていったら……。

――足を優しく受け止めてくれる薄いピンクの絨毯。

――少女小説とテニスの本、そして最新のCDが存在を主張する  
本棚。

――部屋の隅にそっと置かれた机。

――ベッドにチョココンとおかれたピ○チュウのぬいぐるみ。

――部屋の中心にある丸いテーブル。

――そして、男の夢と欲望が詰まっているであろうタンス。

そう。俺は今、生まれて初めて女の子の部屋に足を踏み入れている。その感激と戸惑いでなかなか落ち着けないでいたりする。

「（落ち着け、ひとまず落ち着け……。そうだ、いつもどおりにし  
てればいいんだ）」



「あの、須川君？」

「What? Miss Takamachi？」

「ど、どうしたの!？」

……穴があったら入りたい。

「え、ああごめん。その、女の子の部屋に入ったことが無くて少し緊張しまして……」

「なんだ、そういうことか？別に気にしないでいいよ。アキ君とかはよく平気で来るし」

……吉井。お前とは一度、異端審問会で話し合わなくてはならないようだな？

「その、吉井はよくここに？」

「うん。もともと幼馴染だしね。アキ君が私の家に、私がアキ君の家に行ったりもしてたし」

「へえ……」

色々と罪状が増えていく異端者に色々と苛立ちながら、俺は部屋をグルッと見回す。うーん、なんというか……

「（女の子、いや……高町さんの匂いがする）」

そう思うと色々と考えてしまう。いつもあのベッドで寝起きてる

高町さん。机に向かって勉強してる高町さん。少女小説やテニスの本を読んだり、CDを聞いている高町さん。そして、あのダンスからし、し、下着を出して……！！

「(ボタボタボタ……)」

「す、須川君！？どうしたの！？」

いかん、少し妄想に拍車がかかった。

「え？ ああ、大丈夫。なんかいきなり鼻血が出て……」

「はい、ティッシュ」

そう言って箱ティッシュを渡してくれる高町さん。それにしても、想像で鼻血を出すとは。ムツリニじやあるまいし。これも参考書（エロ本）でのシミュレーションが足りない……ゲフンゲフン！

~~~~~

それから、色々なことをした。

高町さんがお勧めするテニス雑誌と一緒に見たり、高町さんが持っている昔のアルバムを見たり、途中高町さんのお父さんが妨害（被害？）してきたがまあ、なんとかなった。今日の本来の目的である

パフェも食べさせてもらった。食べるたびに高町さんのお父さんが射殺さんばかりに睨んできたのがかなり怖かったが、まあなんとかなった。

そして気がつけば、夕方になっていた。

「今日はありがとうございました。パフェ、おいしかったよ」

「そっか、そう言ってくれとうれしいよ」

そう言って笑顔を向ける高町さん。俺はもう死んでもいいかもしれない。

「それじゃあまた明日、学園で」

「うん、また明日ね？ 亮君」

へ……………？

「あの、高町さんいまなんて「なのはだよ」言って…………？」

「今日、一緒にいろんなことをしたんだし、一緒にクラスだよ？ もう私達は友達だよ。それに、私は友達の名前で呼ぶことにしてるの。亮君はイヤ？」

「そんなことは！」

漢、須川亮。ついに、この日がやって来た！ H A H A H A ! サラヴァー！ 彼女いない歴〓年齢！ ついに俺の時代がキター……………（

。▽。）――！！

「あの、亮君？」

と、いかん。トリップしてた。そもそもまだ彼女じゃないんだ。ただ、その可能性が出ただけだ。落ち着け、とりあえず。

「おえ、大丈夫です。なのは……さん」

やばい、流石に呼び捨ては恥ずかしすぎる……。吉井がうらやましいぜ、本当に。

「それじゃあ、また明日」

「うん」

そう言って俺は高町家を後にした。

ちなみにその道中、とあるマンションを横切ろうとしたときに姫路とテストロッサさんに挟まれるように歩く吉井を見て、一瞬明日は異端審問に掛けてやる。と思ったが、見過ごしてやることにした。なに、今日は気分がいいからな。特別だぜ、吉井？

理由と経緯と解決法

バカテスト 特別問題 問題提供 Dr. クロ様

明久がクロノと雄二と美波とFFF団（須川以外）にボコボコにされています。貴方は次の四つの選択肢の中からどれを選びますか？

？明久を助ける。

？一緒に明久をボコボコにする。

？無視する。

？明久を助けて、クロノと雄二と美波とFFF団（須川以外）にお仕置きする。

※この四つの選択肢から選んでください。あ、？を選んだ場合、そんな風にお仕置きをするのか具体的に書いてください。

姫路瑞希、フェイト・T・ハラオウンの答え

「？以外あると思ってるんですか？ちなみにお仕置き方法は……：そうですね、とりあえず皆ごろしくしゅんっ！……ひとまず全員石段で正座ですね。そして二度とこんなことしないように、もといこんなことしたいと思わないようになるくらい身体にいろいろと刻み付けたいと思います。」

教師のコメント

とりあえず、Fクラスの皆さんおよびハラオウン君は全力で逃げることをお勧めしたいと思います。

高町なのはの答え

「?ですね。え?お仕置き?やだなあ、そんなことするはず無いじゃない。私はそんなことしません。はい。私がするのはお仕置きじゃなくてOHANASHIですから。そうですね、とりあえずざっと十時間位OHANASHIしようと思います。」

教師のコメント

言葉でのお話だと信じています。

~~~~~

月曜日の朝。私は学園に向かう前に瑞希ちゃんの家に行った。理由は学校に誘うためだ。

ピンポーン……

中々でないな。どうしたんだろう？

そんな疑問を抱き、なんとなくドアノブに手を掛ける。あれ、開いてる？

「おはよう、瑞希ちゃ『お父さんのバカーーーっ！』ふえっ！？」

開けた途端、そんな声が聞こえてきました。なに！？なに？と！？

『いや、だから……おうっ！？ や、やめなさい瑞希っ！ どあああーっ！！ こら！ テレビを投げるな！』

『知りません！ お父さんのバカバカバカ！』

『だから私はあくまで可能せ『ゴインッ！！』ぶはっ！』

そんなやり取りの後に玄関にやってきたのは……

「え……？　なのは、ちゃん……？」

「瑞希ちゃん、一体なのがあつたの……？」

目を赤くした瑞希ちゃんでした。

~~~~~

「そっか、瑞希ちゃんのお父さんが……」

「はい、だから私許せなくて……」

あんなことが起きた、か……。

学園に行きながら、私は瑞希ちゃんに事のあらましを聞いた。それは、なんでも瑞希ちゃんのお父さんが瑞希ちゃんに転校の話を持ちかけてきたらしい。

理由としては二つほど。まずはFクラスの劣悪な学習環境。元々、卓袱台に綿がほとんど入ってない座布団なんて設備、そして廃屋と言った方が良いんじゃないかと思いたくなる教室という設備だった。だけど、私達はAクラスとの試召戦争に負けたせいで設備がさらにワンランクダウンし、今やみかん箱にゴザなんて設備になってる。

そして、もう一つはクラスメイト。元々最低ランクのクラスというだけあってクラスには成績が酷い生徒しかない。

要するに、設備の酷さとクラスメイトの成績の酷さが今回の話の原因らしい。だけど、瑞希ちゃんはそれを良しとしなかった。それが今朝の親子喧嘩みたい。

「でも、瑞希ちゃんのお父さんの言うことも分かるよ」

「でも、Fクラスというだけで皆さんをバカの集まり呼ばわりするんですよ!?!? そんなの許せません!」

ごめん、私から見てもFクラスはバカの集まりだと思うの。

「兎にも角にも、まずは皆に相談してみよ？ 何か、打開策が見つかるかもしれないし」

「そうですね、分かりました」

現在の方針を決め、私達は学園に歩を進めた。

~~~~~

その日の昼休み、私は屋上でお昼を摂っていた皆に今日の話を話してみた。

「そんな、瑞希ちゃん……」

「なるほど、姫路の転校か……」

話を聞き、まずはアキ君と坂本君がそう呟く。

「せやけど、姫路ちゃんのお父さんの言うことも一理あるね？ 実際、あんな劣悪環境で勉強となるとなあ……せめて、設備が前の位なら話は多少は変わるんやろうけど」

「そうだよ、八神さん。それもこれも……」

そう言ってアキ君は坂本君を睨む。だけどそれを坂本君は視線を逸らして避けた。

確かに原因の一端は坂本君にあるのは間違いないと思うの。

「でも、明久。設備のこともそうだけど、クラスメイトのこともどうするの？」

「うーん……」

フェイトちゃんの言葉に、アキ君は腕組みをして考える。でも、どうしよう？設備のこともそうだけど、クラスメイトの成績に関しても色々と問題があるなあ。

「みんな、お待たせ。飲み物買って来たぞって、どうかしたのか？」

「あ、亮君。実はね……」

戻ってきたばかりの亮君に事情を説明する。と、

「うーん、設備はともかく、クラスの成績とかなら何とかなるかもしれない」

「ホント!?!」

「ああ。これだよ、さっき壁にあったのを一枚失敬してきたんだ」

そう言って亮君はポケットから一枚の紙を取り出して私達に見せる。これって……

『清涼祭 召喚大会お知らせ』

「召喚、大会？」

「ああ、今度の学園祭で召喚獣を使った大会があるんだけどさ、これに出て、優勝なりすればFクラスでも成績に関しては多少は見直してもらえるんじゃないか？」

「そっか……。でも、出る以上はFクラス同士で組まなきゃ駄目だよね」

「そうだな、ここにいる面子で姫路とテストタロツサが出たら優勝は確実だろうが、かたっぽはAクラスだからな。そうになると、あんまり認めてもらえねえかもしれねえしな」

そんな坂本君の言葉に、全員が唸る。どうしよう……。

「ま、とりあえず今決めろってわけじゃねえんだ。ちゃんと考えてやったほうが良いだろうな」

坂本君のそんな言葉に、私達はそろって頷いたのです。

## 候補と新技術、解明なの

バカテスト 清涼祭アンケート

学園祭の出し物を決めるためのアンケートにご協力ください。

『喫茶店を経営する場合、ウェイトレスのリーダーはどのように選ぶべきですか？

【？可愛らしさ   ？統率力   ？行動力   ？その他（ ）】

また、その時のリーダーの候補も挙げてください』

土屋康太の答え

『【？可愛らしさ】 候補……姫路瑞希 高町なのは 島田美波』

教師のコメント

甲乙付けがたい、といったところですかね。

吉井明久の答え

『【？可愛らしさ】 候補……姫路瑞希（取り消し） 高町なのは（取り消し） 木下秀吉（取り消し） フェイト・T・ハラオウン（取り消し） 島田美波』

教師のコメント

用紙についてる血痕が気になるところです。

島田美波の答え

『【?その他(謝罪)】 候補……ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい……』

教師のコメント

用紙が所々焦げてるのが気になるところです。

坂本雄二の答え

『【?その他(結婚相手)】 候補……霧島翔子』

教師のコメント

なぜAクラスの霧島さんが用紙を持ってきたのでしょうか？

吉井明久の答え

『【?その他(初夜の相手)】 候補……姫路瑞希』

吉井明久の答え

『【?その他(童貞脱出相手)】 候補……フェイト・T・ハラオ  
ウン』

教師のコメント

なぜ吉井君の用紙が三枚もあるのでしょうか?

~~~~~

「それじゃあ、これでFクラスの出し物は決まりだね?」

Fクラスの教室。そこで私達は今回の清涼祭の出し物を決めていました。まあ、もう決まったんだけどね?

「じゃあ、私達Fクラスは喫茶店をやることにします。今から簡単に分担を決めるから、ちゃんと考えてね?」

そう言って進行係兼初書記でもある私は黒板に板書を始めます。

・ホール班（条件 ウェイター経験がある人、最低でも営業スマイルができる人）

・厨房班（条件 料理が大体できる人（必須））

「こんな感じだね。あ、もちろん両方できるって人はそれでも良いよ？ それじゃあホールはアキ君、厨房は私の方に分かれて」

私はそう言うと、Fクラスの皆はそれぞれ動き始めます。何人かは私のほうに来て、ほとんどがアキ君の方に行きました。対比で言うとうと8対2といった感じかな？ あ、もちろん8はアキ君ね？

「それにしても、ムツツリーニ君って料理できたんだね？」

勝手な想像だけど、ムツツリーニ君って家だとカップラーメンとかしか食べなさそうなイメージがあるんだよね。

「……紳士の嗜み」

そう言ってピイツとそっぽ向くムツツリーニ君。ひょっとして下心とか絡んでる？ 例えばウェイトレス目当てとか。

「亮君もこっちなんだね」

「ああ、こう見えても結構できる口なんだ。ま、中華喫茶が駄目だった分頑張るさ」

そう言って亮君は肩を竦めた。

「そして、ある意味ムツリーニ君や亮君より意外だったのが……」

私は、ううん。厨房班の皆は彼、坂本君を見る。意外だなあ、料理とかあまり縁なさそうなのに。

「……俺にも、いろいろあるんだよ!」

そう、投げやりな感じで坂本君は答えました。どうしたんだろう、一体?

「それはそうと、大丈夫なのか高町。鉄人の説得の方は?」

「ああ、それならもう説得は終わったよ。後は学園長から許可を貰うだけ」

「そうか、ならいいんだが。それにしても、大胆なことするよな。学園祭の売り上げで設備を買うためにはいえ、まさか音楽室を使うだなんてな」

そう、私が前から考えていたことだったんだけど、Fクラスの教室での出し物は音楽室でやろうということにした。元々Fクラスの教室は隙間風とかもあるし、カビの匂いなんかも酷い。ある程度は何とかしようと思ったんだけど、教室の畳の腐敗や教室のひび割れなんかはどうしようもなかった。教室の設備は学園の方針で変えられない。畳とかの設備以外のものは今からやって当日までに間に合わないことも分かった。だから、それを理由に西村先生伝いで学園長にそのことを伝えた。結果は大成功。後はさっきも言ったとおり学園長から許可証を貰うだけになったの。

「こうして喫茶店をやることになった以上、生半可な掃除じゃだめ

だもん。食べ物を扱う店が不衛生だとお客さんだってイヤだしね」

「流石は家が喫茶店のことはあるな。大したもんだ」

「さて、これからが大変だよ。椅子にテーブル、可能ならテーブルクロス。食器に調理器具に食材。揃えるものは沢山あるんだから」

そう言って気合を入れなおした時、教室の扉が開いた。

「なんだ、Fクラスは出し物が決まったのか？」

「はい。Fクラスは喫茶店になりました」

「そうか。それと高町、件の音楽室の許可証のことだが今学園長の所に行けば渡してくれるそうだ」

「あ、はい。分かりました」

「それと、吉井に坂本。学園長が呼びだ」

そんな西村先生の言葉に、ホール班の皆と何か話していたアキ君と坂本君が西村先生の方を見ます。

「学園長先生が？ 僕達に何の用です？」

「それは俺にもわからん。とりあえず、許可証を貰ってくるついでに行ってこい」

「分かりました」

そう言ってアキ君と坂本君は教室を出ていきました。それにしても、何だろう？ 一体？

~~~~~

## 明久SIDE

「それにしても、何だろうね？ 学園長が僕達を呼んでるなんて」

「明久だけなら観察処分者の仕事かお前に退学処分を伝えるだけなんだろうが、なんだろうな？」

「今さらって酷いこと言ったよね？」

コイツとは一度OHANASHIをしたほうが良さそうだ。

なんて考えてる間に、学園長室に辿り着く。

『……賞品に……として……』

『……こそ……勝手に……如月ハイランドに……』

「どうした明久？」

「いや、中で話をしているみたいなんだけど」

「そうか。つまり中には学園長がいるというわけだな。無駄足にならなくて何よりだ。さっさと入るぞ」

取り込み中は向こうが判断するってことか。雄二の言うことももっともだ。

「失礼しまーす！」

学園長室のドアにノックをして雄二は入っていった。

「本当に失礼なガキどもだねえ。普通は相手を待つもんだよ」

そう言ってため息を付くのは長い白髪が特徴の藤堂カヲル学園長だ。もともと研究者だったせいかな、随分規格外なところが多い人らしい。

「やれやれ。取り込み中だというのに、とんだ来客ですね。これでは話を続けることもできません。……まさか、貴女の差し金ですか」

そう言って眼鏡を弄りながら学園町を見るのは教頭の竹原先生だ。僕はなんとなく苦手としてる。もちろん、鉄人とは違う意味でだ。

「バカなこと言わないでおくれ。どうしてアタシがそんなセコイことしなきゃならんのさ負い目があるというわけじゃあるまいし」

「それはどうだか。学園長は隠し事が得意のようですからな」

「さっきから言ってるようだけど、隠し事なんて無いね。アンタの見当違いだよ」

「……そうですか。そこまで言うならここはそう言うことにしておきましょう。では、この場は失礼させていただきます」

そう言っただけで返して学園長室を出て行った。さっきから何を言ってるんだろう？

「んで、ガキ共。アンタ等は何の用だい？」

「用も何も、学園長先生が呼んでると聞いたので。あと、Fクラスの音楽室の使用許可を貰いにきました」

「ああ、その件かい。実はね、あんた達二人にちよいと働いてもらおうと思ってね」

「僕達二人に、ですか？」

「そうさ。本来ならアンタ一人で、観察処分者の仕事としてやらせるところんだけど今回は一人ではどうにもならなくてね」

そう言っただけで僕と雄二を交互に見る。

「それで、用件はなんだ。ババア？」

「アンタは少しは礼儀ってもんを知った方が良くないのかい」

「？」

「その言葉、そのままのしつけて返してやる。で、なんだ？」

「まあいい。実はね、今回の学園祭において召喚大会をやることは知ってるかい？」

雄二の罵倒に呆れながらも、学園長はそう聞いてくる。

「はい、知ってます」

「知ってるなら話が早い。仕事の内容はその大会で優勝し、そして優勝賞品を回収してもらいたいのださ」

「回収、ですか……？なんでまた」

優勝賞品を回収するなんて、何かあったんだろうか？

「今回、召喚大会の優勝賞品は三つあったな？確か、『アースラ』のやつ等が持つてるフィールド展開型の腕輪、通称『さらはがね綺羅鋼の腕輪』。そののいわば劣化版の『白金の腕輪』」

『アースラ』。生徒会における、俗言う『不良』や『問題児』を召喚獣で取り押さえたりする生徒会武力執行部のいわばあだ名。うん、僕等も去年は結構お世話になったよ。ホント色々な意味で。

「そして、召喚獣の能力にブーストを掛ける新システム。確か……『カートリッジシステム』だったか？そして今度プレオープンする『如月ハイランド』のプレオープンチケット。この三つだったよな？」

「そうさね。そして、回収して欲しいのは如月ハイランドのプレオ  
ーブンチケットなのさ」

「チケットを？　なんでですか？」

他の二つならシステムの問題とかいろいろ分かる気がするけど、  
なんでまた一番無害そうなものを回収？

「そのチケットなんだけどね。どうもパークの方が来た生徒を結婚  
までパーク総出でコーディネートするらしいのさ」

「な、なんだとっ！？　おいババア！　その賞品のことはもう他の  
生徒は知ってるのか？！」

なぜか雄二が学園長に詰め寄る。どうしたんだろう、一体？

「知ってなきや、回収だなんて頼みゃしないよ」

「くそっ……まずい、まずいぞ……。アイツのことだから絶対出場  
して優勝を狙ってくる……。行けば結婚、行かなかったら約束を破  
ったから結婚……。俺の、将来は……！！」

どうしたんだろうか？　まさか、霧島さんとなにか墓穴を掘るよう  
な約束でもしたのだろうか？

「明久！出るぞっ！そして何が何でも優勝するんだっ！」

「え、うん。まあ別にいいけど……」

「じゃあ、それいいんだね？」

「ハア……ハア……。その前にババア。一つ確認したいことがある。その大会、一回戦は数学、二回戦は英語といった具合になるようだが。その教科指定、俺にやらせてくれないか？」

「……まあ良いだろう。点数の水増しだったら一蹴してたけどね」

「よし、交渉成立だな」

そう言って雄二はニツと笑う。

「その代わり、勝てるんだろうね？」

「ああ、任せておけ！」

## 店と名前と準備の日々

バカテスト 超特別問題

貴方の前には明久の女装の写真のデータチップが置いてあります。  
貴方はそのデータチップをどうしますか？

姫路瑞希の答え

『とりあえずスキャナーを買いたいと思います。え？ だってそうしないと明久君の魅力をWeb配信できないじゃないですか？』

教師のコメント

とりあえずその前に吉井君に許可を貰いましょう。

フェイト・T・ハラオウンの答え

『とりあえずパステースに入れるのは当然だね。後はもちろんスキャナーを買ってWeb配信しなきゃ』

教師のコメント

とりあえず吉井君の人権は守ってあげましょう。



島田美波の答え

『べ、別にどうしようってわけじゃないんだからね!』

教師のコメント

とりあえず素直になってみてはいかがでしょう？

高町なのはの答え

『とりあえずアルバムにでも挟もうかな?』

教師のコメント

とりあえずマトモな答えでホッとしました。

~~~~~

「え? アキ君も召喚大会に出るの?」

「うん。まあ、いろいろあつてねえ……」

カウンターを拭きながら僕は苦笑しながらなのはに今日あったことを伝えていた。

夕方の翠屋。今日はバイトの日だから僕は翠屋の黒いエプロンを付けて接客をしていた。まあ、もう終わったようなものなんだけどもね。

「じゃあ、うちのクラスからは瑞希ちゃんと島田さんにアキ君と坂本君が出るんだね？」

「まあ、そうなるかな」

今回の召喚大会で瑞希ちゃんの転校の事に関して、原因である成績と設備に関してはこれである程度はできることはしたことになる。設備は喫茶店の売り上げで設備を買うことは許可された。そしてクラスの成績は、なのはと瑞希ちゃんが説得して召喚大会でFクラスが優勝することになったとか大目に見てもらえることになったらしい。

「これで後は当日までにやれることをやるだけだよ」

「そうだね」

「ところでアキ君。一つ聞きたいんだけど」

「なに？」

なんだろうか？

「もしアキ君が優勝したらさ、如月ハイランドのチケットはどうするの？」

「……………え？」

「でも、チケットってペアだね？　となると、瑞希ちゃんとフェイトちゃんのどっちを誘うの？」

「えー、あーその……………」

まずい、その辺のことを考えてなかった。

「ひょっとして、考えてなかった？」

「……………少し」

「もう、ちゃんと考えなきゃダメだよ？」

「うん……………」

どうしよう。瑞希ちゃん、フェイト……………どっちを選んでいいのやら…………

準備、メニューの謎なの！

『これはどこに持ってけばいいんだ？』

『おい、これは剥がして良いのか？』

『この机はどこにやればいいんだー？』

放課後の音楽室。私達は用意したテーブルなどを運び出すために音楽室にある物をどかさ作業をしていました。

「それにしても、随分と集まったな」

隣にいる坂本君が音楽室に運び出されてくるテーブルを見ながらそう呟きます。

「みんなに協力呼びかけたし、翠屋^{ウチ}にあった奴もいくつか持ってきたからね。これで教室にテーブルに椅子の問題はクリアー。後は接客と味の問題だね」

「ま、その味の方も何とかなりそうだな」

確かに。今回私が厨房班のみんなに教えたからかなりのレベルになってる。そうなる問題は接客の方かな？

「……高町（とんとん）」

「ん、なに？ ムツツリーニ君？」

「……試食用」

そう言ってムッツリーニ君は手に持っているいくつかのちょっとした料理が乗ったトレーを差し出してきた。

「へえ、見栄えもなかなかになったね」

そう言って私はトレーに乗った料理の一つを取って口に運ぶ。…
…うん、これは————

「味も大丈夫そうだね」

「……完璧」

「となると、後は接客だけになるな。……あ、後一つあった」

「え？」

「空調の問題だ。店の客が入るところはともかく準備室、調理場の空調の問題がある。窓を開けて、扇風機を全開にしても限度があるからな……。こりゃ、根性を見せなきゃならなくなる」

確かに。厨房代わりの準備室は、窓は小さいのが一つしかない。そうなるのかなり暑さで大変かもしれない。

「厨房側はローテーションを組んだ方が良さかもしれへんね？」

「……うん、そうだねって、はやてちゃん!? 何でここにいるの!?!」

私は突然現れたはやてちゃんにただ驚きます。さっきまで気配なかったよね？

「そこは気にしたらいかんよ」

「まあ、八神の案もあるな。下手にムリしてぶっ倒れちまうよかいだろう」

「ま、まあそうだね」

実際はやてちゃんの言うことも一理あります。

「ところで、はやてちゃんは何でここに？」

「ん？ ああ、まあなんちゅうか……あえて言うなら敵情視察ってところかね？ まあ、そんな気はそんな無いけど」

そう言っではやてちゃんは屈託の無い笑顔を見せられました。

~~~~~

明久SIDE

「ふう、これで大丈夫っと……」

荷物の運び出しが一段落して、僕は教室を見る。片付けと運び出しが終わった店内は、少しだけ『お店』という雰囲気を与え始めていた。

「吉井。こっちはあらかた終わったぜ？」

と、片付けと運び出しをやっていた須川君がこっちにやってくる。

「それはそうと、吉井。ちょっと聞きたいことがあるんだが……」

「なに？」

「いや、メニューのことなんだけどよ。メニューの隅に載ってるこの『ナマチュー』と『ゆばむ』ってなんだ？」

……………え？

「ナマチューってのはまさかビールのことじゃねえだろうし、ゆばむってのはあれか？ 『湯葉』をつかった何かか？」

ちよ、ちよっと待ってよ……………

「……なんでその二つが」

「吉井？」

「あ、ごめん……。えーと、その……。まず『ナマチュー』っていうのは別にビールのことじゃなくて、えっと、『なまこ』を使った料理なんだよ」

「は？ なまこ……………」

須川君の目が点になる。まあ、当然だろう。なまこは食用できるとていうのはそれなりに知れ渡ったことだけど、少なくとも喫茶店とかで使うことは早々——いや、絶対無いことだから。

「あ、別に不味いとかじゃないんだよ？ ただ、珍味過ぎるし、なにより喫茶店で出すものじゃないからってことだからっ」

「なぜだろうな？ その説明がただの建前にしか聞こえないんだが……」

「き、気のせいだよ！」

「そうか……。じゃあ、『ゆばむ』ってのは？」

「その、あ~~~~…ぴ、ピンク色してて……」

「ぴ、ピンク色！？」

「えと、たま〜にピクピク動いてて……」

「ピクピク動く！？ なんだそりゃっ!？」

説明をすればするほど須川君の表情が驚愕に満ち溢れていく。



「その…………調理にすぐてこずったりすることがあって…………  
…ごめんっ！これ以上の説明は僕はもう耐えられない！」

「おおいっ！ 待て吉井！ 一体何だってんだ！？ 何なんだよ、  
なんなんだよ『ゆばむ』って…………っ！!?」

そんな須川君の叫びが、『翠屋 文月学園出張店』に響き渡った  
のだった…………

## 開店と開戦と清涼祭開幕

『ピーンポーンパーンポーン♪ ただ今から、第〇〇回文月学園清涼祭を開催します』

そんな放送と共に、校舎のアチコチから拍手が聞こえてくる。いよいよ文化祭が始まるんだ。

「よし、それじゃあみんな。これからお客さんがいっぱい来ると思うから、準備の時のようにいこうね?」

『『『『Yes your majesty!』』』』

うーん、前も思ったけどなんて意味なんだろう?

「まあいいや。じゃあそれぞれ持ち場について」

そんな風に指示を出していく。今回は坂本君じゃなくて私が指示を出していかなきゃならないから責任重大なんだよね。

『いらっしやいませ、お二人ですか?』

『うん。そうだよ』

あ、早速来たみたいだね。

「いらっしやいませお客様……って、フェイトちゃんにはやてちゃん。どうしたの?」



そんなことを言ってくれた。おかげで男子の士気は鰻登りなの。

「つて、あれ？ フェイトちゃん？」

ふと見ると、フェイトちゃんの姿が無い。どこに行っただろう？

『明久……どうかな、私の格好……変じゃない？／／／／』

『う、うん。すごく似合ってるよ』

『本当！？ よかったー、似合っていないって言われたらどうしようかと思ったんだ』

『いや、フェイトにはなんでも似合うと思うよ？』

『そ、そうかな？ でも、明久もかっこいいよ？』

『あ、ありがとう……／／／』

『でも、フェイトちゃんのメイド服、うらやましいです。スタイルも良いですし。わたし、最近お腹の辺りが気になってきて……』

『そんなこと無いよ、瑞希にだって似合うよ。うちのクラスに来たら貸してあげよっか？』

『ホントですか？ 嬉しいですっ』

三人で仲良く話してました。本当に仲いいなあ。

『あ、ピアノがある』

と、フェイトちゃんは部屋の隅においてあるグランドピアノを見つめます。

「あはは、もともと音楽室だからね。少しくらい面影残そっかなと思っ」

「まあ、実際は重いしでかいから教室から出せなかったっていうのがホントなんだよね」

「アキ君。それ言っちゃダメだって」

何気ない暴露話に思わず突っ込んでしまいます。

「あ、このピアノ、シュタイナーだ」

「シュタイナー？　なにそれ？」

聞き覚えの無い言葉にアキ君が聞き返します。当然私も知りません。

「あ、ごめん。このピアノはね？　ドイツにある『シュタイナー＆フォonz社』の高級品なんだ。確か、お金で換算すると……〇〇〇〇円だったかな？」

「……〇〇〇円って……。翠屋を十回改装してもお釣りが来るよ……」

…」

「もともと、文月学園っていういろんな所からのスポンサー料で成り立ってるじゃない？だから、このシュタイナーのそれ関係だと思うよ？」

うーん……そう考えると結構この学園黒いところあるなあ。

「ねえ、ちょっと弾かせてくれない？」

「え、フェイトちゃんピアノ弾けるの？」

「うん。中の人繋がりだね」

「ほえ？ 中の人？」

「なんでもないよ。忘れて？」

そう言ってフェイトちゃんはピアノを弾き始めます。

~~~~~♪

「綺麗な音……」

「フェイト、それなんて曲なの？」

「これはね、ベートーヴェンピアノソナタ第八番『悲愴』って曲だよ」

そう言ってこっちを見ながらフェイトちゃんは答えます。って、弾き語りって何気に高度な技術を見せるね。

やがて弾き終わると、アチコチから拍手が起きます。本当に綺麗な曲だったなあ。

『明久、そろそろ時間だぞ』

『え？ あ、もうそんな時間？』

ん？

「アキ君、どうしたの？」

「あ、うん。そろそろ召喚大会の時間だからさ」

「あ、そうだね。じゃあ、行って良いよ。その代わり、急いで戻ってきてね？ もしかしたらさっきのフェイトちゃんのピアノが呼び水になるかもしれないんだから」

「わかった。じゃあ、行ってくるよ」

そう言ってアキ君と坂本君は教室を出て行きます。頑張って、二人とも。

『それにしても、音楽室を喫茶店にしたりシユタイナーのピアノと
いい、テストロッサの中の人繋がりとかメニューのこととか、何気
に今回の文化祭『アフターレイン』ネタが多いな』

『??? 雄二、何のこと?』

『いや、なんでもねえ』

営業妨害 ゆばむ、登場なの！（前書き）

今回はいろいろと原作ブレイクが起きます。

営業妨害 ゆばむ、登場なの！

「ありがとうございます、またどうぞ！」

二人組みのお客さんにお辞儀をする。

開店からもうすぐ一時間になるけど、予想以上にお客さんが増えてきた。これなら今回はかなりの額が期待できるかもしれない。そんなことを思っていると、また新しいお客さんが来た。

「あ、いらっしやいませ」

「二人だ。中央は空いてるか？」

「はい。空いてますよ？ では、ご案内します」

そう言って要望どおりに空いてる中央の席に連れて行く。それにしても、何で中央なんだろう？

「こちらをどうぞ」

「おう」

そう言って席に座る坊主頭の人とソフトモヒカンの人。見たこと無い顔だけど、文月学園の制服を着てる。ひょっとして、三年生？

「メニューをどうぞ。お決まりになりましたら御呼びください」

そう言ってお辞儀をして離れる。さて……

「秀吉ちゃん。ちょっと離れるね？」

「む？ あいわかったのじゃ」

そう言って私はちよつとトイレに向かう。結構我慢してたんだよね……。

~~~~~

「さてと、またがんばろ」

すっきりして、再びお店に戻ろうとしたときでした。

「む。高町、いい所に」

「どうしたの、秀吉ちゃん？」

「すまぬが少々来てもらえんかの？ 実は————」

秀吉ちゃんの言葉を聞く。え……？

「営業……妨害？」

「うむ。先ほどの。といつても有ること無いことすきかって言っておるだけじゃがの」

「そっか……。とりあえず秀吉ちゃん。坂本君を呼んできてくれるかな？」

「了解じゃ」

そう言って秀吉ちゃんは坂本君がいる所——多分召喚大会の会場——に向かって行きます。

さて、今度はこっちだね。

私は意を決してお店に入る。すると、秀吉ちゃんの言う営業妨害をするお客さんはすぐに見つかった。そのお客さんは、私が案内したあのお客だった。

『たくっ！　なんてマジなんだ！』

『全くだ！　こんな人が食うもんじゃねえぜっ！』

聞こえてくるのはそんな声。不味いというけど、それだけは絶対無い。それだけは何があっても。だってみんなでしっかりと作ったものだから。そう考えると、秀吉ちゃんの言ってた『有ること無いこと』っていうのはその通りかもしれない。

……………よし。

「お客様、何かご不満な点でもございましたか？」

「不満も何も、こんなマジいもんを人様に食わせやがって！　何を



「はい。お二人にはVIP席でいただいていたかどうかと」

「そ、そうか。分かってるじゃねえか」

そう言う二人を私はお店からは見えない、厨房が見える席に連れて行く。ここなら他の一般客も見えない。

「おいおい、ここがVIP席か？」

「はい。料理において、一番のVIP席は料理をするところを時価に見れる場所といわれております」

「へえ……」

そう説明しながら、二人を席に座らせる。フッフ、もう逃げられないよ？

「では、少々お待ちください」

そう言って、私は厨房へと向かう。さあ、めしあがれ麻死亜蛾霊？

明久SIDE

「で、その営業妨害を何とかして欲しい、と」

一回戦を勝ち抜いた僕等は、秀吉の報告を受けて急いでお店に戻っていた。それにしても営業妨害なんて……。なんでまたそんなことを……。それも、生徒で一番の見本にならなきゃいけない三年生が。

「ま、とにかくそいつ等に会ってからだな」

雄二の言葉には事実賛成だ。他のクラスにとってはただの文化祭の出し物かもしれないけど、僕達にとっては絶対成功させなきゃいけない物なんだ。

ガラリ

戸を開け、その営業妨害をしているお客を探す。けど……

「ねえ秀吉。どこにいるの？ そのお客」

「むう？ おかしいのう。確かに店の中央の席に座っておったのじゃが」

そう言われてお店の中央の席を見るけど、そんなお客はどこにもいない。

「秀吉を疑うわけじゃねえが、ホントにいたのか？ その営業妨害してた奴」

「ホントにいたのじゃが……。おかしいのう……」

そんな秀吉の言葉を聞く限り、見間違いとかではなさそうだけど……。………まてよ？

「まさか……」

一つの予想を思い浮かべ、僕は厨房に向かう。そこには――――

『』……………『』

そこには、サスペンス劇場に友情出演ができそうな状態の男が二人いた。そして、二人の前にはピクピクと蠢き、お皿をシューシューと音をだして融かす――――ピンク色の物体、ゆばむがあった。

「あ、アキ君に坂本君」

そこにいるのは僕の十年以上の付き合いである幼馴染がいる。僕等に向けるその笑顔は、何故だかかなりの怖さがあった。

「あの、なのは。これって……」

「うん。あ、でも安心して？それなりに抑えたから」

何を抑えたのかはあえて聞かないでおいたほうが良いだろう。

「な、なんじゃこりゃ……料理？」

「……一応撮っておいた」



驚愕し続ける雄二に、どこからか現れたムツツリーニがデジカメを見せる。そこに映っていたのは、『お覚悟、よろしいですね?』といわんばかりのなのはの笑顔があった。

「とりあえず聞くが、高町。……殺してないよな?」

「死んでないよ? ……多分」

多分なんだ……。

そんなことを考えていると、倒れている二人、ソフトモヒカンと坊主が呻き声をあげる。良かった。どうやら生きてるみたいだ。

「あの、大丈夫ですか?」

とりあえず声を掛けてみることにする。一応、命に別状は無いはずだけど……

「「き……」」

「き?」

「「木原マサキの亡霊があああーーーーーっっっ!!!」」

どうやら二人は冥界にでも旅立ってたようだ。

「おい、とりあえずいきなりだが。なんで営業妨害なんてした? 理由を言え」

そんな二人に雄二が問い詰める。そうだ、なんでそんなことをしたのか聞かないと。

「「あ、あああああああああああ  
 ー！ー！ー！地dwb背垂bf cヴえcbはbcdzbbwbvd  
 kあj l S H cばh d c b w ー！ー！ー！ー！ー！ー！  
 ！！！！！！」」

そんな二人は、雄二を見るとまるで化け物にでもあったかのように、残像を出さんばかりの速度で逃げ出した。って、速っ!?

「あ！ あいつ等！」

「雄二、追わなくて良いよ。というか追っても意味無いよ」

そんな二人を追いかけてようとする雄二を僕は止める。

「なんでだよ？」

「いやだって……当分、下手すると明日辺りまであの二人頭がパーになってるから。とても事情を聞くなんて無理だと思うんだ」

「.....  
は？」

そのときの雄二の顔は、とても印象的だったと言っておきたい。

## 再会と意外と同じ匂い（前書き）

リリカル側から二人キャラが出てきます。

## 再会と意外と同じ匂い

「え？ フェイトちゃんとはやてちゃん、不戦勝だったの？」

それはお昼のピークがそれなりに過ぎ、私達のお店もそれなりに落ち着きが戻った頃、フェイトちゃんとはやてちゃんが今度はお客さんとしてやってきたときに知ったことだった。

「うん。どういうわけか対戦相手が来なくてね」

「せやね。まあ、ラッキーとは思うけどね」

注文のコーヒーと紅茶を飲みながらそう二人は答えます。

この二人の召喚大会の出場。それは瑞希ちゃんの転校話の最中に伝えられたことでした。なんでも、この話が出る前日に既にエントリーがされてしまっていて、さらに取り消しができなかった。それを聞いたときはどうしよう？ と思っただけ、こうして違うブロックになったことで、フェイトちゃんたちが決勝に進出できたらキリを見てワザと負けるといふ作戦が立案されたのです。だから、たとえ敵とはいえ、こうして勝つということは素直に嬉しくあります。

「ねえねえ、なのは。ところで明久は？」

と、フェイトちゃんがアキ君を求めて居場所を聞いてきます。なんというか、ホントに……

「フェイトちゃん、少し落ち着き。会いたいののは分かるけどね」

そう言ってフェイトちゃんを宥めるはやてちゃんは何故か――  
――ボケとツツコミを心情としたお嬢様、愛沢○夜の格好でした。

「今度は声優ネタなんだね？」

「何の話や？」

「ううん、なんでも。とりあえずフェイトちゃん。アキ君はもうすぐ二回戦が終わるからもうちょっと『ただいま』あ、戻ってきた」  
噂をすれば何とやらだね。

「あれ、フェイトに八神さん。来てたんだ」

「お邪魔してるで、アキ君」

「うん、明久に会いたくて……あ！ 瑞希ずるい！」

そう言ってフェイトちゃんは席から立ち上がります。よくよく見れば、アキ君は瑞希ちゃんと一緒に帰ってきたみたいです。

「そ、そんなフェイトちゃん！ 明久君とはさっきそこで一緒になっただけで……」

「うう……ぐすん」

「そ、それはそうとアキ君。坂本君はどうしたん？ 奥さんのところにでも行ってるんか？」

「奥さんって……。いや、ただ単にトイレだよ」

「なんや、てっきり奥さんとイチャイチャラブラブ、ギシギシアンアンしてて今頃“霧島雄二”になっとるのかと思つとったのに」

はやてちゃん。それはいくらなんでも早すぎない？ いやまあ、霧島さんならそれぐらいやりそうにはなんだか見えるけど……

『すみません、お兄さん』

『ありがとうございます。お兄さん』

『いや、気にすんなちびっ子ども。ちょうど俺も戻らなきゃならんところだったしな』

あ、そうこうしてる内に坂本君が帰ってきたみたい。

『んで、お前等が探しているのはどんな奴だ？』

ガラツと音を立てて教室の扉開き、坂本君の姿が見えた。誰かと話してる風だったけど、相手は小柄なのか、坂本君が影になって見えない。

『お、坂本。妹と弟か？』

『可愛い子だな。ねえ、五年後にお兄さんと付き合わない？』

『俺は今だからこそ付き合いたいなあ』

近場にいた何人かの男子が坂本君を囲む。まあ、それなりにお客

も少なくなったせいで暇なんだろうな。

『あ、あの。葉月はお兄ちゃんを探してるんですっ』

『お兄ちゃん？ 名前はなんていうんだ？』

『えっと、それが分からなくて……』

『？ 家族の兄じゃないのか？ それなら、何か特徴は？』

『えっと……バカなお兄ちゃんでした』

なんてすごい特徴なんだろう。

『そうか……沢山いるんだが？』

否定できないね。

『あの、そうじゃなくて、その……』

『うん？ 他に何か特徴があるのか？』

『その……すっごくバカなお兄ちゃんだったんです！』

『『吉井だな』』

アキ君。泣いちゃダメだよ？

「失礼な！ 僕に小さい子の知り合いなんて……！」

「あ、バカなおにいちゃんだ！」

「ちょ、葉月！ そんなこと言ったら失礼だよ！」

「そうだよ、葉月ちゃん」

そう言ってツインテールの女の子を宥めるのは坂本君のように赤い髪をした男の子と、瑞希ちゃんのようなピンク色の、ショートヘアの女の子でした。

「すみません！ それと、あの……以前はお世話になりました。その、覚えてますか？ 僕等のこと」

「おいおい、少年。覚えてるわけがないだろう？ バカなお兄ちゃんが」

「失礼な！ 覚えてるよえーと、君は……………そう！ エイリオ君だ！」

「すみません。エイリオじゃなくてエリオです……」

「呆れるくらいの間を作つといて間違えるとは。流石はバカなお兄ちゃんだな」

坂本君……。覚悟、できてる？

「というか、なんでここに？ それにしても、よくわかったね？」

「はい、それは『私が招待したんだ』で、フェイトさん！？」



「来たみたいだね。エリオ、キャロ」

「フェイトちゃん、二人のこと知ってるの？」

「うん。二人とも、私と同じマンションに住んでるから。その縁でね」

そっか。そういえばフェイトちゃん子供が大好きだもんね。

~~~~~

明久SIDE

意外な再会に驚いていると、フロアから島田さんがやって来た。

「あら？ 葉月、来たのね？」

「？ 島田さん。葉月ちゃんのこと知ってるの？」

「知ってるも何も、ウチの妹だもの」

「ええ？」

またまた意外な事実が発覚。

「それにしても……」

なんとなくエリオ君を見る。

「エリオ君。今度はどこ行くの？」

「エリオ君。葉月、行きたいところがあって……」

なんだろう。エリオ君から、その……僕と同じにおいがする。

「エリオ君」

「はい。なんですか？」

「悩みがあったら言っただけ？」

「え？ あ、はい。わかりました」

お昼、実印と敵情視察なの！

2年Aクラス 『メイド喫茶 ご主人様とお呼び！』

そんな風に書かれた看板がAクラスの前に置かれてました。

「綺麗な服だね」

近くのメイドさんを見て、私は思わずそう呟いてしまいます。

「そうですね。一度着てみたいです」

隣の瑞希ちゃんもどうやらそのようで、賛同してくれます。

「ねえ雄二。いい加減覚悟を決めなよ」

「そうよ坂本。逃げるなんて男らしくないわよ？」

「いや、分かってはいるんだが……」

後ろでは、坂本君を説得してるアキ君と島田さんがいました。まあ、このAクラスには坂本君の彼女さんである霧島さんがいるんですからね。前に、映画館であったことをアキ君から聞いたことがあるので少しだけ同情してしまいます。

「雄二。確かに僕等はお昼を食べに来たけど、これは偵察でもあるんだ。相手のことを知るのも大切だよ」

「……………！！（パシャパシャパシャッ！）」

そんな坂本君を説得する隣で、いろんな角度からメイドさんを、指が擦り切れんばかりにシャッターを押すムツリーニ君がいました。

「……ムツリーニ？」

「……人違い（ブンブン）」

「どう見ても土屋でしょうが。いったいここで何をしてるのよ？」

「……敵情視察」

最近の敵情視察は女の子を撮ることを言うようです。

「全く。ムツリーニ。そんなことしたら女の子がかわいそうだと

—————」

「テストロッサの。一枚三百円」

「2ダース貰おう。—————思わないのかい？」

「アキ君……。普通に注文してるよ？」

アキ君ってば……

「……そろそろ交代だから戻る」

そう言っアキ君に写真を渡してムツリーニ君は戻っていきました。

「さて、そろそろ入ろうか？」

「明久君。その写真、どうするんですか？」

「え？ や、ヤダなあ。もちろん処分するに決まって—————男の足ばかりじゃないか！ 畜生！！」

「やっぱり見るんじゃないですか！ それに明久君がよければ私も

フェイトちゃんも足なんかいくらでも見せますし、それ以上の物だ
って……その……／＼／＼／＼

「……ごめん。瑞希ちゃん。僕が悪かったです」

そんな風に微妙な空気になってます。

「それより、早く入らんかの？」

そんな一部始終を見ていた木下君が呆れ顔で言ってきます。確かに
そうですね。

「じゃあ、入ろうか」

私がそう言って、皆を引き連れて今やメイド喫茶となったAクラ
スに入ります。

「……お帰りなさいませ。ご主人様にお嬢様」

「お帰りなさいませ。ご主人様にお嬢様」

そう言って出迎えてくれたのは、霧島さんにフェイトちゃん。ど
っちも似合ってるなあ、メイド服。

「綺麗です、フェイトちゃん……。私も負けられません！」

「ホントに綺麗ね。うらやましいわ……」

「お姉さん達、キレイ」

「ホントに綺麗です」

「綺麗ですよ、フェイトさん」

「「……………」」

「いだだだっ！ は、葉月！ キャロ！ 痛い！ 痛いってば！
！」

「うむ。それにしても服だけじゃなく周りの調度品も見事じゃのう」
「……お帰りなさいませ、ご主じ……お嬢様？」

「き、霧島よ！　ワシは男なのじゃ！　じゃからご主人様であつと
るぞい！？」

皆が入っていきます。

「……ケッ！」

「わあ、やっぱうちとは違っていろんなものが豪華だ」

「……お帰りなさいませ。今夜は帰らせません、ダーリン」

「お帰りなさいませ。今夜は朝まで眠らせません、ダーリン」

少しアレンジされました。

「では、メニューをどうぞ」

そう言つてフェイトちゃんはメニューを手渡してくる。このメニューも綺麗だな。さすがAクラスとでも言うのかな？

「ウチは『ふわふわシフォンケーキ』で」

「あ、私もです」

「葉月もーっ」

「じゃあ、私もそれにします」

「では、ワシはサンドイッチに紅茶とするかの」

「僕は『さくさくりんごパイ』にします」

「わたしは『春の果物ムース』にしようかな」

「「じゃあ、僕（俺）は————」「ご注文を繰り返します」」

まるでアキ君と坂本君の注文を遮るようなフェイトちゃんの声。

「『ふわふわシフォンケーキ』が四つ。『サンドイッチ』が一つ。『紅茶』が一つ。『さくさくりんごパイ』が一つ。『春の果物ムース』が一つ。……『メイドとの婚姻届』が二つで宜しいでしょうか？」

「「「ぜんぜんよろしくないんだけど（だが）（ですけど）！？」」」

ただただアキ君と瑞希ちゃんと坂本君は驚くしかありません。まあ、気持ちは分かりますけど。

「……では、食器をご用意いたします」

そう言って霧島さんが食器を持ってくる。瑞希ちゃん、島田さん、葉月ちゃん、キャロ、エリオ君のところにはフォークが。私のところにはスプーンが、アキ君と坂本君のところには朱肉と印鑑が置かれました。

「しょ、翔子！？ これ本当にうちの実印だぞ！？ どうやって手に入れたんだ？！」

「明久君のやつはどうですか！？」

「い、いや。僕の奴はうちのじゃないよ。多分、判子屋さんで買った奴じゃないかな？」

「でも、押しちゃえば実印も何もないよね？」

「フェイト！ そう言う意味じゃないんだ！」

「そうです！ こういったお店でするのではなくてですね……／＼／＼

「瑞希ちゃん！ 違うからね！？ それも違うからね！？」

周りの目も気にせず叫ぶアキ君。この状態は後十分ほど続きました。

コスプレとメイド服とアキちゃん爆誕

お昼ご飯を終えて、僕等は今度はBクラスにやって来た。ちなみに、なのはとムッツリーニは店に戻っている。まあ、確かにあの二人がそう長く抜けるわけにはいかないしなあ……。

あ、ちなみにエリオ君は葉月ちゃんとキャロちゃんに連れられてどこかに行ってしまった。エリオ君。強く生きるんだ……！

なんてこと考えてる内に、Bクラスに辿り着く。………辿り着いたんだけど………

『コスプレ撮影所 2-B』

看板にそう書かれてる。というより、『撮影所』の文字は後から付け足したような感じだ。

「（ひょっとして、撮影所の張り紙の下って『喫茶』って書いてある？）」「

僕は思わずそう考えてしまう。というか、八神さんはコスプレ喫茶だって言ってたはずだけど、どういうことなんだろうか？

「ふむ。なにやらすごい人じやのう」

「ああ。それにしても、八神の奴、喫茶店をやってるんじゃないかったのか？」

「あの、コスプレって……」

どうやら雄二も同じことを思ったらしく、そんなことを言ってる。瑞希ちゃん分からないのはまあ、無理はない。だって縁無さそうだし。ここは百聞は一見にしかずってことで、実際見てもらおう。

「まあ、とりあえず入ってみようよ」

「そうじゃの、ここでじっとしてても埒が明かぬしの」

「ま、そうだな」

意を決し、僕等はBクラスの扉を開ける。そこには……

『抱きしめてえ！ 銀河の、果てまでえーッ！』

ズコオッ！！

開いた途端聞こえた台詞に、僕らはそろいもそろってずっとこける。い、一体なんだというんだ！？

「よおこそ。Bクラスコスプレ撮影所にな。アキ君」

声が聞こえた方を向くと、そこには騎士服と杖を持った八神さんがいた。

「八神さんのそれって、コスプレって言うのかな？」

「何のことや？」

「いや、こっちのこと」

僕は「ああ、突っ込むべきじゃないんだね」と悟り、それ以上は

何も言わないことにした。

「それにしても八神さん。コスプレ喫茶だって言ってたはずだけど、これって……？」

「ん？ ああ、いやね？ コスプレしながら喫茶店やるより、コスプレ料金と撮影料金をとった方が儲かるってわかったんや」

あっさりと理由を言う八神さんに、僕は呆れ半分関心半分な気分になる。なんというか、よくやるよ……。

「……………（パシャパシャパシャッ！）」

見覚えの有る奴がいた。

「……………ムツツリーニ？」

「他人の空似^{ブンブン}」

「いや、ムツツリーニじゃろう？」

「……………（ブンブン）」

まだシラを切るか……

「じゃあ聞くけど、君の名前は？」

「土屋康……………夜」

OK。その場で咄嗟に考えたことは良く分かった。

「まったく。ムツツリーニでしょう？ 嘘言わなくても分かっているから。何してるのさ、こんなところで？」

「……………敵情視察」

その割には女子ばかり撮ってた気がするんだけど……。

「それはそうと、そろそろ戻らないと不味いよ？　なのはって料理関係になるといろいろとうるさいから、こんなところで油を売ってたら……」

《青い鳥が逃げ出したよ／＼空の籠を抱いて泣いた／＼》

噂をすれば、か……。

「＜ピッ＞　もしもし？」

『アキ君。そこにムッツリーニ君いる？』

案の定か……。

「いる、けど……」

『そっか、じゃあ、ハヤクカエラセテネ？』

「Yes you, r m a j e s t y」

そう言っ僕は携帯を切る。これは……ダメか……？

「ムッツリーニ……早く戻らないと……不味いよ？　その、物理的に……」

「……すぐに戻る……！」

そう言っムッツリーニは慌てて店に戻る。店にクレーターができなきや良いけど……。

「アゝキ君。こっち見てみ？」
「????」

八神さんの声に、反射的に振り向くと――――

「あ、あの……。どうですか？ 明久君……」

そこには、何故か白と赤基調の制服、そして黒タイツをして大きな丸眼鏡をした瑞希ちゃんがいた。

「えっと、コスプレ？」

「は、はい。八神さんがやってみたらと……」

ふむ。なんというか、なぜだかしらないけど、やたらはまってる様な気がする。なんというか、見た目が。

「いやゝ、似合うはずと思ったけど、ほんまに似合うなゝ」

「その、似合いますか、明久君……」

「え、ああうん。似合うよ、すごく」

「ホントですか？ 嬉しいです……」

実際良く似合うよ。というより、よく似てるって言った方が良くんだろうか？

「で？ 八神よ。なぜワシまでこのような格好をせねばならんのだや？」

そこには、瑞希ちゃんと同じ制服を着て、紫のツインテールのウィッグ（カツラ）を被った秀吉と……

「正に美女と野獣だね、八神さん」

「まったくやね」

「あはは……」

秀吉と一緒にいたのはどういう経緯か、ゴリラのぬいぐるみを着た雄二がいた。こっちもいろんな意味で似合ってる。というか……

「雄二はそんなもの着なくても充分じゃないか」

「おいコラ、テメエ。そりゃどういう意味だ？」

そのままの意味だよ？

「さ・て・と。それじゃあ、アキ君？」

「ん、なに？ 八神さん」

「こんどはアキ君の番やで？」

そうきたか……。

「ま、まあ。僕は別に秀吉みたいに女の子じゃないから女物を着るわけじゃないんだし……」

「何を言っとるんや？ アキ君。アキ君もや」

へ……………？

「いや、あの。八神さん？ その、冗談だよな？」

「私は冗談言わへんよ。……………こういう面白いことに関しては特に」

「じゃ、じゃあ僕はこの辺で（ガシッ）な、何なのさ君たち！？ ちょ、八神さん！ なにそんな「これから面白いことが始まるで」みたいな顔してるの！？ ねえ、だからちよっと待っ……………！！」

僕のことを無視し、「いらっしゃーい」と言われ、『着替え室』
と言う名の扉は開かれ……

『キヤアアアアー………ツツ!!』

僕の悲鳴は学園中に響き渡った……。

「うっ、うう……僕、もうお嫁にいけない……」

「行けるもんなら行ってみろよ。まあ、今の格好なら可能かもしれないけどな、アキちゃん？」

「はうう、可愛いですう／＼／＼」

「むう、なんともな……」

「み、見るなあああー………!!」

同時刻。Aクラス『メイド喫茶　ご主人様とお呼び！』

「じゃあ、私これから休憩はいるね？」

「ええ、ハラオウンさん。これからどこ行く？」

「うーん、そうだね。とりあえずいろいろと見て回ろ【てきいいん！………】」

「ハラオウンさん？」

「ごめんね？　私ちよつと用事を思い出したから」

「え？　あ、ちよつと！　ハラオウンさん！？」

ガラリッ！　タッタッタッ！

『いくよ、バルディッシュ！』

『Yes　sir　Stand　by　ready　set　up
！！』

カッ！

『ライトニング1、フェイト・T・ハラオウン。行きますっ！！』

ドビュンッ！！

『お、おわ！？　な、なんだ！？　今、何かがすげえ速さで通った
ような………』

『はあ？気のせいじゃねえの？』
『そ、そうか？』

コスプレとメイド服とアキちゃん爆誕（後書き）

はい！ と言うわけでみんなのヒロイン（？）アキちゃん爆誕です
！！

それは突然の出来事なの（前書き）

最近感想が少ないっす（涙）。読者のみんな！
オウに感想をあげてくれ！！

それは突然の出来事なの

さて、いろいろと傷を遺したコスプレ体験から二十分。もうすぐ三回戦が始まるため、僕と雄二は召喚大会の会場に来ていた。

「ところで雄二。今度の相手は誰？」

「ん？ ああ、Bクラスの野郎とCクラスの女だそうだ。ちなみに、科目は現代文」

現代文か。確か僕の現代文の点数は80とちょっとだったけかな？

「ちなみに雄二はどれくらい？」

「英語とあんま大差はねえな。100点台いつてるかいつてないからだ」

「そっか。これは気を引き締めないとね」

二回戦のときみたいに、相手の恥部（こうとしか表しようがない）を攻撃することができないから事実上真っ向勝負ってことになる。相手はBクラスとCクラス。頑張らないと。

「で、結局相手は来なかったの？」

「うん。まあ、不戦勝が決まって三十秒後くらいに着たんだけどね」

あの後、結局意気込み虚しく僕等是不戦勝だった。相手曰く、コスプレに夢中になってたんだとか。まあ、その証拠に男子の方は元歌舞伎の女形のパイロットの格好。女子のほうは某超時空シンデレラな格好だった。

ちなみに、普段だったら三十秒ぐらいならやってあげても良かったんだけど、僕等は絶対優勝しなくちゃいけないからここは心を鬼にして情けを掛けなかった。ちよつと悪い気がするけどね。

「というか、なんでア○トとラ○カ？」

「作者がア○ト×ラ○カ派なんだよ……。それはともかく、次の試合まで手伝うよ。結構お客さん増えてきたしね」

「うん。お願い」

『なのはさーん、ちよつと来てくださーいっ』

厨房から聞こえてきた声に、なのはは「はーい」と応えて奥に引っ込む。さて、僕も頑張らないと。試合をしなかった分。

『じゃあ、これはこのままで？』

『うん。ナマチューはこのままのほうが風味も良いから』

……………興味か知ってかは知らないけど、いたんだ。ナマチューを頼む人…………。

それから約一時間して、僕等は再び試合会場へと赴いた。えーと、
今度の相手は……

「み、瑞希ちゃんに島田さん!？」

トーナメント表を見て僕は驚く。しまった、あの二人も同じブル
ックだったんだっけ。

「ねえ雄二、何か対策は考えてるの？」

「ああ。今度の試合の科目、姫路と島田に渡したヤツには“数学”
とあるが、本当の科目は古典だ」

古典って、ああ。そういえば島田さんは古典とかは鬼門なんだよ
ね。帰国子女だから。なにせ点数なんか一桁の常連だし。

「じゃあ、要するに……」

「ああ、俺が姫路を抑えとくから、お前は島田を瞬殺しろ。その後
は姫路と二対一の状況を作る」

なるほどね……。しかし、男子が女子に向かって、“瞬殺”って
言葉を使うのってどうなんだろう？

「とりあえず。アイツ等、特に姫路には悪いがここで退場してもら
う。どっちにしろ俺達は優勝しなきゃなんねえ。高得点の姫路が優
勝するより、俺達が優勝した方が姫路の父親もより納得するだろう
しな」

「そうだね。それにしても……遅くない？ 二人とも」

さつきから気になってたことを思わず呟く。現に二人とも現れる
気配が全く無い。どうしたんだろうか？

「そーいやそーうだな。あの二人が遅刻するはずがねえし……」

雄二もハテ？とばかりに首を傾げてる。ホントにどうしたんだろう
う？

「おい明久。とりあえず姫路にでも電話掛けてみる」
「うん。そーうだね」

えーと、瑞希ちゃんの番号は……

p r r r …… p r r r ……

＜おかけになった電話は、現在電波の届かないところにあるか、電
源が切つてある為、かかりません＞

「……………!？」

え？　ちょ、どういうこと!？

「おい明久、どうしたんだ？」

「繋がらないんだよ！　瑞希ちゃんに！」
「はあ？　なら、高町は？」

p r r r …… p r r r ……

＜おかけになった電話は、現在電波の届かないところにあるか、電

源が切つてある為、かかりません＞

「なのはにも掛からない？」

「はあ？ 一体どうなってるんだ？」

一体どうなってるんだ！？

—————なんて思ったとき、

『えー試合開始時間になりましたか、2年Fクラスの姫路・島田ペアが来ないため、この勝負、2年Fクラス、吉井・坂本ペアの不戦勝と致します』

そんな放送が会場に響いた。

「おいおいマジかよ!？」

流石の雄二も驚愕を隠せないようだ。実際どうなってる—————

くあの更衣室に欲望前に飛んで行きたいよ欲望だらけ飽くなき劣情常識振り切って行きたい~~~~♪ ……撮っているのは、捕まる覚悟があるヤツだけだ＞

この着メロは、ムツツリーニ？ ちょうどいい、ムツツリーニに聞けば何か分かるかも。

「(ピッ) あ、ムツツリーニ？ ちよつと聞きたいこ『……緊急事態!』……ムツツリーニ?」

「おい、ムツツリーニ。どういふことか説明しろ」

さっき電話の声が聞こえたのか、雄二も聞いてくる。実際、どういふことなんだ？ 緊急事態って……？

『……高町なのは、姫路瑞希、島田美波、木下秀吉の四名が誘われた……！』

な……！？

「なんだって！？」

「……チツ、俺達には勝てねえし、店の評判も悪くならねえから行動を速めたか……」

雄二が何か呟いてるけど、どうしたんだろう？

「とりあえずムツツリーニ。高町達の居場所は分かってるのか？」

『……分かってる。全員のネームプレートの裏側に盗聴器を付けておいた』

「なんでそんなことしてるのさ……」

まあ、今回はそのおかげで助かったけど……

「ならムツツリーニ、俺達もすぐに戻る。明久、急ぐぞ」

「分かった！」

そう応え、僕等は急いで店に戻った。それにしても、何でこんなことになるんだろう？

僕はそんな疑問を脳裏に浮かんだ。けど、

「（なのは、みんな……！）」

それを振り切る。今はそんなことを考えてる事態じゃない。

それは突然の出来事なの（後書き）

ほんの少し原作ブレイクです。感想待ってます。

救出と捕縛と誘拐犯（前書き）

祝！ 感想百件突破！ これからも応援、感想よろしく願いします！

救出と捕縛と誘拐犯

学園の近くにある小さなカラオケボックス。僕達、雄二とムッツリーニはそこにやってきていた。ムッツリーニ曰く、ここになのはたちは連れてかれたらしい。

「ムッツリーニ。どの部屋分かる？」

「……あの隅っこの部屋」

「あの部屋だね？」

「……そう。あの部屋から……激しい水音と喘ぎ声、が……（ブシヤアアー……ッ！）」

違う。求めてる部屋はその部屋じゃない。

「アホ。聞いてるのは高町たちがいる部屋だ」

呆れ顔で聞きなおす雄二。それにしても、カラオケボックスなんて壁とかは完全な防音のはずなのに、どうやって聞いたんだろう？

「……あそこの部屋の向かいの部屋」

そう言っただけムッツリーニは今度こそなのはたちが連れてかれた部屋を指差す。そうか。あそこ、か……

「じゃあ雄二。早速乗り込もうよ！」

「さて明久。相手が何人いるかも分からないんだ。考えなしに突っ込んで行っても帰り討ちに遭うだけだ」

確かに。人数も分からないじゃ自殺行為だ。ここは慎重に作戦

を練らないと……

「……誰か来る」

そんなムツツリーニの言葉を聞いて、僕等は近くの部屋に隠れる。と、僕等がいたところを、一人の男が通り過ぎ、なのはたちがいる部屋に入っていた。

それを確認して、僕等はあの部屋の前に向かう。そしてドアに顔をつけ、聞き耳を立ててみると……

『あ、アニキ。おつかれっす』

『全く。突然連絡をよこしやがって。一体何だっただ？』

『へへへ。実は依頼をした後でしてね。ホラ、極上の上玉がこんなにいるっすよ』

『ホー。随分いるな』

『あ、あの！ 私達を帰してください！』

と、なのはの声が響く。

『うっせえんだよ。お前は後ろの女を含めてこれからアニキといういろとヤルんだよ！』

『まあ待て。……しっかし。これまた随分とレベルが高い女ばっかり………ん？』

『どうしたんですかい？ アニキ？』

なんだろう。様子がおかしい。

『茶色の髪、青い目、そして……サイドテール。ひょっとして、高町なのはか！？』

この人、なのは知ってる？

『え……？ はい。そうですけど……』

『……クックク……そうか、そうかよ……。ここであつたが百年目だ……！』

この人、なのは何か恨みでもあるのか！？ だとしたら、なのはが危ない！

『高町い！ なのはぁーっ！』

「なのは！」

たまらず僕は扉を開け、中に飛び出す。なのは、今助けて……

「サインくださいっ！……！」

「ほえ……？」

ずでででっ！

僕等はドリフもビックリとばかりにすっ転ぶ。 ちょ！？ どういうことだよ、それ！？

「えっと、あの……？」

「いやー、あの高町なのはさんとこんな形とはいえ会えるなんて、感激ですっ！」

「あの、手が縛られてるんですけど……」

「な、何ですってええええー！……！！！！！！？」

そう言ってダイナミックな、それこそマトリックス張りに胸を張るその男性。

「申し訳ありません！！　ただ今解きいたします！！」

そう言ってなのはの腕の縄を解き始める。いや、なんというか……

「あの、他の皆も……」

控えめなのはの声。

「！？！？！？！？！？　申し訳ありません！！　おいお前等！

今すぐなのはさんのご友人方の縄を解いて差し上げろ！！」

「え！？　い、いやアニキ、こいつ等は……　「死にてえかあっ！！

？」　へっ、へい！！」

そう言われてチンピラAを始めとするチンピラ達は慌てて瑞希ちゃんたちの縄を解き始める。

「あ、アキ君！」

「なのは。大丈夫？」

ようやくここに気がついたのか、なのはは僕を見つけて声を上げる。

「なんだ、てめえ？」

と、アニキと呼ばれてた男が僕のほうを睨む。まったく、なのはと比べるとえらい違いだ。

「あの、私の幼馴染です」

「え？　そうですか……」

「その前に。少し聞きたいことがある。お前……じゃ分からねえだろうから、おい、そのチンピラA」

と、雄二が近くにいたチンピラに声を掛ける。

「お前、もしくはお前等を雇ったのは誰だ？」

「し、知らね『ゴキンッ！』ギャアアーーーーッ！」

知らないと言いかけた瞬間。チンピラAの右腕が逆方向にひね曲がる。これは痛い。

「次は耳だ」

耳をどうする気なのか興味があるけど聞かない方が良さだろう。

「わ、分かった！　言う！　言うから耳をねじ切ろうとしないでくれっ！」

「分かればいいんだ」

なのはSIDE

「なるほどな。つまり、そのインテリ風の男がそう言った、と……」

坂本君はチンピラAさんに事情を聞くと、「ふむ」と考え始めた。
一体何を考えてるんだろう？

「あの、なのはさん」

「はい、なんですか？」

声のするほうを見ると、アニキさんがこっちを見ていた。どうしたんだろう？

「あの、先ほども申しましたが、その……サインのほう、よろしいでしょうか？」

「え？ あ、はい。いいですよ？」

特に断る理由もないので、渡されたサインペンと色紙————
——どこに持ってたんだろう？————を使ってサインを書き始める。

「あ、サインには“でらあずふりいとの穴鈴雅続くんへ”って書いていただけるとうれしいです」

「うん、構わないよ？」

サラサラと書いて、渡してあげる。

「あざあーっす！ 家宝にします！」

「家宝って……。大げさだよ」

実際大げさだと思うよ。いくらなんでも……

「さてと、これで大体のことは分かったな」

すると、坂本君が頷いています。何か分かったのかな？

「さて。あとはこいつ等をボコにすれば今回の件は終了だな」

さもあらん。とばかりにそんなことを言う坂本君。確かに誘拐は悪いことだけど、いいのかな？ そんなんこととして。

「待ちな、坂本。こいつ等はなんだかんだで詫びはしたんだ。後はこっちの問題だ」

と、アニキさんが坂本君の前にスツと出てきます。、というかいつの間に……

「不良の、喧嘩屋の世界にだってルールはある。ちゃんと詫びをいれた相手に追い討ちを掛けるのはただのクズだ。それくらい、お前だって分かってるだろう。神無月の悪鬼羅刹？」

悪鬼羅刹？ なんのことだろう？ あだ名、かな……？

「ふん。ま、いいだろう。でらあずふりいとのリリーダー、サイサリスに免じて俺は手を引こう」

……さいさりす？　なんだろう？　リスの名前？

「ま、とにかく俺達は急いで学園に戻るか。それはそうと……島田。お前は どうして そんな “ 全てに絶望してます ” みたいな顔してんだ？」

「……………」

島田さんは何故か黙ったまま部屋の隅を指差します。そこには……

「明久く〜ん！　怖かったですう〜！」

「わかった！　わかったから瑞希ちゃん！　ちょ！　ンチュ……だ、だからま……ンチュ、チュ……ちょ、これ以上はいろいろとアウトだからあー……っ！」

「……殺してもなお飽き足りないほど妬ましい！！　（ダバダバダバ……）」

「むう……なんというか、妙な気持ちじゃのう……」

そんな、あんまり直視できないことが起きていたのです。

衝撃？意外な真実なの！

意外な形で幕を閉じた誘拐事件。俺達はチンピラAに雇った人間のことを聞くと、適度にボコッて学園に戻った。

さて。学園に戻った後、俺はその道中に会ったババアに「一日目が終わったら店のところ来い。全てを話してもらぞ」と告げた。ちなみに、この言葉に対するババアの答えは聞いてない。

とりあえず、高町たちを店に戻した後、俺と明久は大会の会場に向かった。もうすぐ五回戦が始まるのだ。遅れるわけにはいかない。

そして、会場に着いたのだが……

「どうなってんだ、こりゃ？」

「どうなってるんだろう、これ？」

目の前の、会場の扉に張ってある張り紙を見て俺と明久は同じような言葉を口にする。なにせ、その張り紙には――――

「立ち入り禁止って、どういうことだろ？」

そう、なぜか会場の扉には立ち入り禁止の張り紙が張られていた。

「おや、吉井君に坂本君。どうしたのですか、こんなところで」

振り向くと、そこには元Fクラスの担任である福原教諭がいた。

「あの、福原先生。どうしてこんな張り紙が？」

「ああ、そのことですか。私も詳しくは知りませんが、なんでも放送機材と照明機材のトラブルがあったらしく、今日これから行われ

るはずだった五回戦は明日に持ち越しとなったのです。一応業者が作業しているので、一般の人が誤って入らないようにするためにこの張り紙を張ったそうです」

なるほど、それでか。

「なので、五回戦は明日行われる予定の決勝戦と一緒に行います」
「そうっすか。なら、明久。店の戻ろうぜ」

明久にそう告げ、俺達は店に引き返した。

明久SIDE

『今日の清涼祭一日目は終了いたしました。皆さん、明日もがんばりましょっ！』

そんな放送がされたのがほんの三十分前。今、僕達Fクラスの店に居るのは現在僕と雄二の二人だけ。瑞希ちゃんとフェイトも残ろうと言ってきたんだけど、雄二が多少強引に帰した。それにしても……

「（バレてないかな……。フェイトに、あのこと……）」

思い出すのはほんの数時間前。誘拐事件の現場とも言えるカラオケボックスで瑞希ちゃんに押し倒され、かなり“激しい”キスをしたこと。

「（もし、フェイトにバレたら……）」

『明久……ずるいよ……。私だって、私だって!』

『フェ、フェイト! 落ち着くんだ!』

『落ち着けない! 我慢できない!』

『ちょ!?! フェイト、まっ————!?!?!?』

※これからは色々と過激ですので、効果音でご想像ください。

ムチュツ! ヌチュツ! レロレロヌチュツパヌチュツパ! ズ

チュルルル~~~~~ツ!!

アツ~~~~~ツ!!

コンヤハ……ネカセナイヨ……?

「……………」

「おい、明久? どうした? バカ面にアホの要素が含まれ始めたぞ?」

「……ハッ!?!」

いかん。少しトリップしてた。

「と、とりあえず雄二。どうして僕等が残るの?」

「ん？ ああ、これから会うんだよ。今回の、高町たちの誘拐の原
因に、な……」

「へー、これから原因に……え、えええええー！――」

「……………」

「明久、声が大きいぞ？」

突っ込むところはそこなのだろうか。

「まったく。いきなりでかい声を出すんじゃないよ」

振り向くと、店の入り口には……

「学え……ババア、来たのか」

「なんでアンタはワタシにそう簡単にそんなこと言えるのかね……」

「全くだよ雄二。ババア長に失礼じゃないか」

「あんたのほうがヒドイさね!？」

あれ？
何かおかしかった？

「さて、とりあえずババア。今回の件。本当のことを話してもらおうか？ いい加減」

「えっと、雄二。一体どういうことなの？」

「どうもこうも無い。このババアが今回俺達の周りで起きた妨害や、誘拐の原因だ」

「えええええー！！！！？」

ちよつ、
どういふこと!?

「さて、知らんとは言わせねえぞ。それに、俺達に話すべきことを

話してなかったことは十分な裏切りと言えるが？」

「……やれやれ。賢しいガキとは思ってたけど、これほどとはね……」

「最初からおかしいとは思っていた。景品の回収だけを依頼するなら、何も俺達にすることは無い。もっと、高得点の生徒とかに頼むべきだ。こんな、学園を代表するバカとFクラスの生徒じゃなくな」「あ、そうだよな。優勝した人に事情説明すれば事足りる話なのに」「そう。そうなれば後は発想の逆転だ。なんで俺達を擁立したのか、ではなく。何故俺達を擁立しなければいけなかったのか、ということだ。この考えだと、まずアンタが言ったチケットの件は関係ない。さっき言ったとおり、俺達なんかより翔子や、木下の姉とかに頼めばすむ話だ。そうなれば、後に残るのは……」

後に残るのは……

「召喚獣の、新技術？」

「そう言うことだ。俺の見立てだと、おそらく“カートリッジシステム”に何か問題があるんだろう」

「え、どうしてさ。白金の腕輪だって新技術じゃ……」

「白金の腕輪にはベースがあるだろう？」

「ベース……あ、“綺羅鋼の腕輪”！」

「そう。あの腕輪にもフィールド展開能力がある。仮にもアースラのやつ等が使ってるような物だ。それをベースにする以上、余計なことをしない限り問題なんて起こる筈が無い。そうなれば、アースラのやつ等も使っていない物。“カートリッジシステム”に何かあると考えるのが普通だ」

「はあ。全く……本当にむかつくジャリだね」

え、このババア長の反応……もしかして……

「あんたの言うとおりでよ。“カートリッジシステム”には欠陥があるのさ」

「あれ？ でも欠陥が分かってるなら別に回収すればいいはずじゃ……」

「明久。新技術なんてものは見せてナンボだからな。いきなり回収なんてことすれば、新技術の存在存在自体疑われる。そうだったら、スポンサーとかに悪い印象与えちまうからな」

なるほど……。たしかに、スポンサーに悪い印象を与えたら色々大変だろう。

「ところで、“カートリッジシステム”って僕等が使っても異常とかって起きないんですか？」

「いや、アンタ等がつかっても問題はないよ。どうも高得点者だとシステムが耐えられないみたいなんだよね」

「なるほど。それで、俺達みたいな優勝できる可能性をもった低得点者に声を掛けたってわけか」

「そういうことさね」

「と、いうことは。俺達の周りで起きた色々な妨害はババアの失脚を狙ってるやつということか。こりゃ、いよいよ確信めいてきたな」

「どういうこと、雄二？」

「あの時。俺がチンピラAに色々聞いただろ？ 雇ったやつの特徴とか」

「えーと。つまり……」

「その雇ったやつが、今回の黒幕と見て良いだろう」

「ちなみに、どんなヤツだい？」

「ああ。スーツにインテリ風の男だそう。ソイツ曰く、ル〇ーシユの劣化版見たいなやつだそう」

いや、そんなこと言ってもババア長には分からないじゃ……

「なるほど。その特徴からすると、教頭の竹原だね」

気づいた理由がせめて前者であることを祈りたい。

「まあ、竹原が近隣の私立に出入りしてるって情報は入ってるしね」
「じゃあ、最初の営業妨害や誘拐は……」

「その教頭の差し金だろうな。高町たちの誘拐も、その営業妨害があっさり返り討ちに遭ったもんだから計画が早まったってところじゃねえか？」

「……そっか」

「とにかく。あんた等には優勝してもらわなきゃならない。その辺のところ、頼んだよ？」

「分かった」

「じゃあ、とりあえず明日だね」

「ああ。まずは決勝に進むっきゃねえ」

決戦は、明日、か……

前夜と昔と出陣間近

「2996！ 2997！ 2998！ 2999！ 3000！
！」

最後の一振りの瞬間。僕の周りをブワツという風が一瞬起こる。
僕は竹刀を構えたまま静かに息を整える。来ていたTシャツにズボン、トランクスもすでに汗でぐっしりと濡れている。

「ふうー……ふうー………」

ホントなら、今の時間は勉強しているべきだった。だけど、なぜだか落ち着かなくてこうしてここ、高町家が所有する道場で竹刀を振りにきたわけだ。

「やあ、精が出るじゃないか。明久君」

「あ、恭也さん。こんばんは、珍しいですね？ こっちに来るなんて。どうかし………忍さんと何かあったんですか？」

よく見れば、恭也さんの左頬には夜でも目立ちそうなくらいの紅葉があった。

「これだけで忍となにかあったって思うのかい？」

「え？ じゃあ、違うんですか？」

「いやまあ……、忍とちよつとやっちゃったんだけどね……」

「で、その結果がその紅葉ですか？」

「まあね、そんなところ」

この人。高町恭也さんはなのはのお兄さん。昔からお世話になっ

てる人で、僕の姉さんが非常識なこともあって、僕にとってはある意味兄さんみたいな人だ。

ただまあ、おとしの六月に、僕等のある友人のお姉さんである忍さんという人と結婚し、婿入りしたため、現在は“月村恭也”が正しいのかもしれないけど。

「まあ、それはともかく。一つお手合わせ願ひ無いかな？」

「年下をボコる気ですか？」

「よく言うよ。剣道を高校でやってれば確実に全国優勝できるくせに」

「そりゃ、いやでも強くなりますよ。僕が小さいときから暇さえあれば“梁山泊”みたいな訓練させられれば」

そう。僕は小さい頃からこの道場で暇さえあれば恭也さんや士郎さんに揉まれてた。ぶっちゃけてしまえば、あの頃は一種のトラウマだよ。

「だけど、強くなることは悪いことじゃないだろう？」

「……僕が“もうダメだあー！”って叫んでも“そう言ってからあと二十分は持つ”とか言ったり、“指がちぎれるうー！”とか言っても“そう言って千切れた人間はいない”とか言ってみて捨てたクセに……」

「はっはっは！ よく覚えてるねえ？」

「忘れたくても忘れられないんですよ！」

「ま、良いじゃないか。身体もあったまってるみたいだし、軽くだから大丈夫だよ」

「恭也さんが軽くって言ったら確実に一時間以上ですよね？」

「フッ、親父の軽くよりはマシだろう？」

「確かに……」

あの人の軽くは六時間だもんなあ……

「でも、今回ばかりは三十分ぐらいでお願いしますよ？　もともと、気分をリフレッシュさせたくて来たんですから。これから勉強しなくちゃいけないし」

「ん？　そうか……。なら、付き合ってくれたお礼に勉強を教えよう」

「え？　いいんですか？」

「ああ。それくらいはするよ」

「そうですか。なら――――」

「勝負というのか」

さて、清涼祭二日目を迎え、僕は真っ先に店に向かうと――――

「おお、おはよう。吉井君」

「って、穴鈴さん！？　なんでここに！？」

そこにいたのは、昨日なのはたちを誘拐したチームのリーダーの穴鈴雅統さんだった。

「俺が頼んだんだ」

「って、雄二。どういうこと？」

「ああ、昨日帰る途中でコイツに会ってな。昨日の詫びがしたいんだそうだ」

「うむ。昨日は知らぬこととはいえ、色々と迷惑を掛けた。だからリーダーとして詫びがしたいのだ」

「なるほど……」

この人、何気に義理堅いなあ……。まあ、悪い人じゃ無さそうだけれど。

「おはようー、みんな」

と、なのはが登校してきたようだ。

「あ、なのはおは「おはようございます、なのはさん！」……」

「え？ 穴鈴さん？ どうしてここに？」

「はい！ 自分は昨日のお詫びをと思い、今日はここの監視と護衛をと思ひまして！」

「そうなんですか？ ありがとうございます。今度なにかお礼させてくださいね？」

「いえ、そんな！ この穴鈴雅統！ 貴女の笑顔を守れるだけで光栄の極み！」

「あはは……じゃあ、お願いしますね？」

「Yes, my princess. お任せください」

なんとという忠誠心。もはや呆れを通り越して感心すら覚える。

「それはそうと、俺と明久は補充試験を受けるから少し抜けるぞ。その後少しだけ仮眠をとるからな？」

「でも、少しだけなら手伝うからさ、十時前に起こしてよ」
「うん、分かった」

そう伝え、僕と雄二は店をでる。さあ、これからが正念場だ。

『おい！ お前、なのはさんとはどういう関係だ！』

『む？ フツ、話す舌など持たんな。ただのヒヨっ子などに』
『なにい！？』

ブンッ！

『甘い！ そんな攻撃で墮とせるほど、この穴鈴雅統！ 甘くはな
いわ！ そして、キサマがなのはさんと一緒にいるのは偶然に過ぎ
ん！』

ガッ！

『ぐっ！？ それでも僕は、なのはさんのクラスメイト！ 友達だ

あー！』

『それは一人前の男の台詞だあー！っ！』

何か、須川君と穴鈴さんが何か話をしてたけど、気にしてはいけ
ないのかもしれない。

「♪ 青ざめた瞳　見つめる炎　今全てを、捨てるとき
が来たら　想い出すことも　悲しむことも　許されずに
戦い続ける」

「……雄二。何歌ってんのさ？」
「いや、なんとなく、な……」

婿入り！？ 姦計巡る五回戦なの！

五回戦になると、流石に観客が多くなってくる。周りの声はもとより、ざっと見ても人数は前の試合より多いことが分かる。

さて、これから僕等は五回戦の相手と戦うんだけど……

「……雄二。邪魔しないで」

「ふざけるな。俺にはまだやりたいことが沢山あるんだ!!」

問題はその相手というのが霧島さんと秀吉のお姉さんだということだ。木下さんはAクラスであるように成績が高い。また、ムッツリーニ曰くプライドとエリート意識も高いのだとか。余談だけど、その二つ——プライドとエリート意識——のせいで秀吉よりも近づきづらく、人気も秀吉より低いのだとか。

そして、そのパートナーの霧島さんはさらに別格。なにせ学年主席だ。多分、僕と雄二が二人掛りでやっても勝つのは難しいだろう。本当に、どうやったものか。まあ雄二が何か策を考えてるみたいだけど、なんだろう？　すごく嫌な予感がする。

「……雄二。そんなに私と一緒に行くのがイヤ？」

そうやって霧島さんは上目遣い。これは効く。これで酷いことが言えるヤツは人間じゃない

「ああ。イヤだね」

……人間じゃない。

「……やっぱり二人で暮らして分かり合う必要がある」

そう言う霧島さんの周りに陰呑なオーラが出始める。全く、雄二は何も学習しないんだから。

「代表のセンスはともかく。どうして坂本君は代表がイヤなのかしら？ 確かに、無愛想なのはマイナスかもしれないけど」

「全くだよ。雄二もいい加減素直になれば良いのに」

「うるさい黙れ！ というか、姫路とテストロッサに二股掛けてるやつに言われる筋合いはねえっ！！」

「そんなこと言われてもなあ。あの関係は僕等なりに考えて上で、そして納得の上で成り立ってるわけだからね」

「だ、だがこのまま行けばお前は間違いなく“姫路明久”か“明久・ハラオウン”になるんだぞ！！」

「そうになったらそうになったらだよ。むしろいつまで経っても答えを出さない僕の不始末で自業自得なんだし。それに、そういうことになるのは二人が僕のこと好きだから起こるわけなんだから。むしろ歓迎するよ、僕？ というか雄二。そういう曖昧な態度をとるから霧島さんもあれいろんな手を使ってくるんじゃないの？」

「ぐうっ！？ お、俺が明久に会話で負けただど！？」

「なんだか吉井君って恋愛なれしてるわね。随分と達観とした感じがあるし」

「……そのとおり。雄二ももっと吉井を見習うべき」

「俺に味方はいないのか！？」

いると思ってるの？

『あの、そろそろ初めても宜しいでしょうか？』

と、確認を取る様に審判の先生が聞いてくる。そうだ、すっかり忘れてた。

「あ、はい。良いですよ？」

『分かりました。それでは会場の皆様、お待たせいたしました。ただ今より召喚大会五回戦を開始いたします！』

その言葉と共に、フィールドが展開される。今回は保健体育か。

さて、雄二の作戦が吉と出るか、凶と出るか。戦闘開始だ！

☆

フェイトS I D E

「サンダースマッシャー！」

私の召喚獣が放った一撃が、相手の召喚獣に叩き込まれ、小規模
だけで爆発が起きる。

2年Aクラス フェイト・T・ハラOWN 保健体育 344点
&

2年Bクラス 八神はやて 保健体育 479点

V S

2年Cクラス 小林隼人 保健体育 0点

&

2年Cクラス 史田魁 保健体育 0点

そして相手の召喚獣目を回しながら倒れ、そして消滅する。よし、私たちの勝ちだね？

『勝負あったーっ！ 決勝進出は、テストロッサ・八神ペア！』

そんなアナウンスのと同時に、周りの観客から歓声が響く。なんだか恥ずかしいなあ……。

「いやー、やったなあフェイトちゃん」

「うん。これ以後は明久たちが勝てば大丈夫だね」

「せやね。まあ、アキ君たちが負けるところは想像できへんけどなあ」

「うん。明久は強いもん」

「惚気乙」

「ありがとう。それにしてもはやて、保健体育の点数また上ったね？」

まだ表示されてる点数を見て、私はなんとなく呟く。もともとはやては保健体育が得意だったけど、このところまた上り始めている。

「うん。私はあの時、Fクラスとの試召戦争で知ったんや。上には

上がいるつちゅーことをな」

「はやて……」

「けど、いつまでも上にはいさせへん。必ず追い越したる。目指せ、保健体育学園一や！」

「そっか、頑張ってねはやて」

それにしても、女の子が保健体育の一番を目指すのってどうなんだろう……？

☆

「これ、一体どういうことなんだろう？」

「さあ、どうということ何やろうねえ？」

それは、私たちはもう一つの会場に来て、試合場をみた瞬間に思ったことだった。ここでは今、明久たちの試合が行われてるはず。それなのに……

2年Fクラス 土屋康太 保健体育 511点

&

2年Fクラス 坂本雄二 保健体育 UNKNOWN

VS

2年Aクラス 木下優子 保健体育 321点

&

2年Aクラス 霧島翔子 保健体育 UNKNOWN

どうして土屋君（だっけ？）が出てるんだろう？

「……………加速」

「ほ、ホントに卑怯……………キャアッ！」

なんて考えている内に、土屋君の攻撃で木下さんの召喚獣を撃破する。

「よしっ！ 僕達の勝利だ！」

その瞬間。明久が勝鬨を上げる。でも、いいの？ これ？

『え……………。ただ今の勝負ですが……………』

流石の先生も迷ってるみたい。まあ、気持ちは分かるけどね。

「霧島さん。僕達の勝ちで良いよね？」

「……………それは」

「翔子。愛してる」

代表が迷う瞬間。代表の隣でうつろな目をしてる坂本君がそんなことを言う。でも……………あれ？ なんだか、さっきの声。坂本君のいる所とは違うところから聞こえたような……………？

「……………私たちの負け」

『……わかりました。この勝負、吉井・坂本ペアの勝利です!』

“酷く納得がいかない”と言いたげな顔で先生は勝敗をアナウンスする。だけど、観客はみんな冷めた目をしてる。まあ、確かにアレはねえ……。

「ちよっ! 霧島さん! この後まだお店や決勝があるんだからクスリは勘弁して!!」

うつろな顔をしてタキシードに着替える坂本君を見て、明久は慌ててる。さて、助けてあげよ。

「ところではやて」

「うゝひゃっひゃっひゃっひゃっひゃっ! は、腹が痛い!」

お腹を抱えて大笑いしているはやてをまずはなんとかしないと。

決勝と表彰と追走劇

『優勝は、吉井・坂本ペアーッ！』

そんなアナウンスと共に、僕と雄二はガッツポーズをする。が、正直なところ個人的にはあんまり心が晴れるものじゃない。なぜなら――――

2年Fクラス 吉井明久 日本史 197点

&

2年Fクラス 坂本雄二 日本史 235点

VS

2年Bクラス 八神はやて 日本史 105点

最初に言っておく。これは試合開始直後の点数だ。もちろんおかしいところはある。一つ目はなぜフェイトがいないのかということ。そしてもう一つは何で八神さんの点数がこんなに低いのかということだ。

まあ、理由を知ってる人なら納得いく話だけどね。僕等の優勝には二つのものが掛かってる。一つは瑞希ちゃんの転校阻止。そしてもう一つが学園の存続。この二つのうち、フェイトたちは前者を知ってる。大事な親友がいなくなるのはイヤと言うフェイトの考えからこの作戦は行われた。

まず、フェイトは現在体調不良で参加不可ということになってる。

もちろん嘘だ。八神さんだけならともかく、学年次席のフェイトまで一緒に倒すとなると話が違ってくる。八神さんの点数が低いのは本人曰くヤマが外れてこんな点数になったということになってる。しかし、フェイトはこうもいかない。仮にも学年次席がヤマはりななんてことをするはずがほとんど無いからだ。だからフェイトには体調不良という嘘で退場してもらったわけだ。

という感じで出来上がったのが、今回の決勝というわけだ。やれやれ、八百長もいいところだ。多分観客の中には僕等に対して非難を上げるものもいるはず。実際僕等がやったことって、点数の低い、たった一人の相手（しかも美人）を二人掛りでボコったというわけなんだからね。仕方ないとはいえ、ここはその非難を甘んじて受けよう。

「ま、何はともあれこれで色々となんとかあったな」

「まあそうだね。これで瑞希ちゃんの転校も阻止できるはずだし」

とにかく。これで心配事はほとんど無くなったな。



『これにて、清涼祭全日程を終了します。みなさん、おっ疲れさまーっ！』

そんなアナウンスが流れると共に。僕はため息を一つついて床に座り込む。

「つ、疲れた……」

「まったくじゃのう」

「……（コクコク）」

秀吉とムツツリーニも同じ意見のようだ。

「つと、そうだ。おい明久。そろそろババアのところに行くぞ」

「え？ ああ、そうだね」

とりあえずババア長には報告とかなきゃだしね。

「む？ 明久よ。どこかに行くのかのう？」

「うん。ちよつと業務報告みたいなもんだよ」

「ああ。安心しろ、すぐに戻るからよ。後片付けしといてくれ。それとムツツリーニも来てくれ」

「……（コク）」

「んじゃ、行くか」

☆

「ババア、入るぞ」

そう言って返事も聞かずに入るこいつは色々な意味で大物だと思う。

「まったく。あんた達は……。礼儀っていうのを知らんのかねえ？」

「そんなことより学園長。優勝の報告に来ました」

「言わなくても分かってるよ。あんた等にトロフィー渡したの誰だと思ってるんだい」

「「妖怪」」

言わなくても分かってることじゃないか。

「……あんた等にはホントにこの学園の長が誰なのかキチンと教えてほうが良いみたいだね……」

「まあ、ともかく。これで大丈夫ですよ？ 技術の欠陥のせいで学園がどうかしちゃうことも「明久！ その話はマズイ！！」……え？」

「……盗聴の気配」

その言葉を聞いて、雄二は学園長室の扉を開く。そこには坊主頭にモヒカンの男子が慌てて逃げるところだった。

「チッ！ やられた！ あいつ等を追うぞ！」

「雄二、どういうこと！？」

「あいつ等、学園長室を盗聴してやがった！」

「ええっ！？」

「とにかくマズイから追うぞ！ ムツツリーニも頼む！」

「……承知。その前に携帯を貸してくれ」

「持ってないの？」

「いざという時鳴ると困る」

その“いざという時”がどういうものなのかは気には負けな
んだろう。

「とにかく追うぞ!!」

☆

「はぁ、はぁ、はぁ……」

「はっはっは……」

その二人、夏川俊平と常村勇作は荒く息を吐きながら目的地の重
い鉄の扉を開く。そこにあるのは屋外用の放送機材であった。

「へへへ……。これを使えば、俺達の……」

「ああ。逆転勝利だ!」

常村はポケットからテープを取り出す。そして放送機材の前に立
った。

「まったく。あのへんてこな料理のせいで木原マサキ実験台にされた
ときはどうなるかと思ったぜ……」

「まったくだ」

正直、確実にトラウマになる経験をした二人にしてみれば、これ
は教頭の依頼をこなすのと同時に、一種の復讐であった。

まあ、気持ちとは分からなくも無いが……。

「と、とにかくだ。これで俺達の勝ちだ。あいつ等はちゃんと撒いたからな」

「ああ。せいぜい悔しがりな」

「ちなみに、それをやったら文月学園はどうなるか分かるか？」

「あん？ そんなこと俺達が気にするようなことじゃあ………？」

突如の第三者の言葉に、二人はそろって頭に“？”を浮かべながら後ろを見る。

「まったく。目先の利益にとらわれてちゃんと考えないからこうなるんだ」

「お、お前は……ハラオウン！？」

「何故ここが！？」

文月学園の制服を着た男。クロノ・ハラオウンはその言葉を聞いて呆れ顔を作る。

「学園長から連絡があつてな。お前達二人を追ってくれてな。とりあえず、僕もある程度の事態は聞き知ってる。二人とも、それを渡すんだ。今なら反省文五枚で許してやる」

「へっ！ 冗談じゃねえ！ ここまで来ていまさら“はいどうぞ”なんて言って渡せるか！」

「まったくだ。それに、この依頼を達成できれば大学の推薦状を書いてもらえるからな」

「全く……。仮にもAクラスなんだから普通に頑張ればいいものを……。ま、いい。しかたない。力づくで連行する。……起動！^{アウェイクン}」

クロノの発したそのキーワードによって、召喚フィールドが形成

される。

「はっ！　いくらアースラの隊長でもあ！　Aクラス二人係で勝てると思うなあーッ！」

その言葉と共に、常村と夏川の召喚獣が一気に飛びかかる。――が。

「……遅い」

その言葉と共に、二人の召喚獣は一瞬の内に氷漬けにされる。

「なっ！　そ、そんなバカな……！？」

「甘いんだよ、君達は。仮にも生徒会長。そして――」

3年Aクラス　クロノ・ハラオウン　総合科目　5322点

「3年Aクラスの代表を舐めてもらっては困るんだ」

「グッ……」

「さあ。君達を連行する」

バンッ！

「やっと見つけた！……って、クロノ会長！？」

と、そこに吉井明久と坂本雄二が姿を現す。汗だくなところを見ると、学園中を走り回っていたようだ。

「安心しろ。二人は僕のほうで処分する。君達二人はこれを学園長に渡してくれ」

そう言って常村からテープを取り上げて明久に渡す。

「あの、クロノ会長」

「何だ、吉井？」

「クロノ会長はどこまで知ってたんですか？ このこと」

「……大体は把握してた。ただ、力づくはムリだからな。今回はバツアップみたいなことをしていた。とにかく、それを任せたぞ」

それだけ言うと、クロノは二人を連れて行く。二人は精も根も尽き果てた顔をしながら連行されていった。

「……とりあえず、解決でいいのかな？」

「ま、そう言うことだろ？ とにかく、俺達も片付けに戻ろうぜ」

雄二はそう言うのと扉を開けて店に戻ったのだった。

決勝と表彰と迫走劇（後書き）

次回で清涼祭編もラストです。

今日の終わり、祭りの終わり（前書き）

四十話で、きり良く清涼祭編完結です。では、どうぞ。

今日の終わり、祭りの終わり

清涼祭が終わって一時間ほど。後片付けもある程度終わり、文月学園の生徒達は校庭に集まった。これから始まる――――

『それじゃあ、後夜祭の始まり始まりーっ！ みんなぁー！ 盛り上がっていきうぜいっ！！』

『『『『『Yeah――――！！！！！！』』』』』

後夜祭のために。

この後夜祭は言ってしまうえば無礼講などところがある。二日間に渡って行われた清涼祭で気分がハイになっていることもあるし、なににより誰も彼もが頑張ったためか、余程のことが無い限り先生達もとかくは言わなかった。

ステージには体育館で公演を行っていたバンドが曲を流している。それに合わせるかのように、周りには何組ものペアが踊っている。中にはこのムードに乗って告白をしているものもいる。

『わたし……武林君のことが、武林君のことが好き！ 大好き！』

『か、川瀬さん……！ ぼ、僕も君のことが……』

そんな定番ともいえる告白もあれば、

『先生！ 俺は、俺は先生のことが好きだぁー！！！！っ！』

『し、下条君。……ありがとう。でも、私たちは教師と生徒の関係だから……』

『教師と生徒の関係……。そんな幻想ぶち壊す！』

なんて大胆な告白もあれば、

『渡さない！ リリは絶対渡さない！ たとえ貴方がリリの弟でも！』

『それはこっちの台詞ですっ！ 兄さんは渡さない！』
『やめろ！ シューリー！ ララ！ 俺のために二人がやり合うな！』

なんておかしな告白（？）もある。

そして、こんなことがあれば当然————

『『『『けえっへっへっへ！ 異端者がこんなに！ 異端者を殺せ！ 世界の理と真理に反するものには清純なる、英傑なる正義の鉄槌を！』』』』』

『諸君！ ここはどこだ！？』

『『『最後の審判を下す法廷だ！』』』』』

『異端者には！？』

『『『死の鉄槌を！』』』』』

『ならばよし！ 異端審問会、出撃ぞ！』』』』』

『『『Yeah———！ Let's party！！！！』』』』』』

こいつら、異端審問会ことFFF団も出るわけだ。

「まったく。あいつ等はいくら無礼講だからってあんな迷惑なことをすればどうなるか分かるだろうに……」

と、隣で飲み物の入ったコップを持ちながら、雄二はそう呟く。

「でもまあ、これがFクラスオリエイじゃないの？」

「それを言うなよ。というか、お前のことをあいつ等に言えばどうなるか分かるか？」

「言う気なの？」

「いや、言わん。言ってお前の幼馴染の魔王に殺されるのはごめん
だ」

そう言う雄二は少しだけ震えていた。

「そういえば、さっきババア長から如月グランドパークのチケット
貰ったけど、どうする？ あげようか？」

そう言って僕はポケットからチケットを取り出してヒラヒラと見
せる。

「そうだな。よし、明久。そのチケットを寄こせ」

「え？ いいけど……」

よく分からないけど、僕は雄二にチケットを渡す。

「こんなものはな……こうするのが一番だ!!」

そう言って雄二はチケットをビリビリと破いていく……って、ち
よっと待った!!

「ちよ、雄二！ なにチケットを破いてるんだよ！」

「当たり前だ!! こんなものがあるから、俺は今回の召喚大会で
苦しい思いをしなければならなくなったんだ!! 第一、下手にお

前に持たせてたら翔子辺りに行きかねない!! そうなったら俺の人生はこんどこそ破滅するんだよ!!」

そう言う雄二顔は本気で泣きそうになってる。これは……色々ときてるなあ。

……というか。

「……雄二。今の話、詳しく聞かせて」

これからは霧島さんがいないところでそういうのは言うべきだろう。

「しょ、翔子!? うわっ! は、離せ! 離せえ!!」

あっという間に霧島さんは雄二の首根っこを掴んで連れて行く。

雄二、南無……。

ちなみに。これが、要するにチケットを破って霧島さんを誘わなかったことが原因で、後々雄二の身にとんでもないことが起きるんだけど、これはまた後の話。少なくとも。僕をバカにできなくなることだけは確かなことだ。

「おお、いたいた。アキ君」

「って、八神さん。どうしたの?」

振り向くと、そこには八神さんが手を振っていた。

「ん、実はなあ、ほくれ、ごたーいめーんっ!」

八神さんがその場をどく。そこにいたのは……

「瑞希ちゃんに、フェイト……」

「えっと、似合いますか？ 明久君……」

「どう、かな？ 似合うかな？」

そこにいたのは薄いピンク色のドレスを着た瑞希ちゃんと、純白のドレスを着たフェイトがいた。

「に、似合うよ、とっても。二人とも」

「ほ、ホントですか……？」

「うれしいな、そう言ってもらえると……」

そう言っ顔を赤らめてうつむく二人。ああ、もう！ 可愛いなあちくしょう！

「それにしても、よくあったねこんなドレスなんて

「なはは。ウチのクラスのコスプレ衣装のヤツや。いや、ここま
でマッチするとは思わなかったなあ」

なるほど、そういえばBクラスはコスプレなんてやってたんだっ
け。

「さあさあ、はよ行った行った。三人でダンスでも踊ってきい」

そう言っ八神さんが僕等をダンスの輪に押し出していく。それにしても、よくよく見たら結構コスプレしてる人いるなあ。なかにはアールとロザ○ンドの格好をしてダイナミックに踊ってるし。ていうか、今掛かってる曲っ“罪な薔薇”じゃないか。

「明久君……行きましょう？」

「明久……行こう？」

そう言って二人は僕に手を差し伸べる。やれやれ、両手に花だね。

「うん。行こう」

僕は二人の手をとって、ダンスの輪に入ったのだった。

ちなみに、これが原因で休み明けにクロノ会長率いる異端審問会と追いかけっこすることになるのは別の話。

☆おまけ☆

「な、なのはさんっ！」

男。須川亮は今、最大の勇気を振り絞っていた。

「ん？　なあに、亮君」

彼の方を振り向いて、首を傾げる彼女、高町なのはに須川はドキッとする。

「あ、あの……、ぜ、ぜひ俺とダン『』『』『異端者、須川亮!!』『』『』『な、何いっ!?!』」

誘おうとした瞬間。彼の周りに異端審問会、通称FFF団が集ま

つた。

『異端者、須川亮。被告は異端審問会の会長でありながら、我々異端審問会の、世界の理に反する行動をとった……。諸君。これは事実には相違ないか?』

『相違ありません!』
『よし……。判決、有罪! 死刑!』

その瞬間。異端審問会の面々はそれぞれの得物を構えて須川に迫る。

「く、くっそおおおー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

須川はそれを見た瞬間。全速力で逃走を始めた。

『むっ！
逃がすな！
追ええー！
追ええー！』

了解！！！！！！！！！！

この追いかけてこは、明け方まで続いたという。

今日の終わり、祭りの終わり（後書き）

これにて清涼祭編完結です。次回からは少し日常編でも書こうかと思えます。

数たちと町医者とマッドサイエンティスト（前書き）

さて、今回から日常編なのですが、いきなりあのマッドサイエンティストが登場です。

数たちと町医者とマッドサイエンティスト

文月新聞

「衝撃!？」 最下位男子と最上位女子二名のトライアングラー!
!

先日行われた清涼祭の後夜祭にて、我々文月新聞取材班は意外なものを目にした。学年を代表するバカ（一部では学園を代表するバカという呼び名がありますが、今回は割愛させていただきます）と呼び称される2年Fクラス、Y井A久君が2年Aクラスの生徒、Fエイト・T・Hラウンさん。そして2年Fクラスの生徒、H路M希の二名と後夜祭のダンスでとても仲がよさそうに踊ってる姿を当取材班が目撃した。

元々この三名は三角関係にあるという情報もあり、これらの事態に対して我々取材班は本人及び、周辺の人物に話を伺った。

H路さんのコメント

「ええ!？」 あ、それはその……はい。一応私たちはお互いの認識の上でそう言う関係を持たせていただいています。あ、でも! その、A久君が望むなら私はいくらでも、そして何でもしちゃいますよ! はい、望むならそのままおうちにお持ち帰りしてもらっても……
(H路さんがヒートアップし支離滅裂になりかけているので割愛させていただきます。)」

Hラウンさんのコメント

「え? うん、そうかな。あ、別にA久が浮気をしてとかじゃなくて、ただ私たちがそう望んでそうなったっていうか……。だってM希は友達だしね。あ、でもA久のことは別だよ? もちろんA久が望むなら私はいつだって……(Hラウンさんがヒートアップし

支離滅裂になりかけているので割愛させていただきます。」

以上の通りのコメントから推測するに、二人は分かかってY井A久君と三角関係になったようである。そうするとY井A久君はかなりの恋愛上手になるのだが……。以下の人物に話を聞いてみた。

K保さんのコメント

「くっ……！　な、何故だ……、何故なんだ吉井君！！」

異端審問会のメンバーのコメント

「異端者に死を！　愚者に神の鉄槌を！！　真理は我等にあり！！」

Kロノ生徒会長のコメント

「hくいエアフへうfひえ下f v hくえ g b c v s b d f ん j v ふい……………！！！！！！（人外の言葉であるため割愛します）」

しかし、取材した人物はどれもこれもが当てにならないようなコメントばかりであり、詳しいことは分からずじまいである。これからも我々取材班は取材を続けていきたいと思う。続報を待て！

それは、補習のために登校した補習が終わったときに起きた。

ゴキゴキゴツキンッ！！

「いぎやああああー！ー！？ 両肩と両膝と腰の関節が一気に外れたあー！ー！ー！！」

僕こと吉井明久は、全身を襲う関節の外れた痛みにした打ち回っていた。というか、何でこうなるの！？ 僕はただ、お腹周りが気になるという、俗に言うダイエットの話をしていた島田さんにこう言っただけだ。

『え？ 大丈夫だよ。島田さんはスリムだよ。胸も、ウエストも、ボインもバストもとっても平べった痛い痛いー！ー！ー！！』

純粋な感想を言っただけなのにこの仕打ち。理不尽にもほどがある！

そして気がついたら既に既にお昼過ぎ。教室には誰もいなかった。ちくしょう、ひどいや。

「お昼ごはんの前に、この関節を何とかしなきゃ……」

そう言って立ち上がり、腕や足の関節をゴキゴキとはめていく。うう、はめる瞬間が結構痛い。

「うーん。なんだかまだ痛いなあ。関節をはめたはいいけど、この痛みを何とかしなきゃ」

関節が外れた痛みがまだ残ってる。しょうがない、このままって

のもなんだし。

「あそこに行くか」

そう決め、僕は鞆を持って教室を出た。

☆

「ふう、やっとついた」

最近気温が上ってきてるせいか、僕の頬を汗が伝う。そんな僕は目の前の建物を見た。

『町医者 無限の欲望』

看板に書かれてる文字を読んで、僕は呆れる。なんというか、もっとマシな名前を思いつかなかったのだろうか？ まあ、いつものことだけどさ。

カランカランッ

ドアを押して開けると、あるで喫茶店のようなベルの音が響く。ちよつと心地いい。

「はいはい、いらっしやい。ここに保険証と名前と病状を……つて、明久じゃねえか」

「こんにちは、ノーヴェちゃん」

出てきた赤毛の看護服を着た女の子、ノーヴェちゃんに僕は軽く挨拶をする。

「しかし、どうした？ また関節か？」

「うん。それで、ドクターいる？」

「ん？ ああ、もう少しで回診終わるから待ってろ」

そう言うところ、ノーヴェちゃんは机に頬杖を付く。

「そう言えばノーヴェちゃん、学校は？ 今年で16なんじゃないか
ったっけ？」

「ん？ ああ、アタシは高校行ってねえよ。中学卒業と同時に看護師に就職だ」

「え！？ 行っていないの！？」

「別に行っていないからって死ぬわけじゃないだろ。だいたい、高校は義務教育じゃねえんだから」

「まあ、そうだけどね」

「ま、とりあえず後ろの子の相手でもしてやれ」

「え？」

そう言われて後ろを振り向くと……

「明久、ひさしぶり」

「あ、ルーちゃん」

そこには薄い紫の長い髪の子。ルーテシア・アルピーノちゃん
がいた。まあ、僕はルーちゃんと呼んでるけどどね。

「ルーちゃん、お母さんは？」

「今、ドクターが診てる」

「あ、そっか」

この子が病院にいるのはこの子のお母さんが入院してるから。だから自然に時間があるときはこっちに来るんだ。

「明久、本を読んで」

そう言ってルーちゃんは本を渡してくる。えーと、『ベルカ王朝実録 〱霸王と聖王〱』って、なんだか難しそうな本……。厚さなんかハリー〇ッターじゃないか。

「明久、最近来てくれないんだもん……」

そう言ってルーちゃんはブスツと頬を膨らませる。やれやれ、かわいいね。

「そっか、ごめんごめん。だからもうちょっと簡単な本にしようか？」

「ううん。元々これを読むつもりだったから……」

さいですか……。

☆

「さて、待たせたね。吉井君」

あれから二十分ほど。ようやく僕は診察室に通された。

「ええ。そうですね」

「いやはや、今度はどんな怪我かね？ 君の回復能力は意外と高いからぜひとも実験材りよハックシュッ！！ ……失礼。とにかく診察をしよう」

僕の目の前にいる人。紫の髪、黄色の目。そして“胡散臭いが服を着て歩いてる”を体現したこの人が、この病院の院長。ジェイル・スカリエッティ先生だ。うーん。今日もまたマッドサイエンティスト臭がする。

「ふむ……。いま何か失礼なことを考えなかったかね？」

「気のせいです」

危ない危ない。

「そういえば、ウーノさんとクアットロさんはどうしたんですか？ 姿が見えませんが」

僕は辺りを見回すけど、普段からドクターと一緒にいる二人の看護士の姿は見えない。

「うむ。ウーノとクアットロは学会に行ってるよ。私はあんまりあいう所には行きたくないのだね」

なるほどね。そういうことか。

「さてと、いい加減見せてくれたまえ」

「あ、はい」

そう言つて僕はシャツを捲る。

「……ふむ。これはまた。見事としか言いようが無いくらい綺麗にサブミッションを掛けられたね。相手はそっち方面の人間かね？」

「いえ、その……」

普通（？）の女子高生ですとは言えない。

「まあともかく。このくらいなら湿布を張れば何とかなる。君の回復能力は凄まじいからね」

カルテを書きながらドクターはそう告げる。よかった。たいしたことは無いようだ。

「それはそうと……。大丈夫かね？ 彼女の方は」

そんなドクターの言葉を聞いて、僕は目を細めた。

「彼女って……。……なののことですか？」

「うむ。そうなるね」

「でしたら、大丈夫です。もうなのは普通に生活して――――」

「テニスも完璧にできてる、か……」

「はい」

「そうか……。だが、それはあくまでも結果だよ。結果論だ。その過程が、ね……」

「ドクター前にも言いました。なのはもう気にしてなんか――――」

「それは、君の、他人の前だからかもしれない。君がそう思ってるだけで、そう彼女が見せてるだけかもしれない」

「でも、ドクター。貴方のおかげでなのは、あぁして治ったんです！ それなのに、ドクターはなのはアレのせいで、街の大病院を辞めて、こんな町医者……」

「私が望んだことだ。君のせいでも、彼女のせいでもない」
「でも……」

「さ、湿っぽい話はここまでにしようじゃないか。外はこんなにカラッと晴れてるんだからね」

そう言っただクターは窓の外を見る。その仕草は、『この話はおしまい』と、遠まわしに言っていた。



「ほんじゃ、診察代と湿布代で985円もらうぞ」

「うん。じゃ、はい」

僕は財布から千円を出して渡す。

「んじゃ、15円のお釣りと湿布な。風呂から上った後なんかもちやんと貼れよ？」

「うん、分かってる」

おつりと一緒に湿布薬を貰って、それを鞆に入れようとしたときだった。

「あつきひささささっ！！」

ドンッ！　グシャッ！

後ろから飛んできた何かが僕を押しつぶした。というか、痛い。

「私に会いに来てくれたっすか！？　うれしいっす！」

「あはは、相変わらず会話を端折るね、ウエンディ」

「ウエンディ。明久が困ってる」

僕にのしかかる赤毛の女の子、ウエンディちゃんに茶髪の女の子、ディエチちゃんが注意をするちなみにどちらも中学生だ。

「こんにちは、ディエチちゃん。部活が終わったんだね？」

「うん。こんにちは、明久。はいこれ。飲みかけだけど」

そう言ってディエチちゃんは飲みかけのスポーツドリンクを渡してくる。ちょうどいいや。咽かわいてたし。

「むー、ディエチはそうやってさりげなく明久に関節キスを迫るっすね！」

「え……！？　あ、……／／／／／」

「むー、このままじゃ私の負けっす。なにか、何かないっすか……。私が明久にあげられる物……そうっす！！」

？　なにか思いついたんだろうか？

「明久！　私は明久に今から脱ぐ脱ぎたてのブラ「やめんかつ！！」
『ゴインツ！！』きょううつ！」

セーラー服に手を掛けたウエンディちゃんに、ノーヴェちゃんが
バインダーの角（めちゃくちゃ痛い）で殴りつける。

「い、痛いっす！　バカになったらどうするっすか！？」

「これ以上バカになる要素はないだろうが」

「ひ、ひどいっすっ！　明久く、慰めてほしいっす」

「ディエチ、とりあえずバカ（ウエンディ）を剥がしてやれ。これ
じゃあ明久が立ち上がれねえ」

「うん」

「うええくん。明久く、愛しのハニーを助けてほしいっす！」

そんな昼下がりの病院に、ウエンディちゃんの声は響き渡った。



「大事なものは患者が生きていけるかどうか……。しかし、それでも

私は元通りにしてあげたかった……」

自身の私室で、スカリエッティは一つのカルテを見ながらそう呟く。そのカルテの患者の状態を示す欄には、色々なことが書かれていた。

・左上腕骨複雑骨折　・両膝蓋骨骨折　・大腿骨単純骨折　・以下、全身各部の骨に軽度ながらの損傷　・内臓破裂二箇所　・骨折による下半身神経圧迫による不随状態になる可能性……大

・歩行等の能力に障害及び後遺症が残る可能性……大

それは、呆れなくなるほどの怪我の数々であった。普通なら、この患者は今頃はベッドの上、もしくは車椅子での生活が余儀なくされたはずである。

「人の思いというのは、時に信じられないキセキを起こす。しかし、それでも傷は完全に消えない……。心も、身体も、ね……………」

そう呟きながら、スカリエッティはカルテを鍵付きの引き出しの中にしまう。そして席を立ち、部屋を出て行った。

そのカルテは、彼が町医者になったきっかけだった。

そのカルテは————

高町なのは（13才）

という名前の患者のカルテだった。

登場！ お元気娘なの！（前書き）

さて、今回はまたもやりりカル側からキャラを出します。

登場！ お元気娘なの！

「ああ、うん。……うん、分かった。じゃあ今晚は頼むな？ ああ、こっちは外で済ませるからな。じゃ」

その言葉を最後に、彼は携帯の通話を切る。そして「ふうー」とため息をついて椅子の背もたれに身体を預けた。

「お電話、娘さんからですか？ 部長さん」

そんな彼に声を掛けてくるのは、年齢を聞かれたら二十歳でも十二分通用する女性。交通課の婦警であるリンディ・ハラオウンである。

「ん？ おお。昨日署長から呼ばれてな。今日は接待だから遅くなるって連絡したんだ」

「どちらの娘さんですか？」

「上の方だ。下の方は携帯不精なところがあつてな。掛けたら電源切つてあつた」

そう言つて彼はやれやれと肩を竦ませる。

「下の娘さんは、確か高校一年生でしたよね？」

「ああ、毎日毎日俺の目覚まし代わりのような大声で登校してくよ」

「元気なのは良いことですよ。高校生ともなると、だんだんそういう子が減っていきますから」

「ははっ、違いねえ。ただ、仮にも年頃の娘がそこの男より大食いってのはどうなんだろうな？ まあ、これは上のほうもあたるわけだがよ」

「似たんですよ。部長の奥さん……クイントさんに」

「だよなあ、髪や目の色とか、微妙に勝気なところとか大食いなところはクイント似だな」

「あと、行動力があるところとか……」

「やれやれ、そんなに男ができたのかねえ？」

「あら、できたらできたで認めないじゃありません？ 前に娘さんが男の人と出かけるっただけでスナイパーライフル担いでいったって聞きましたわよ？」

「ハハハ、ナンノコトダカオレニハサツパリ」

「あらあら」

そんな、彼女と彼、ゲンヤ・ナカジマとの会話があった午後だった。



彼女は正に、風を切るように、そして滑るように坂道を走っていた。といっても彼女が自分で走ってるわけではなく、履いているインラインブレードによるものだ。それでも、普通に走るよりもずっと速くて彼女はそのとき身体で受ける風が大好きだった。

「（ああ、気持ちいい……）」

そんなことを思い、ふわっとした気分になっていたときだった。

「ちよっ！ バカ！ 前！ 前！」

後ろを走る連れの橙色の髪の少女の声で彼女はハツとなる。そして、前の十字路のカーブミラーを見て、連れの少女が何を言ってるのか理解した。

ぶっちゃければ、カーブミラーには移ってるのである。ダンプカーがかなりのスピードで十字路に向かってきてるということが。

「やばっ！」

彼女は慌ててブレーキを掛けるが、間に合わない。尻餅ついてでも止まることを考えた次の瞬間だった。

ガッ！

「え？」

インラインブレードが小さな小石にぶつかってバランスが崩れたのである。インラインブレードは小さな小石でも転ぶことがあるのだ。

そして、その弾みで少女の身体は前に、十字路に放り投げられる。

「（あ……、これ、私……死んじゃう……？）」

当然だが、人間は空中で方向転換などできない。できるとしたら体の向きを変えることぐらいである。

「（私……死んじゃう？ お父さん……ギン姉、お母さん……）」

彼女体が、正に十字路に入ろうとしたとき。

ガシッ！

彼女の襟首を、誰かの手が掴んだ。

「グッ!？」

突然の首が絞まることに、彼女は目を白黒させる。その次の瞬間、ダンプカーが十字路を通り過ぎていった。

「たくっ、あぶねえな。おい、大丈夫か？」

彼女の襟首を掴んだ、事実上の命の恩人はそう聞いてくる。

「え……。あ、はい」

「そうか、ならいい。気をつけろよ。この辺意外と交通量多いんだからな」

「はい……」

「ん？ どうした？」

「え!？ あ、い、いえ！ 何でもありません!!／／／」

「そうか？」

そういうと、彼は彼女の襟首から手を離して歩き出す。

「あ！ あ、あのお！」

「ん？」

「えと、お、おまなえは!？」

「お名前、な？」

彼、赤毛を逆立てた青年は呆れ笑いが混じった顔をし、言った。

「坂本、坂本雄二だ」

「坂本……雄二、さん」

「じゃあな、今度は気をつけろよ」

そう言って、雄二は歩いていった。

「……………」

「はあっはあっ、追いついた！ このバカ！ 怪我したらどうするのよ！」

「……………」

ようやく追いついた、連れの言葉。しかし、彼女には今、その言葉は入ってこなかった。

なぜなら……

「（お父さん、ギン姉。そして、天国のお母さん。私、スバル・ナカジマは今、初恋をしました）」

彼女、スバル・ナカジマは心の中で、呟いていたからだ……

☆

「これより、異端審問会を開く！」

「「「「了解ッ！」「」「」」」」

四時間目が終わった2年Fクラスの教室。そこで彼等はクラス代表である坂本雄二を筆頭に、異端審問会を開くところだった。

「雄二！ 一体これは何のつもりさ！」

異端審問会のターゲット。吉井明久はこの状況に反論した。

「俺は、俺はこのときを待ってたんだ！ お前を守る盾、高町と姫路とテストタロッサがいらない今この時を待ってたんだ！！」

「き、汚いぞ雄二！」

「黙れ！ そして前から言おうと思ってた！ 俺はなあ、お前の幸せが大つつっ嫌いなんだよ！！！！ m9（A'）」

「いちいち絵文字まで使うなよ！ その絵文字書くのに作者のヤツ十分も掛かったんだぞ！」

「どうでもいいこと言ってるじゃねえっ！ とにかく、このチャンスは無駄にしねえ！」

「み、みんな！ コイツ、雄二は霧島さんと付き合ってるぞ！」

「はっ！ 甘いな明久！ こいつ等は学園の新聞にまで載ったお前を肅清するためのやつ等だ！ 俺と翔子の微妙且つ曖昧な関係より、お前の方が優先なんだよ！ 少なくとも、俺がお前みたいに二股でもしない限りなあ！」

もはや雄二は勝ち誇った顔である。まあ、いままでやろうにもやれなかった分溜まっていたのだろう。

「さあ、あの世への旅立ちだ！ 明ひs「あ、あのお！」……なんだ？」

さあこれからだという時に、突然別の声が教室に響く。

「ん？ お前は確か、昨日の……？」

「は、はい！ 覚えててくれたんですね！」

「ん？ ああ、まあな」

雄二の返事に、彼女、スバルは心の中でガッツポーズをする。

「あ、あの！」

「ん？」

「えっと、その……す……」

「す？」

「す……好きです！
付き合ってください！」

「……は？」

.....さあ、みなさんご一緒に。

「はああああああ——！！？」

! ? ! ? ! ? ! ? ! ?

熱愛と裁判と霧島フィンガー

〈特別問題〉

美波とクロノが明久に暴行を与えています。貴方は美波とクロノをどうお仕置きしますか。具体的に書きなさい。

高町なのは、姫路瑞希、フェイト・T・ハラオウンの答え

「当然しつっつっつかりOHANASHIをします。具体的には：書ききれないのでですけどどうすればいいんでしょう？ というより載せられますか？ この答え。」

教師のコメント

とりあえず、島田さんとハラオウン君は今すぐ全力で逃げてください。内容を三人に代わって言いたいところですが、検閲削除は確実なので控えさせていただきます。



「それではこれより、2年Fクラス坂本雄二に対する法廷を開廷します」

そんな黒覆面を被った須川君の言葉が、裁判所とその姿を変えたFクラスの教室に響く。

「検察側。準備完了しています」

「第二検察側、もとより」

「第三検察側、証拠を押さえてあります」

「よろしい。では冒頭論弁を『異議ありっ!!』……なんだね、被告人」

弁護士のいない素晴らしい法廷システムの前に、異議があがる。全く、話の腰を折るなよ。

僕が被告人席を見ると、そこには青ざめた顔をしたゴリラ……もとい、この法廷の被告人である坂本雄二がいた。

「なんだも何もねえだろっ!?　むしろ異議がないところを探す方が難しいだろっ!」

「……なるほど。では、気を取り直して冒頭論弁を『い、異議ありっ!!』……今度は何だね、被告人」

「今度も何もねえっ!　だからこの裁判は無効だっ!」

「全く。罪の意識がない犯罪者はこれだから困る」

全く持ってその通りだ。

「おいコラッ!　罪も何もねえだろっ!」

「……まったく。では、お前が犯した罪を自覚させてやろう。検察側、冒頭論弁を」

「はっ!　えー、被告坂本雄二は、我等Fクラスの生徒である。被告の罪は重大な背信行為である。本日未明、被告が本校の一年生であるスバル・ナカジマに告白され、我等異端審問会のメンバーが被告を確保。今に至る。これに対して、我等は更なる調査を進め、二人の関係を……」

「御託はいい。結論だけを述べたまえ」

「女の子に告白されて羨ましいでありますっ！」

「うむ！ 実に分かりやすい報告だ」

「ふ、ふざけんなあああああっ！ 要するにただの逆恨みじゃねえか！」

全く。これだけ明確な罪状を並べられてまだ言うか。ホントに全く。

「さて、これ以上審議をする必要はない。さっそく判決を『ま、待ってください！』……なんだね？」

判決を言おうかというとき、待ったがかかる。な、なんだ？

「あ、あの！ 違うんです！ わ、わたし坂本先輩にお礼が言いたくて！」

「お礼？ その割には随分とハッキリした告白だと思ったが……？」

待ったを掛けた娘、スバル・ナカジマちゃんに須川君が問い詰める。確かに、あれは誰が見ても告白にしか見えない。

「だ、だからその……あれは！ お礼を言おうとしたらつい本音が出て……」

「判決、有罪！ 死刑！」

『』『』『異議なし！』『』『』『』

とんでもないカミングアウトにあっさり判決が決まった。尋問もサイコロツクの解除も、見抜くも使われない。こんな法廷初めて見た。

「ああっ！ いえ、そうじゃなくて！ そう！ 坂本先輩……すご

く大きかったです!」

「拷問してから死刑!!」

『『『『異議なし!』』』』』

さつきよりもすごいカミングアウトに僕はもう驚くしかできない。
というか、クラスの覆面の一人が鼻血を出して倒れてる。おそらく
ムツツリーニだろう。

「ち、違っ! 大きいって言うのは手なんです! 私を抱きとめて
くれて、齒をキラッって光らせて「大丈夫かい、マイハニー?」っ
て聞いてくれて!」

「市中引き回しをした後、学園の屋上から……否! スカ○ツリー
の現最高度から紐なしバンジーだっ!!」

「会長! いっそのことアルカンシェルを喰らわせてみては!」

「いや、いっそのこと男しかない管理世界に永久追放しろ!」

「それならいまから虚数空間に叩き込め!」

あーでもない、こーでもないといった具合に審議は続く。……ん?

「こら待て雄二! どさくさに紛れて逃げるなっ!」

あの野郎! 騒ぎに紛れて逃げるつもりか!? おのれ、そうは
させるか!

「むっ!? 被告人が逃げたぞ!!」

「追えっ! 逃がすな!」

僕も彼等に行く。普段は笑って終わらせるけど、今回は霧島さん
のことを差し置いて僕だけを断罪しようとした罰だ。まったく。チ

ケットを破らずに、霧島さんと一緒に行ってればこうはならなかったはずなのに。

『ぐああああああああつ！ は、離せ翔子お！！』

『……雄二。前に浮気はいけないと教えたばかり』

あ、どうやら霧島さんに捕まって戻ってきたようだ。

「お、おい翔子！ なんだその妖しく光る右手は！？」

なんとなく覗いてみると、そこには雄二が言ったとおり、右手を妖しく光らせた霧島さんがいた。な、なんだこのパワーは！？

彼女のその手が妖しく光る。雄二を殺せと轟き叫ぶ、呪殺っ！

霧島フィンガアアアア！！

なぜかそんなフレーズが頭に浮かんだ。

「待ってください！」

と、技が繰り出される前にスバルちゃんが雄二を庇うように前に出る。

「……そこをどいて」

「ど、どきません！ だって、坂本先輩はなににも悪くありません！ 悪いのは、告白した私です！」

「……………あなたは、なぜ雄二に告白したの？」

「それは……とても格好よくて、とても大きいからです！」

「……大きい？」

「はいっ！ とても、中身が大きいです！ まるで、お父さんみた

いで！」

「……………」

霧島さんはそう言って黙る。そして、僅かな間を取って、

「……貴女は雄二のよさをよく分かってる。雄二は貴女が言ったとおりとても大きな中身を持ってる。私もそこを好きになった。努力することも、当然、見た目も。雄二異常の人はこの世にいない」

「え、は、はい。ありがとうございます」

「……だけど、雄二は渡さない。雄二は私のもの」

「私だって負けません！」

「……貴女はいい人」

「え？」

「……なんとなくそう分かる。これからは私のことを翔子って呼んでいい」

「あ、じゃあ、私のこともスバルで良いです！ 翔子さん！」

「……ありがとうスバル」

「って、おいこら！ 何俺を無視して話を進めてんだ！」

そんな雄二の言葉なんて気にしないくらい綺麗な女の友情がそこにはあった。

「あ、じゃあわたしこれで戻ります！ 失礼します！」

そう言ってスバルちゃんは顔を赤くして一年生の教室に戻っていった。

「……それにしても、意外だな。お前ならまたおかしいことを言って、その果てに異常なことをすると思ったんだが」

「……私は必死に努力する人は好き。例えばそれが雄二のことであっ

ても」

「ハッ、そうかい」

「……そう。だから」

「だから？」

「……特別に一撃で仕留めてあげる」

メキメキメキメキメキイツ！

「ぎゃあああああああつ！！　り、理不尽だあ！」

きしみ始める雄二の頭骸骨。そして――――

パキユツ！！

そんな音が、二年生の廊下に響き渡った。ちなみに、この出来事で雄二は異端審問会のブラックリストに名がのることになったという。

水着！ プール掃除なの！

〈特別問題〉

明久に女装させるといえば、何に女装させますか？ 詳しく書きなさい。

姫路瑞希の答え

『えっと、ひとまずこのスカートから……あ、大丈夫ですよ？ フリーサイズですし。あと、この服とこの服……それと……。あ、そうです！ 下着も着てもらわないと！ あう、でも私のブラじゃ明久君とサイズがあわないです。どうでしょう……？』

フェイト・T・ハラオウンの答え

『えっと、とりあえず私の服って黒が多いからたぶん色的には明久に合うはずだね。インナーはとりあえず少し明るめにして……。あ、どうしよう。私のブラ、明久にあうかなあ……？』

教師のコメント

とりあえず下着だけは勘弁してあげてください。

八神はやての答え

『と・り・あ・え・ず♪衣装合わせせなあかなあ。というわけで

早速アキ君に私の家の衣装室で衣装合わせを……クヒヒ♪』

教師のコメント

とりあえず彼の人権を尊重した衣装を推奨します。

夜、ハラオウン邸。

「ふむ……。この予算ならなんとか可能だな。あとは無駄使いさえなんとかできれば……」

ハラオウン家長男。クロノ・ハラオウンは自室の机で生徒会関連の書類と格闘していた。ちなみに現在の時刻はもうすぐ夜の12時。だというのにここまでやるのは彼の根が真面目である証拠だろう。

「よし。これで大丈夫か。後は他の委員会に通達して……ん？」

と、なんとなく机の一角に目をやると、一枚の書類があった。どうやら見逃していたらしい。

「これは……水泳部？」

手に取った書類が、水泳部の意見用紙であることに気づく。内容はと言うと……

「プールが汚いから掃除してくれ、か……。ふむ……」

書類を片手にしばし考える。確かにそろそろ水泳部はプールで活動してもいい頃合いだ。それならある程度、それこそぐらいはプールは掃除した方がいい。

「とはいえ、時間とかを考えるとあまり余裕は無いな……」

一瞬、掃除用具だけ渡して水泳部にやらせようと思ったが、そもそも水泳は学校の授業でも使う。そうになると、全てを水泳部に任せるのは少々気が引けた。

「ふむ……。まてよ……。あれなら大丈夫か？」

一つあることを思いつき、それが一番と考え、クロノはこの件を終わらせた。

☆

「プ、プールの清掃……!？」

その日の昼休み。僕は廊下でクロノ会長に呼び止められ、話を聞いて上の台詞をいった。

「そうだ。今度の日曜日だ」

「えゝ、そんなあ……」

「文句を言うな。これも観察処分者の仕事だ」

観察処分者の仕事。そう言われるとなかなか断れない。くそう、今度の日曜はメトロイドをクリアしようと思ったのに。今度こそクイーンを倒すつもりだったのに。なかなか倒せないんだようなあ、その前のメトロイドだって大変なのに。ミサイルを撃とうと思ったら他のやつに邪魔されるし、やっぱりアクセルチャージャーをゲットすればよかった。だけどいまさら取りに戻れないし……やっぱセンスムーブをうまく使って……

「おい。聞いているのか？ 吉井」

「あ、はい。やっぱりアクセルチャージャーは大事ですよね？」

「何がどうしてそうなった!？」

???

クロノ会長は何を言ってるんだろう？

『メトロイド Other M』 好評発売中 by 作者

「と、とにかく！ 今度に日曜にやるんだぞ！ 人を使っても構わんから！ あと、別に褒美というわけではないが、掃除をするならプールを自由に使ってもいい。先生には話を通してある。いいな」

そう言ってクロノ会長は歩いていった。

☆

「なるほどな。プールの清掃か……」

教室に戻って、雄二にさっきのことを話した。クロノ会長は人を使っていていいって言ってたし、雄二なら問題ないはずだ。

「今なにか不穏当なことを考えなかったか？」

「気のせい気のせい」

「そうか？　ならいいが」

危ない危ない。コイツ勘がいいからな。

「なにやら面白そうじゃの。ワシも参加させてくれんかの？」

「秀吉も？　もちろん良いよ」

秀吉も参加することに決まった。うーん、でも秀吉みたいな娘に重労働を強いるのはちょっと気が進まないなあ。

「なにか変なことを言われた気が下のじゃが……気のせいのお？」

「あの、雄二さん！　私もいいですか？」

と、おにぎり（LLサイズ。ほとんど人の顔と同サイズ。中身は

おかかところぶが一緒に入ってるらしい）を食べてたスバルちゃんが名乗り出る。

「ん？ 良いのか？」

「はい！ 体力ありますから！」

「そうか。なら構わんが」

「あ、スバルが参加するなら私も参加します。監視が必要ですから」

そういうのはスバルちゃんの幼馴染のティアナ・ランスターさん。なぜかピシツと感じがあってちゃん付けできない。

「ちょ、ティア！ 監視ってどういうこと！？」

「そのまんまよ」

そう言うティアナさんはお弁当（普通のサイズ）を食べ始めた。

「……雄二。私も参加する」

「ああ、分かってる」

霧島さんも参加決定。

「あの、私も良いですか？ 明久君」

「え？ いいの瑞希ちゃん？ 結構大変だと思うけど」

「そうでもないだろ？ 水撒いて、洗剤撒いてブラシでこするだけなんだから」

「そっか、そうだよな。なら、お願いしても良いかな？」

「はい。任せてください」

「明久。当然私も参加するよ？」

「もちろんだよ、フェイト」

瑞希ちゃん・フェイトの二人も参戦決定。

「吉井。ウチも行くわ」

「え、島田さんも？」

「そうよ、悪い？」

「ううん。そんなことないよ。お願いするね？」

島田さんも決定。

「なのははどうする？」

「私はごめん。その日部活があるから」

「そっか。わかった」

さて、後は……

「ムツツリーニと八神さんって、アレ？」

二人がいない。どこに行ったんだろう？　って、あれは……

『ムツツリーニ君、これならどうや！？』

『……一年で40%、二年で70%、三年で99%』

『何でそんなことまで知っとるんや！？　これはもう専門家でも知つとるかどうかやで！？』

『……この程度、一般教養』

『くっ、あかん。もう知識で勝てるがせえへん』

『……保健体育の学年1位は譲る気はない』

『くっ、まだや！』

『……ふっ、何でも来い』

『うりゃっ！（ちらっ）』

『……胸チラとは卑怯な！（ブシャアアアアアアー……ッ！）』

……………うん。あの二人は後で言おう。

「んじゃ、日曜に学園でな。水着忘れんなよ？」

狂気と鼻血と血のプール（前書き）

さて、本文の前に少々お伝えしたいことが。

最近問題募集してくれる方がいらっしやいます。とても嬉しいですが、問題が次回載せ忘れることがあると思いますので、次々回から問題募集は先着一名とさせていただきます。お手数、ご迷惑おかけしますが、なにとぞよろしくお願いします。

狂気と鼻血と血のプール

＜特別問題＞ 問題提供 Dr. クロ様

明久に『レイジングハート』等の武器を与えるなら、どんな武器がいいか答えなさい。

姫路瑞希、高町なのはの答え

『明久君（アキ君）は昔、剣術をやっていたので剣型のデバイスがいいと思います。なのでレヴァンティンをお勧めします』

教師のコメント

なるほど。昔やっていたことを基準にするのも良いかもしれませんね。

吉井明久の答え

『昔剣術をやっていたので、（現在もたまにやりますが）剣型を選びます。なのでレヴァンティンです』

教師のコメント

なるほど。やはりお二人と同じ理由のようですね。

☆

本日、大雨及び強風なり。

……などということも無く。無事に雲ひとつない快晴となった。そんな快晴の空の下、文月学園にその男女グループは集まっていた。

「おはよう、みんな」

そんな風に気楽に挨拶をするのは吉井明久だ。今日も今日とてその癒しだかジゴロだか見抜きにくい笑顔を振りまいている。

「おはようございます明久君。今日は晴れてよかったですね」

「おはよう明久。ホントに晴れてよかった」

そんな彼に挨拶をするのはピンクの髪に蒼い瞳。たわわに実った二つの果実を持つのは姫路瑞希である。今日も今日とてその笑顔は一つの癒しとなってそこにある。

もう一人は金髪に紅い瞳。瑞希同様のたわわに実った二つの果実をもつ少女はフェイト・T・ハラオウン。街角でやれば百人中二百人が振り向く笑顔がそこにある。

「全くじゃ。こういう日は晴れるのが一番じゃ」

「……（コクコク）」

そう言うのは「性別？ そんな幻想ぶち壊す！」と言いたくなる
美少女、木下秀吉である。

「なにやら不穏当な声が聞こえたような気がしたのじゃが……」
「……そんな事実はない」

そういつて応えるのはこの世のエロを知り、全てのエロを司る男、
土屋康太ことムツツリーニである。

「せやせや。秀ちゃんも気にしたらあかんて」

そう言うのは、ショートにヘアピンをした少女、「豆狸こと八
神はやてである。」

「作者あ！ ネタが切れてきたからってひとが気にすること言うな
やあっ！！」

「あの、何言ってるんですか八神先輩……？」

そう言つて素直に心配するのは色気や女ツ気とは程遠い少女、ス
バル・ナカジマである。

「うう……。ティア、作者さんが冷たい」

「事実でしょ？ アンタがアクセサリーとかついたり制服以外でス
カート履いてるところとか見たこと無いわよ私。大体アンタ、原作で
も私の胸揉んだりしてるんだから」

などとメタ発言をするのは、恋愛になると途端に押しが弱くなり
そんな雰囲気をもったツンデレの少女、ティアナ・ランスターであ
る。

「誰がツンデレよ！ 誰が！」

「あの、どうしたんですかランスターさん……」

「って、あれ？ エリオ君？」

と、明久はそこで一人の少年に気づく。本来なら、高校であるここにいるはずはないのだ。

「あ、はい。今回僕も手伝うことにしました！」

「私もいます」

「葉月もいるですっ」

そう言って自己主張するふたり、キャロ・ル・ルシエと島田葉月もまた、エリオ同様本来ならこの場にいるはずが無かった。

「エリオとキャロは私が呼んだんだ。その、大丈夫かな？」

「ううん。そんなことないよ」

そんなフェイトの間に、明久は特に気にすることも無く応えた。

「葉月もウチが家を出るときに見つかっちゃって。連れてけって聞かなくて……」

そう言うのはポニーテールがトレードマークの少女、島田美波である。最近影が順調に薄くなりつつあるが気にせず行くとうとう。

「それはそうと、雄二と霧島さんは？ 逢引？ 逃避行？」

「なぜお主はそういう考えが出るのじゃ？」

「そ、そんなわけありません！ だって、翔子さん学校じゃそんなことしないって……」

「学校じゃって……。じゃあ学校以外じゃするわけ？」

[!?!?!?!?!?!?!?]

そんなティアナの言葉にスバルは石になる。本当にビシツという音まで聞こえてきそうである。

「おいしい。そろってるな？ 鍵もって来たぞ」

「……おまたせ」

「しょ、翔子さん！ 私、信じてますからね！」

⋮
?

「何言ってんだお前？　まあ、いい。とりあえず着替えてプールサイドに集合だ」

そんなゴリラ……もとい、坂本雄二の言葉にそれぞれが頷き、男
女に分かれる。……が

「コラコラダメだよ？　葉月ちゃんとキヤロちゃんとエリオ君と秀吉は向こう」

「えへへ、冗談です」

「えへへ、ごめんなさい」

「あの、僕は男子更衣室でいいんですけど……」

「ワシも男子更衣室で合つとるぞい……」

「なにやつてるの葉月、キャロちゃん、エリオ君、木下。早く行くわよ？」

そんな、意外と世話焼きな美波の言葉が約二名に刺さる。

「し、島田さん！ 僕は男子更衣室でいいんです！」

「おぬしまで！ いやじゃ！
ワシは男子更衣室で合っておるのじや！！」

「何言ってるのよ。木下はウチ等と着替えても何も問題なんてない

でしょ？ エリオ君だって別にウチ等は気にしないわよ」

ミナミのコウゲキ！

カイシンのイチゲキ！

ヒデヨシとエリオのココロに９９９９のダメージ！

ヒデヨシはタオレタ

エリオはタオレタ

パーティはゼンメツした！

「……………orz」

「……とりあえずお前等二人は別のところで着替えろ」

雄二の言葉がせめても救いだった。

☆

「イッチニ、サンシ……」

プールサイドで僕は屈伸したり背伸びしたりして準備運動をする。

水泳をする前、いや、運動をする前はしっかり準備運動をしておかないと。

「それにしても、がっしりしてますね吉井さんの身体って」

一緒に準備運動をしているエリオ君がそんなことを言ってくる。まあ、確かに僕の身体って男子高校生の一般平均よりしっかりしてるけどね。

「僕もそういうしっかりした身体にあこがれます」

「そう言うものかな？ 実感沸かないけど」

「もちろんです！ 僕もいつかきつと吉井さんみたいにがっしりとした、しっかりした身体になりたいです！ そしていつか、大事な人を守ってあげたいです！」

「……」

なんとなく何だけど、エリオ君の言葉に違和感を覚える。というか、もしかしてエリオ君……

「あのさ、エリオく『ホアアアアアアアアアアアアアアッ！』な、なんだあ！？」

今の声、女子更衣室から！？ なんだ、なにがあったんだ！？

『Worauf für ein Standard hat
Gott jene unterschieden, die haben,
und jene, die nicht haben!
Was war für mich ungenugend!
（神様は何を基準に、持つ人と持たざる人を区別しているの！？
ウチに何が足りなっているのよ！）』

な、なんだろう？ 今の声は島田さん？　　というか今の英語じゃなかったけど、ひょっとしてドイツ語？　　なんでまた？

「あの、なんだったんでしょ？　　今の」

「さあ……」

「そういや、エリオ。お前随分早く来たな？　　ていうか秀吉はどうしたんだ？」

「あ、はい！　　秀吉さんは水着が普通のとはちよつと勝手が違うみたいだから遅くなるって言ってました」

「そうか。……ん、早速誰か来たな」

「ムツツリーニ、準備はいい？」

「……安心しろ明久。命なんて追い求める理想郷の前では安いものだ。特に俺のは。だが、あえて言う。俺は……俺は死なない！」

ムツツリーニ。それはあからさまな死亡フラグだ。

「「エリオクーーン」」

さて、やってきたのは葉月ちゃんとキャロちゃん。二人とも紺色のスクール水着だ。

「……（ブシャアアアアッ！）」

ドサリッ！

……うん。なんとなく想像は付いてたよ。というか、コイツ。小学生もストライクゾーンなのか。

「……明久（ドクドクドク……）」

「何？ ムツツリーニ」

「……懲役は何年ぐらいだ？」

「二年ぐらいで済みそうだね」

「……そうか（ガクリ）」

「……ムツツリーニ？」

「………」

返事がない。ただの屍のようだ。

「ほえ？ ムツツリのお兄ちゃんどうしたですか？ バカなお兄ちゃん」

「ん？ そつとしておいて上げてね？ キャロちゃんも」

「はい。分かりました」

さて、次は………ん？

「うう、敵よ。皆敵よ。あんな超弩級戦艦みたいなもの皆持つて……。うう、神を殺しにいきたい……」

何だ。一体彼女に何があったというんだ。

目の前にいるのは全てに絶望した顔の島田さんがいた。なんというか、背負ってる雰囲気、自殺志願者のソレみたいだ。

「あの、島田さん？」

「なによ！？ アンタになんか分からないわよ！ 胸の抵抗が無く、あっさりビキニを着れるウチの気持ちなんて……！」

「そ、そんなことないよ。似合ってるよ、島田さん」

「え………本当？」

お、なんとか立ち直ったみたいだ。まあ、何が理由かはよく分か

らないけど。

「うん。似合ってるよ。胸も、バストも、ボインもほっそりして見て足親指がああああ!!」

痛い! 足の親指が踏み抜かれたように痛い!

「たくっ! アンタは! ホントにアンタは!」

「おい、ソレはそうと、まただれか来るぞ」

くそう、雄二め! 少しはフォローしろ!

「まったく。で、今度は誰が……おお」

思わず声を出してしまう。出てきたのは黒寄りの紫のビキニを着た霧島さんだった。これはまた。水着に黒髪がよく似合ってる。

「……えい(ブスリ)」

「ぎゃあああああ! 目が、目があっ!!」

そこには、のた打ち回るゴリラがいた。

「すごい。坂本の目を潰す仕草まで綺麗なんて……」

「うん。これなら雄二の目がつぶれても文句ないね」

「そりゃあお前等に実害はないからなあ!!」

「そんなことより霧島さん。水着に合ってるね?」

「……ありがとう」

「ホラ。坂本も霧島さんに言うことがあるでしょう?」

「翔子……」

「……うん」

「ティッシュをくれ。涙が止まらん」

「……水着の感想を言えよ」

「視界を奪われて何を言えと!？」

全く。乙女心が分からない奴はこれだから。

「あーっ！ 翔子さんなにやってるんですか！」

と、更衣室から出てきたのはスバルちゃんとティアナさん。スバルちゃんは青と白の二色をつかったスポーツ風のビキニ。ティアナさんは髪と同じ橙色のビキニだ。

「まったくもう、これじゃあ私の水着が見てもらえないじゃないですか……」

「……ごめんスバル。ついうつかり。てへ？」

雄二を気遣うスバルちゃんと少々お茶目な仕草をする霧島さん。まったく。雄二もこんないい子に囲まれてるのになんで素直にならないかな？

『なるほど。スバルに近づくうじ虫はあいつか……』

『お父さん。もう帰りましょうよ』

『お父さん？ 違うな。俺はお父さんじゃない』

『じゃあ、何なの？』

『俺は、ゲンヤ13だ』

『……天国のお母さん。今すぐお父さんをそちらに送ります。まあ、この人が行くのは地獄かもしれないませんが……』

『おいコラギンガ！ 何をするう!？』

何か聞こえたような……。気のせいかな？

「お、皆揃っとるなあ」

と、今度は八神さんが出てくる。八神さんは……なんだとお！？

「ほれほれ。ムツツリーニ君。どや？」

「八神はやて。それがどうした（ドバドバドバ）」

八神さんが着てる水着。それは、なんともはや絶滅したと思っていた、貝殻の水着だった！ な、なんという……。というか、どこで売ってるのそんなの？

「あはは。ムツツリーニ君は素直やなあ」

「……何を証拠に（ブシャアアアアアア！）」

証拠ならありすぎる。

「あ、ソレはそうとアキ君」

「な、何？」

思わず視線を逸らしかける。くっ！ なんて破壊力だ！

「氣いつけてな」

「へ？」

「ほれ、ムツツリーニ君がもうあんなになっとる」

「？ ……む、ムツツリーニ！？」

そこにいるのは、鼻血どころか生命力すら出し切ったと思われる、

真っ白になったムツツリーニがいた。ば、バカな！？ この数行で一体何があったんだ！？ 鼻血だけじゃなく生命力まで……！？ 一体なんだ！？ メトロイドの襲撃でも来たのか！？

「すいませーん！ 背中の紐を結ぶのに、時間掛っちゃって！」
「ごめん！ なかなか背中の紐が結べなくて！」

そこには、それぞれたわわに実った二匹のメトロイドをもつ生物兵器（いい意味で）がいた。あれ？ なんだろう？ なんだか気持ち良いぞ？ なんていうか、そう！ 魂が天に昇る気持ちで……

「あ、明久くん！ どうしたんですか！？」
「明久！ しっかりして！ しっかりしてよ！」

そんな僕に駆け寄り、生物兵器を押し付ける二人。グフウッ！ ば、バカな……心のスカウターが壊れただど！？

「明久くん！ しっかりしてくだ……」
「明久！ 目を開け……」

二人の声が聞こえなくなってくる。ああ……

刻が見える……………。

総員、銭湯態勢！　なの！　く前編く（前書き）

タイトルは誤字ではありません。あしからず。

総員、銭湯態勢！　なの！　〈前編〉

特別問題　問題提供　アルベルナ様

あなたが一番欲しいものを書きなさい。

姫路瑞希、フェイト・T・ハラオウンの答え

『吉井明久の《ズギューン！》』

教師のコメント

検閲に引かなかったため、削除いたしましたのであしからず。

坂本雄二の答え

『平穏』

教師のコメント

用紙が涙でふやけてるのが心苦しいです。

土屋康太の答え

『エッチな本（訂正）　……大人向けの写真集』

教師のコメント

取り消し線の意味があるのでしょいか？

☆★

天国と地獄が一緒に来たあのイベントから約一時間。僕はようやく立ち上がるまでに回復した。ただ、その間瑞希ちゃんとフェイトに膝枕（二人の片足ずつというやり方で）されてたのはなんとも言えない心地だった。ちなみに、膝枕の前は二人がプールサイドに寝転がって『私の上に寝て』と言ったときは残った生命力でなんとか自重させた。

もう一つちなみに。瑞希ちゃんとフェイトは今回のことで、瑞希ちゃんはパレオを腰に巻いて、フェイトは上着を着て何とかした。まあ実際、起きる度に見て、倒れてを繰り返すよりはいい。八神さんも、最初は渋ってたけどフェイトに睨まれしぶしぶ普通の白のビキニに着替えた。

「ふう、っていうかあの二人は何してるの？」

起き上がり、プールの方を見ると……

「負けませんからね！」

「はっ！ 女が男に勝てると思うなよ！？」

ズババババババツ！

二人、雄二とスバルちゃんが競泳していた。しかも結構速い。

「ああ、あの二人最初は普通に泳いでたんだけど、気がついたらどっちが速いかってことになってああなったんだ」

フェイトの説明を聞きながら、僕はなるほどと呟き、頷いた。

バンツ！

「翔子、どっちだ！？」

「翔子さん、どっちですか！？」

「……ドロー」

「ちつきしよう、またか！ スバル！ 今度はバタフライで勝負だ！」

「え！？ エビフライで勝負ですか？！」

「……スバル。エビじゃなくてバタ」

「すごいねスバルちゃん。雄二と渡り合うなんて」

「スバル、家の都合で今は部活はやってないけど、それでもそこらの男子より体力と力があるんです」

「へえ……って、ティアナさん？」

振り向くと、そこにいたのはティアナさんだった。

「大丈夫ですか？ 吉井先輩」

「え？ ああ、うん。もう大丈夫だよ」

「そうですか……」

「……どうかした？」

「いえ。文月新聞を見て、想像していたのと随分と違ったので」

「ソレを言わないでよ……」

大変だったんだよな。あの新聞のせいで異端審問会から逃げ出すの……。

『あれ？ 代表？』

と、どこからか声がして、振り向くと……

「君は、Aクラスの工藤さん？」

「工藤さん。どうしたの、こんなところに？」

「あれれ？ ハラオウンさんもいるんだ？」

「それにしても、なんでここに？」

「ああ、ボク水泳部だから。練習休みの忘れで、ここまで来ちゃったんだ。で、プールで声が聞こえたから、何かな？ って思ってた」

「なるほど」

確かに、それなら納得だ。

「ちなみに、もう一人来てるよ？」

「え？」

言われて工藤さんが指してる方向を見る。そこには

「お姉さまあああああああ！！ どうして美春に声を掛けてくれないのですかあ！？」

「み、美春う！？ 何でアンタがここにいるのよ！？」

「美春には、お姉さまを害虫から守るための、特別な情報網がありますからあ！」

「ひいいっ！！」

そうして二人は追いかけて始める。やれやれ、プールサイドで走っちゃ危ないってのに……。

「じゃあ、ボクも着替えてくるね？」

「……！（キラン☆）」

「おっと。覗くなら、バレないようにね？」

工藤さんが更衣室に行こうとした瞬間、ムツツリーニにそう言つて更衣室消えた。

「……ふっ、舐めるな（ドポドポドポ……）」

舐める以前の問題だと思う。

「……雄二は見ちゃダメ」

「雄二さんは見ちゃダメです！」

ぶすっ！ ぼぐっ！

「ぎゃあああああ！！ 目と足関節にあってはならない痛みがああ
ああ！！」

「エリオ君も見ちゃダメ！」

「見ちゃダメです！」

「ちよっ！？ ま……！ キャロ！ はづ……フェイトさん助け…

…! ゴボゴボ……」

トプンッ ……しーん

「つて!?! 葉月ちゃん、キャロちゃんだめだよ! エリオ君が死んじゃうよ!?!」

「俺のことも気に掛けろおおお!」

お前はうるさい。

慌てて立ち上がり、エリオ君を助けに行こうとした時だった。まだ完全に回復してないせいか、膝がカクンと崩れる。

「うわわ!?!」

「「きゃあ!」」

そのまま瑞希ちゃんとフェイトを道連れにするかのように倒れる。いたた……。

むにゅっ!

………へ?

そんな柔らかい二つの感触に一瞬思考が麻痺する。今の……なに? 恐る恐る、視点をずらすと……

「そ、そんな……。明久君、こんなところで……／＼／＼」

「そんな明久……。初めてが外で、しかも瑞希と3Pだなんて……

／＼／

そんなことを言って顔を赤らめる二人の胸に、ピッタリとフィットするように僕の手が被さっていた。

「吉井いいいいいいいい！！！！！！」

「……………へ？　ぶげらああ！」

な、なんだ！？　いきなりこの世のものとは思えない衝撃が顔を襲った。そして、その勢いは僕の身体をふっとぼし……

ひゅ~~~~~ん……ドパアンッ！

みごとプールに落下した。

ちなみに、このせいで……

「ああん、ダメエ。明久、そんな目でジロジロ見ないでえ／／／／」
「はうう、そんな、首輪をしろだなんて、明久く、あ、いえすみませんご主人様……／／／／」

そんな二人のトリップした台詞を聞くことは無かった。

「なんというかおぬし等……。なんでプールに来るだけでこんなことになるのじゃ……？」

そんな秀吉の言葉が、プールに虚しく響いて消えた。

☆

「ふう。なんだか色々と疲れたよ……」

「……（コクコク）」

「おぬし等二人は貧血もあるのではないかの？」

プール掃除が何とか終わり、気がついたら既に午後の四時になっていた。

「じゃあねえ。こうなったらひとつ風呂浴びるか」

そんな雄二の提案に、誰もが賛成した。実際なんでもいいから疲れを癒したかったのだ。

☆

道中にある銭湯。そこに明久たちは来ていた。全員で暖簾の付いた入り口を通ると、銭湯特有の雰囲気と番台の挨拶が出迎えた。

「よし、んじゃ会計してるから先に行つてろ。っと、翔子。女子分のタオルとか渡すからこっち来てくれ」

雄二が指示を出し、それぞれが行動を開始するなかで、エリオは物珍しそうに辺りを見てる。そして、ある一点を見つけてホッとした。

「よかった。男女別だ」

そんな当たり前のことでも、知つていた方がホッとする。が、

「楽しみだね、エリオ君」

「楽しみですっ」

「うん、そうだね。キャロも葉月もフェイトさんやお姉さんと楽しんでくると良いよ」

そんな何気ない、だが当然なエリオの言葉に、二人はキョトンとする。

「え？ エリオ君は？」

「え？ いや、僕は男だし」

「エリオ君、ここ読んでみてくださいっ！」

そう言って葉月はソコ、銭湯の注意書きを指す。

「え？ えーと、“女湯への男児入浴は11歳以下までとさせていただきます”。？　これがどうかした……！？」

その瞬間。エリオは二人が何を言ってるのか悟った。できれば悟

りたくは無かったが。

だが、そんなエリオのことなどお構い無しに二人はエリオを指差し……

「「エリオ君10歳♪」」

そう言ってくれた。

「ちよっ!？ ムリだよ！ だってフェイトさんや姫路さんや、スバルさんとかいるんだよ!？」

こう言えばきつと諦める。そう思ったエリオは慌ててそう言うが

……

「え？ 別に私気にしないよ？」

「私も特に気にしないかな？」

「はい。別に大丈夫ですよ？」

「せやせや。背中流してあげよーか？」

「あ、ならボクは頭洗ってあげる！」

上から順にスバル、フェイト、瑞希、はやて、愛子の順である。というより、文月女子メンバーはエリオのことは“男”というより“純な弟”という感じに見てるため、特に抵抗は無かったりする。

「はい、そういうわけだから……」

「はい、というわけで……」

「いやいやいや!? 待って! 僕はやっぱり吉井さんたちと一緒に男湯に行くから! さあ、行きましょう吉井さん!」

そう言って慌ててエリオは男湯に向かって走り出す。ちなみに、一部始終を見ていた他の女性客や男性客に微笑ましく見られていたのは別の話である。

「「……………」」

その間。キャロと葉月は注意書きのもう一点を見て、人知れずある決心をしたことに、誰も気づかなかった。

総員、銭湯態勢！　なの！　（後編）

そこは、天国である。（爆）

突然ですまないが、その場所、銭湯の女湯はその言葉に尽きる。更に言えば女湯に来た女性メンバーは、だれもがスタイルは『素晴らしい』の一言で表せる。決してプロポーションは崩れたりせず、ましてやウエストや二の腕がたるんであるなんてこもない。

パーフェクトである。

そんな中で彼女、島田美波はただ一人戦慄を覚えていた。

服越しからでも分かる回りとのただ一点の差。そこに戦慄を感じていた。

“大丈夫。大丈夫よ。差って言ったってそんなにあるはずが無いし……。きつとそうよ”

彼女はそう自身にいい聞かせ、平静を保つ。そこへ、

「お姉さま、洗いっこしましょ♪」

百合道爆進中の少女、清水美春が背中に抱きついたことでその平静は崩れ始めた。

“これは……！？　いいえ！　まだよ、まだ終わらないわ！”

背中に当たる“ソレ”に対して、強引に否定の言葉を心で呟く。そして、彼女の視線は他の女子勢に向く。

工藤愛子———ま、まだ大丈夫！ 勝負はこれから！
ティアナ・ランスター———やるっ！ だけど、勝負はま
だついちゃいないわ！

八神はやて———な、なんという性能！？

霧島翔子———か、火力が違いすぎるわ！？

スバル・ナカジマ———ええい！ あの娘のは化け物！？

そして、彼女の視線はその二人に向く。

姫路瑞希、フェイト・T・ハラオウン———

「いやあああああああああつ！！」

場所が銭湯だろうと、どこだろうと関係なく、彼女の悲鳴はあが
る。

そんな彼女に、瑞希とフェイトの二人がフォローに入る。

「あの、美波ちゃん？ 大きいのもあまり良いことじゃないですよ
？」

「そうだよ。肩が凝って大変だし」

そんな彼女達、二人の言葉に美波はキッと睨んで返した。

「巨乳は皆そう言うのよ！！ 肩こりぐらい我慢するわっ！！」

「そ、そんなことないですよ！ 私たち全然大きくないですよ！

……あれ？」

そんな美波の言葉に対し、スバルの反論が響く。が、残ったのは……

「……orz」

打ちひしがれた美波だけだった。

「あれ？ あの、島田先輩？」

「……スバル。アンタが言っちゃダメでしょ。それを……」

「え？ なんのこと？」

まるで分かってないスバルに、ティアナは静かに突っ込みを入れた。

人は言う。無知は罪だと。

「……（キヨロキヨロ）」

「ん？ どうしたの、代表」

そんな光景を見ながら、愛子は隣にいる翔子の様子を見て問いただしていた。

「……いない」

「だれが？」

「……キャロと、葉月。髪、洗ってあげようかと思ってた」

「あれれ？ そういえばいないね？ 八神さん。二人どこにいるか知ってる？」

愛子はそれなりに近い場所にいるはやてに声を掛け、二人の所在を聞いてみた。

「え？ いや知らんけど。そういえばおらんね？」

一体どこに？ そう思った直後だった。

ぶしやああああああつ！ ドサリッ！

『『ムツツリイニイイーリーーッ！？』』

何かが噴出する音と、倒れる音。そして吉井明久と坂本雄二の叫びが響いたのは。

☆

さて、ことは時間をほんの少し遡る。

本作きつての純情少年であるエリオ・モンディアルは初めての銭

湯に戸惑いながらも服をロッカーにいれ、男湯にやって来た。

「ああ、入る前に身体を洗ってからだよ？」

「あ、はい」

そんな少年を面倒見ているのは明久である。

「ま、なんだかんだ言っても共同浴場だからな。こういうのはマナーの一つだ」

そう言って背中をタオルで洗っているのは雄二である。簡単にはいえ、ちゃんとそういうことを教える辺り、彼の面倒見の良さが見え隠れしていた。

「……………」

「ん？ どうしたのムツツリーニ」

と、身体を洗いながらムツツリーニは壁の上を『じい』っと見ていることに明久は気がつく。

「…………この壁の向こう。女湯」

「え？」

そう言って、ムツツリーニはスクツと立ち上がる。（腰にタオル巻き済み）

「……エリオ」

「は、はい？」

「……来い。男のロマンを教えてやる」

そう言ってくれた。

「ええ！？ いや、僕はその……」

「ムツツリーニ……。エリオ君にそんなこと巻き込んだらダメだっ
て」

そう言って明久はやりわり止める。むしろ止めない方が問題なのだ。

「……明久。覚えておけ」

「何を？」

「……エリオの歳なら少年法がある」

そう言う問題ではない。

「あの、僕はちょっとそれは……」

「……分からないか。いや、いい。いずれ分かる。男のロマンが」

「いや、だからそういう問題でもないような……」

「そうだよ。エリオ君はまだ早いよ！」

「そうですっ」

「そうそう………え？」

違う声を聞いて、明久たちは振り向く。そこには……

「キャロちゃんに葉月ちゃん！？ 何で男湯に！？」

「キャロ！ 葉月！？」

二人が男湯にいることに明久とエリオは驚く。だが、当の二人は特に気にすることもなく当然のように言った。

「知らないのエリオ君？」

「何を？」

二人を直視できず、エリオはそっぽ向いて聞く。

「男湯にも女の子は11歳以下なら入れるんだよ？」

言ってくれた。

「というわけで背中流してあげるね？」

「葉月は頭を洗ってあげるですっ！」

「いやいやいやいやいや！？」 何言ってるの二人とも！？ はやく女湯に戻って！」

エリオは慌ててそう言うが、当の二人はどこ吹く風である。まあ、このくらいの歳ならまだ裸を見られようが特に気にしないだろう。たぶん。

とにかく戻ってもらおう。エリオがそう思った時だった。

「……感無量」
ドクドクドク……

そこには鼻血を止め処なく出し続けるムツツリーニがいた。

「む、ムツツリーニ！ しっかりするんだ！」

慌てて明久が駆け寄ったときだった。

「ふむ、大丈夫かの？ ムツツリーニ」

彼女がムツツリーニに駆け寄ったのは。

「は？」

「あ？」

明久と雄二はその彼女を見て、目を点にした。

「ひ、秀吉！？　なんで男湯にいるのさ！」

「まったくだぞ！　なんでここにいる！？」

「何を言っておるのじゃ？　ワシは男じゃぞ？　男湯にいるのは当然じゃろう？」

「そんなの戸籍上の問題だよ！」

「全くだぞ！　今すぐ女湯に戻れ！」

「何言っておるのじゃ！　戸籍上でも何でもワシは男じゃぞ！」

「だからコイツにそんなことが通じると思ってるのか！」

雄二は“ソレ”を指差した。

「……（ぶしやああああああっ！）」

ドサリッ！

「「ムツツリイニイイイーーーーッ！？」」

“ソレ”ことムツツリーニは噴水のごとく鼻血を噴出して倒れた。

キャロと葉月。そして秀吉のダブルアタックを喰らってはある意味当然だった。

「さて、ひと風呂浴びて……おわっ！？　な、なんだというのだこ

れは!?!」

そこへ入ってきた鉄人西村は、その惨状を見てただ驚愕するしかなかった。

その後、駆けつけた救急隊員によってムツツリーニは一命を取り留めた。

余談ではあるが、この事が原因でムツツリーニは出入り禁止を喰らったそう。

そして、このことで鉄人西村は――――

「今度の合宿は木下は別風呂にする必要があるな……」

そう呟いていた。

バカと出会いと烈火の将（前書き）

リリカル側からさらに新キャラです。そう、あのメロンを持つお方です。

バカと出会いと烈火の将

【問題】

結婚式を挙げるなら、和式と洋式、どちらでやりますか？理由も書きなさい。

姫路瑞希の答え

洋風

理由 和風も良いですけどやっぱりジューンブライドにもあこがれるから。

教師のコメント

なるほど。確かにそれは外せませんね。

フェイト・T・ハラオウンの答え

和風

理由 ドレスもいいのですが、白無垢のおしとやかな雰囲気捨てがたいので。

教師のコメント

なるほど。雰囲気を選ぶのも立派な判断材料ですね。いいと思います。

☆☆☆☆☆☆☆☆

突然ではあるが、読者諸君は“行き倒れ”というのをご存知だろうか？

漫画などでお腹を空かせて倒れるあれである。とはいえ、現代社会においてそのようなことになるのはそれこそありえないだろう。下手すれば死語である。現に最近はホームレスや就職難で食べることに困る人のために市が炊き出しをるところすらある。だから、下手にバカをやらない限りそのようなことになることはまずないのだ。

「「……………」」

二人、吉井明久と八神はやてはその定説とも言えるそれを根底から覆しかねないものに直面していた。

二人の目の前にはうつ伏せに、大の字で倒れた人物がいた。

そう。下手にバカをやらなければならないはずのそれがあったのである。

☆

さて、そもそも何でそんなことになってるのか？それはというと……………。

この日はそれぞれが事情があった。瑞希とフェイトは家の事情でHRが終わった途端家に帰っていき、美波は今日は両親が遅く、このままだと彼女の妹である葉月が一人になってしまうことから二人と同じくHRが終わった途端帰って行った。雄二はHRが終わった途端に翔子とスバルにどこかに拉致されていた。なのはと秀吉は部活である。ムツツリーニは「用事がある」と言って“女子更衣室”に向かって走っていった。だから、部活に所属しておらず、特に用事がないのは明久とはやてだけなのだ。なに？ 死亡フラグが二つほどあるって？ ……気のせいである。

ともかく、そういうことから二人は一緒に帰ることにしたのだ。そしてはやてが明久をからかい弄り、角を曲がったところで、冒頭に繋がるわけである。

「えーと……」

「あの、アキ君あれ……」

突然のことに二人は呆然としてしまう。数秒経ち、ようやく二人は正気に戻った。

「つて、助けなきゃ！」

「せ、せや！」

明久は慌てて倒れている人物に近寄った。

「もしもし！ 大丈夫ですか！？ 分かります！？ 聞こえていますか！？」

「……………う、あ……………な、なに……………か……………」

「よかった、意識はある。八神さん！ 救急車！」

「う、うん！ わかつとる！」

はやてがポケットから携帯を取り出し、119とプッシュ。コールボタンを押そうとしたとき、

ぐぎゅるるるるるるるるるるるる！

ソレはなった。それを聞いた明久は一瞬「は？」といった顔をする。はやてもコールボタンを押せずにいた。そして、その音の音源である主は今ある全ての力を振り絞り……

「な……なにか、食べ物を……。お、お腹すいた……」

そう言った。



ガツガツバクバクシヤムシヤサクサクズルズルゴクゴクゴツク
ン！

僕の隣の席に座ってる女の人が食べ物食べてる時の音がそれだった。

「ふう〜……」

「落ち着いたか？」

「え？ あ、これは失礼！ 助かりました。もう大丈夫です。おいしかったです」

八神さんの言葉にその女の人は慌てて居住いを正し、答えた。あ、ほっぺにご飯粒付いてる。

「そっか、よかったわあ。そう言ってもらえると作った甲斐があったちゅうもんや」

そう言って八神さんはニツと笑う。いい笑顔だよホント。

「それはそうと、ええと……」

話し掛けようとして、言葉に詰まる。そういえば名前まだ聞いてなかったかも。

「あ、申し送れました。私はシグナムと申します」

「八神はやてです」

「吉井明久です。それはそうとシグナムさん。一つ聞いていいですか？」

「なんででしょうか？」

「あの、なんで行き倒れてたんですか？」

さっきから聞きたかったことはこれだった。今のご時世で行き倒れるなんて早々ない。まして日本で。だから気になったんだ。

「あ、そうそれはその……実は荷物を、それも財布や印鑑とかが入っているものを置き引きされてしまいました……」

「置き引き？」

「はい。たまたま困っていた人がいたので助ける際に荷物を置いたら……」

「なるほど」

確かにそれなら分かる。財布はともかく、カードや通帳、印鑑などが入っていた物を盗まれてたらどうしようもない。再発行なども難しいはずだ。

「そっかあ、それはそうと何でこの町に？」

「はい、実は私今度臨時ですが教鞭を執ることになりました。その学園のあるこの町に来たのです。実は、その場所を書いてある地図なども……」

「盗まれたわけか」

「なるほど、そういうわけ……ん？ あの、シグナムさん今まで何を？」

「私は日本文化に惹かれまして。武者修行として日本各地を回っていたのです」

「武者修行って……」

「時代錯誤やな」

確かに。もしかして置き引きされた荷物に日本刀とかあったりして。まさか、そんなことあるわけ……

「実は大学のときにバイトをしてようやく買った剣も盗まれてしまいました……」

あったよ。めちゃくちゃあったよ。

「そーいやく、学園ってどこのや？ わたしら知っとるかもしれへ

ん」

「え？ ああ。それはかたじけない。学園の名は、文月学園だったかと」

へ？

「あやう、文月学園で私らが通ってるところやで？」

「なんと、そうでしたか。だとすると、これは何かの縁かもしれませんね？」

「確かにそうかもね」

「あ、それはそうと、住む所とかどうすんの？ ぶっちゃけ無一文やろ自分？」

「あ、そういえばそうでした。どうしたものか……」

そう言って悩むシグナムさん。僕もそんなに詳しくはないけど、確かアパートとか借りるにしても最初に敷金とかいうのも払わなきゃいけなかったはずだ。だけど今のシグナムさんは無一文。アパートを借りることもできない。

「ふむ。なら、この家で暮らさへん？」

「え？ いや、しかし……」

「ええってええって。困ったときはお互い様や。それにこの家は一戸建てやからな。しかも二階建て。だから部屋も結構あまっとるし、使ってくれた方が私も嬉しい。それに、自分かてすむところの問題も解決する。一石二鳥や」

なるほど。確かにそう言われればそうかもしれな。今日はじめて八神さんの家に来たけど、二階建ての一軒家だと分かったときは驚いた。ましてや諸事情で一人で住んでるというらしい。うわ、なんだか八神さんに親近感湧いてきたよ。

「……………分かりました。よろしくお願いいたします」

そう言ってシグナムさんは頭を下げる。納得したようだ。

「うん。これからよろしゅうな？ んじゃ、早速部屋に案内しようかな？」

そう言って八神さんはニツと笑ったのだった。

「ああ、そうやアキ君」

「ん、なに？ 八神さん」

「アキ君も一緒に住んでみる？ 今なら二人の美女との同棲生活が楽しめんで？」

「ぶっ！？ ……………いや、遠慮するよ」

「なんや、ソコはもっと「よーし今日からよろしくね？ って、そりゃ同棲やがなー！」って言うところやで？」

「いや、そうじゃないんだよ八神さん」

「ん？ 何なら何や？」

「そんなこと本当にしたら、瑞希ちゃんとフェイトが暴走する。：

……………確実に」

もしそうなったら僕の貞操は同棲スタートして0, 000000
00001秒後に消失してしまう。

「そっか。…………それはいろんな意味でごめんな？」

「ううん。大丈夫」

情けない気持ちになりながらも、僕はそう応えた。

新任教師！ 朝の一幕なの！（前書き）

今回から合宿編です。

新任教師！ 朝の一幕なの！

バカテスト特別問題

瑞希、フェイト、なのはの3人に問題です。吉井明久が美女2人と同棲を始めました。あなたならどうするか、答えなさい。

姫路瑞希、フェイト・T・ハラオウン、高町なのはの答え
『とりあえずどういふことなのか、きつつちりOHANASHI
をしたいと思います。相手にも、明久（君）（アキ君）にも』

教師のコメント

まずは相手の言い分を聞いてあげてください。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

ある日の朝、HR前。2年Fクラスでは白熱していた。

「くらえええー！ー！」

「見えるぞ、私にも敵が見える！」

「後ろを取ったぞ須川！」

「な、なにいつ!?」

「目標を狙い打つ！」

「はっ!　ところがぎつちゅん！」

それぞれが己の機体（ゲーム機）を必死に操る。その顔は必死であり、周りのクラスメイトも白熱していた。

—————そこに、寒色系の髪の少年。土屋康太ことムツリ
ーニが入ってきた。そして、彼の発する一言により、場の雰囲気は
一気に変わった。

「……情報を仕入れてきた」

ピタッ……。

一瞬で止まった全員は、すぐさま、誰に言われるでもなくゲーム
を片付け席（といっても卓袱台だが）を寄せ合い、円を作った。

「な、なに?　なんなの?」

「さあもう。まあいつものことじゃが」

すぐ近くで見ていた二人の少女。ポニーテールの少女、島田美波
と性別という幻想をぶち壊す少女、木下秀吉は誰にともなく言う。

「これより、第666回。緊急異端審問会議を行う。して、土屋特
一級情報官。仕入れた情報というのは?」

そう言って手を組み、俗に言うгентウポーズをするのは先ほど

までニンジン嫌いの偏食パイロットの機体を操っていたFクラス発祥団体、異端審問会ことF F F団団長兼会長である須川亮。

「……今日、新任の臨時教師が来る」

「ほう。で、性別は？」

「……ふっ、愚問を」

「そうであったな」

その新任教師が男だったらこんな異色としかとれない会議など起きていない。そういうことである。

「時に、その新任教師の容姿は？」

「……これ。職員室に網を張った」

そう言っつてムツツリーニはプリントアウトしたての写真を人数分渡す。

『おお、これは……！』

『スイカップ……ハアハア』

『うおおおお！ 踏みたい！ ぐりぐりとヒールで踏みたい！』

『俺は……鞭で叩いてもらいたい！』

それぞれが気持ち悪いことこの上ない、しかしどこか理解できることを言い合う。ちなみに、それを見ていた美波と秀吉はただただ呆れと嫌悪の籠った目で彼等を見ていた。

「諸君、静まりたまえ。土屋特一級情報官、このマドモワゼルが配属される部署は？」

「……それが」

「ま、まさか機動六課か！？」

「だれか。KYな五十嵐一級審問官をぶちのめせ」

『『『『はっ!』』』』

「で、どうなのだ? 土屋特一級情報官」

ぶちのめされる同士を無視し、須田は尋ねる。

「……配属先は……ここ。2年Fクラス」

そんなムツツリーニの言葉に、須川は天を仰ぎ、自身の同士に告げた。

「そうか……。諸君。ついに我々の時代が来た!」

「「「「いいよっしゃああああー!」」」」」

「ファイナル! フユウウジョオオオン!」

彼等は、湧き上がった。湧き上がりすぎて隣のEクラスから苦情が来るほどに。若干一名、勇者王な台詞を言ったものは後に綺麗にボコられたことは、どうでもいい追記である。

☆

「さて、これからHRをはじめ。その前に伝えておくことがある。

おとといの帰りのHRでも話したように、女子の保健体育の先生である冴葉先生が産休と育児休暇をとることになった。よって、臨時の先生を本校は雇い、先生の担当するお前等Fクラスの副担を兼任することとなった。さ、自己紹介をお願いします」

そう言って鉄人西村の言葉に「はい」と答え、その新任の非常勤講師は前に出た。

「たった今西村先生からご紹介いただいたシグナムです。担当教科は女子の体育、及び保健。若輩者ですがよろしくお願いします」
「あの！ 先生質問があります！」

お辞儀をするシグナムに対し、早速一人の生徒が挙手する。

「いや、質問は放課後になったらするように」

「いや、西村先生。私は大丈夫ですが……」

「いえ。シグナム先生はこいつ等の酷さを知らないから言えるのです」

「は？」

鉄人西村の言葉に、シグナムは頭に疑問符を浮かべる。そこに、何人かの生徒が抗議の声を上げた。

「ひどいじゃないか鉄人！ そんなの横暴だ！」（本日の持ち物。

エロ本×3、ラブ〇ラス）

「そうだ！ そんなの横暴だ！」（本日の持ち物。エロDVD×5、とらいあ〇ぐるハート3）

「まったくだ！ 横暴教師め！ 食券（彼にとって誤字にあらず）乱用だ！」（本日の持ち物。エロゲーの販促特典×12、ダッ〇ワイフ）

「どの面下げてそんなことを言うか」

そんな彼等に鉄人西村は呆れ顔でため息をついた。

「さて、HRをはじめろぞ。む？ 吉井と姫路と高町は遅刻か？」

「「「すいません遅れました！」「」」

そう言っ教室の扉を開け、教室に入ってきたのは吉井明久、姫路瑞希、高町なのはの三人である。

走ってきたためか、いい感じに着衣が乱れ、息が荒い。

普通なら走ってきたからと考えが付くが、そこはそれ、Fクラスである。

……結果。

『『『『吉井を殺せええええー！！！！！』』』』』

全員が叫び、鈍器を持って明久に襲い掛かった。その後、校内マラソンが起き、そのせいで魔王が目覚めたりしたのだが、それはまた別のOHANASHI。

派閥と恋文とビニール袋

文月新聞

『2年Fクラスに非常勤講師を副担任に配属』

昨日、二学年最底辺クラスであるFクラスに産休をとった女子体育の先生に代わりに、非常勤講師が配属された。その人物シグナム女史に対して、Fクラスではその日はフィーバー状態であったという。これに対して、当本人のシグナム女史は、

「よく分かりませんが、授業に取り組んでくれるのであれば良いと思います」

とのことである。悲しくはFクラスの、いや、FFF団こと異端審問会を知らないからか。

『この煽りを受け、新たな派閥が展開』

シグナム女史に対しての派閥。要するにファンクラブがもうあるという情報も我々は掴んでいる。意外とレベルが高い女子が多いこの学園ではあるが、FFF団の存在、煽り故に、派閥どおしの争いも絶えない。この新たな派閥が、これからどういう動きを見えるのか、考えさせられ、悩まされるところである。

※巨大勢力一覧

・異端審問会（FFF団）（対象女子はそのときの気分などでランダム）

・スターズ魔王国（高町なのは）

・桃色大天使の使いの集い（姫路瑞希）

- ・女神近衛騎士団（フェイト・T・ハラオウン）
- ・帝国過激団 百合組（島田美波）
- ・シグナム姐さんに踏まれ隊^{シグナム}

提供

いつもあなたの真後ろに ムツツリ商会

☆☆☆☆☆☆☆☆

ドサドサドサ！

「……まただね」

靴箱から溢れ出した大量の便箋を見て、フェイトは呟きため息をついた。軽く二十はある便箋を拾い集め、持参したコンビニのレジ袋にドサドサ入れる。朝っぱらからコンビニのレジ袋なんて持つてるのは、単純に今回のことは珍しくもなんともないからだ。言ってしまうえば慣れてる為に、大して驚きはしない。

以外とずっしり来る袋を持って、フェイトはとりあえず教室を指した。その道中、親友のはやてに出くわし、はやてはフェイトが持っている袋を見て「あらら」と呟いた。

「しかし、あれやな。ホントに懲りないやつやな」

袋の中から便箋を一つ取り出し、じろじろと見る。

「うはw。これ私のクラスのヤツや」

差出人の名前を見て、はやては隠すことなく笑う。

「はやては気楽で良いよね」

「まあ、冷たく言ってまえば私のことじゃないからな」

「うう、はやてのいじわる……。でも、これって断っても断ってもなんだよね」

「せやなあ。つーかよくやるわホンマに。ぶはっ！ww 『味噌汁はありきたりなのでコンソメスープを僕のために毎日作ってください』って、ちょw おまww つーかこれ告白やなくてプロポーズやんw」

「うう、わたしには明久がいるのに……」

「まあ、アキ君のこと言ったらそいつアキ君のことボコにでもしそ
うやな」

振られた逆恨みで明久に攻撃を仕掛ける男子達が簡単に想像できた。

「それはまあ、大丈夫だと思うけど。明久は強いから」

「惚気やなあ……」

「別に惚気とかじゃないよ。明久は本当に強いんだよ。まあ、そのせいで明久の成績落ちちゃったけど……」

「なんや？ アキ君昔は頭よかったんか？」

「うん。小学校じゃ私もたまに勉強とか教えてもらってた」

「はあ、そら以外」

「中学のときもね？ すごく頭が『キンコンカンコン』あ、ごめん。私いなくなっちゃ」

「え？ ああ、うん。またな」

そう言い合って、二人は廊下で別れたのだった。

派閥と恋文とビニール袋（後書き）

次回から合宿編です

脅しと朝と合宿の前置き

新学期が始まって早二ヶ月。日没の時間がハッキリし始めたこの時期。僕は思いのほかすつきり目覚め、いつもより早く登校していた。

「もうすぐ合宿だね、アキ君」

「そうだねえ、楽しみだよ」

「合宿なんですけど、四泊五日ですからね。まるで修学旅行みたいです」

「うん。勉強のためだけど、そういう風に楽しむのもいいかもね？」

なのはの言葉に、僕と瑞希ちゃんにフェイトがそれぞれの考えで応える。もうすぐ二年生全員が参加する学習意欲向上のための強化合宿が行われる。その日数が四泊五日というそれなりに長い日数だ。

「うむ？ 明久ではないか。今日は随分と来るのが早いのか」

「あ、秀吉。おはよう」

「おはよう、秀吉ちゃん」

学園の門の近くまで来ると、僕らのクラスの数少ない女子の一人である木下秀吉と出会った。でも、どういうわけか眉をほんの少し吊り上げている。どうしたんだろうか？

「……高町よ。前々から聞こうと思っていたのじゃが、お主ワシのことを女だと思っておらんか？」

「え？ 秀吉ちゃんは『秀吉』って性別じゃないの？」

「高町よ！ ワシの性別は男じゃぞ！？」 『秀吉』という性別などないのじゃ！」

「あれ、でも木下君。前に文月新聞で『木下君の性別は『秀吉』だ』って書いてあったよ?」

「なんじゃと!?」

瑞希ちゃんの言葉に秀吉はギョツとして叫ぶ。まあ、驚くよね普通。

「とにかく、高町よ。ワシは男じゃ。それだけはわかって欲しいのじゃ」

「えっと、うん。わかった」

「……分かったかどうか疑わしいのじゃ」

そんな会話をしながら、僕らは昇降口まで来てそれぞれの下駄箱に向かう。と、

「うん……?」

靴箱を開けると、一通の便箋があった。なんだろうこれ? とりあえず開けてみるかな。

「これは……また。分かりやすい脅迫文というか、なんというか……」

出てきた一枚の紙。それにはいきなり『あなたの秘密を握ってます』とある。その後の文を読んでもみると、身近な異性から距離を置けとのこと。なんというか、典型的というか……。

「アキ君、どうしたの?」

と、なのはが僕の持つてるものにでも気がついたのか近づいてく

る。

「ああ、ただの脅迫文だよ」

「脅迫文って、大丈夫なの？」

「大丈夫だよ。こんなの無視すればいいだけだし」

脅迫文の内容は単純に異性から手を引けということ。別に周りに被害が及ばすみたいなのは書かれてない。この程度の脅迫なら無視すればいいだけだし。

「どうしたのじゃ明久」

「ああ、別に大したことじゃないよ」

秀吉にそう言いながら脅迫文をくしゃくしゃと丸めて近くのゴミ箱に捨てる。これでよし。

☆

Aクラス前でフェイトと別れて（別れる間際、フェイトが寂しそうな顔をしていたのはいうまでもない）僕たちは教室へ。すると、教室の前に雄二とムッツリーニが何か話していた。

「……じゃあそういうわけだ。頼むぞ」

「……任された」

「雄二にムツツリーニ。なにしてるの？」

「……雄二の結婚が近いらしい」

そう言ってくるムツツリーニ。なるほどなるほど。

「雄二、日本は一夫多妻制じゃないはずだよ？」

「当たり前だ！ それに俺はまだ自由でいたいんだ！」

「じゃあ、どういうこと？」

「どういうわけか、翔子が俺に身に覚えのないプロポーズを録音したMP3を持っていたな」

「へえ、そう……」

まさか、召喚大会の時のあれかな？　　というかその可能性が高そう。

「翔子は音声の合成はおろか、録音すらまともにできない機会音痴なんだ。だから、誰かが録音・合成してそれを翔子に売ったと見て間違いない。だから、その辺に詳しいムツツリーニに協力を頼んだわけだ」

「なるほどね。そういうことか」

「ああ。俺の人生がヤバイし、この事がスバルに知れたら色々面倒だからな。何とかして犯人を割り出して、元のデータを消さねえと」

「お前達。そろそろHRを始めるから教室に入れ」

と、僕らの会話に割り込んできたのはシグナム先生だ。今日も今日とて茶色のスーツと黒のタイツが映えている。

とにかく僕らは会話を中断して教室に入り席に座った。

「さて、今日は西村先生が急用で遅くなるため、私がH Rを勤める。まず、明日から始まる強化合宿の資料を渡しておく。中に集合場所と時間が書かれているので、間違えたり遅れたりしないように」

そんな言葉を聞きながら、前から回ってきた冊子を開いている。

「まあ、四泊五日もあると修学旅行のように捕らえてしまいがちだが、勉強のための強化合宿だ。着替えと勉強道具さえ持ってくればそれでいい。あと、移動手段だが……」

移動手段か。恐らく僕たちFクラスは補助席つきのボロいマイクロバスといったところか。で、Aクラスがリムジンバスとかね。

「Fクラスの移動手段は、現地集合だ。遅れたり道に迷ったりするなよ?。」

「「「案内すらないのか!?!?」「」「」」

あんまりな扱いに、僕ら全員が涙した。

電車と心理と意外な事実

さて、今回の合宿場がある卯月高原は電車で約三時間ぐらいの場所にある。幸い出発する駅から目的地のある駅まで乗り換えはなく、流石に電車賃は出たので問題はその電車内で席に座れるか否かといったぐらいだ。といっても今日は平日であり、普通なら平日となれば学校なり会社なりがあるのでその辺りも問題なかった。

というより、現在卯月高原に向かうこの電車の中は、ほとんどが俗に言うセカンドライフを享受している老人や、僕たちみたいに現地集合となっているFクラスの面々といった具合で埋め尽くされていた。まあ、埋め尽くされてるっていうのは語弊があるかも知れどね。まあ、要するにこの電車には文月学園生はFクラスのメンバーのみってことだ。

ことのはずなんだけど……

「フェイト。何でここにいるのさ？」

僕の隣に座っている金髪紅眼の彼女に思わず聞いてしまう。なにせ彼女が所属しているのはFクラスではなくAクラス。少なくとも、リムジンバスで送迎のはずの彼女がここにいるはずがないのだ。あ、ちなみにクラス別の送迎手段は以下の通り。

Aクラス リムジンバス

Bクラス 補助席付きの大型バス

Cクラス 中型バス（クーラー有り）

Dクラス 中型バス（クーラー無し）

Eクラス 中古のマイクロバス（当然クーラー無し）

Fクラス 独力で現地集合

……なんだろう。この差別は。自分で言うのもどうかと思うけど、
なんだかテンションが下がってくる。

ともかく、僕は視線をフェイトに戻した。

「えっとね？ 実は寝坊をしちゃって」

「うそだね」

「はうっ!？」 ガーン! Σ(。□。)

僕は彼女の嘘をあっさり見抜く。フェイトは嘘が下手なんだよなあ。というか顔に出てるし。

「な、何で分かったの!？ 明久読心術師なの!？ はっ! ということはいつも寝るときに等身大明久抱き枕（ムツツリ商会謹製）をぎゅうってしてるのもバレバレ!？」

「ちよっと待って! それって一体どういうこと!？ 初耳なんだけど!？」

なぜだろう。最近彼女がよく分からない。

「はうっ! そうなんですか!？ じゃあ、私がいつも寝るとき一緒に寝てる等身大明久君（With裸Yシャツ ムツツリ商会謹製）抱き枕をぎゅうってしてることもバレちゃってるんですか!？」

「待つんだ瑞希ちゃん! そのことに関して僕は二つ三つ聞かなきゃならないんだけど!？」

どうしよう、まさかフェイトだけじゃなく瑞希ちゃんまで。もはや僕の許容範囲を超えてるよ色々!

「と、とにかくっ。なんでフェイトはここにいるの? Aクラスは

リムジンバスで行くんじゃないの？」

「えっとね、その……。やっぱり明久たちと一緒に行きたくて……」

おずおずとフェイトはそう告げる。やれやれ、まったく。

「このことってAクラスの人たちって知ってるの？」

「うん。代表に伝えてあるよ」

「仕事が速いね。まったく」

それに関してはもはや脱帽しかないよ。

☆

雄二SIDE

さて、目的地に着くまで寝てようかと思ったが、後ろの席で明久たちが島田の出す心理テストをやるらしい。寝てるしかやることがないためもあり、参加してみることにした。最初の心理テストは、まああれだな。二つ数字を言って、その言った数字が普段の自分と普段見せない自分ってやつだ。で、俺は「クールでシニカル」と「公平で優しい人」だそうだ。ま、あながち間違いでもないな。でだ、問題は次のヤツだった。というか、その問題でまずい事態が起きた。

「それじゃいくわよ。『次の色でイメージする異性の友人を挙げてください』」

なるほど、異性の友人ねえ。

「『？青　？白　？赤　？緑　？黄』でそれぞれ似合うと思う人を挙げてくれる？」

「えーと、っていうかここにいる異性の友人で？」

「え？　……うん。ここにいないでもいいけど」

まずいな。島田の声がなんか重くなってる。

「えーと、？が瑞希ちゃん、？がなのは、？がウエンディ、？が秀吉、？がフェイトかな？」

ビリイツ！

そんな紙の束が縦に裂かれるような音が響く。いかん、これはダウトだ。

「あの……、島田さん？」

「……どうして？」

「え？」

「どうして誰がその色なのか教えてくれないかしら？」

「えーと、っていうかほぼなんとなく何だよね。青は瑞希ちゃんの目の色で、白はなんとなくなのはが浮かんだんだ。赤はその子の髪の色。緑は秀吉の目の色。黄色はフェイトの髪の色かな？　まあ、フェイトは金髪だから黄色とはちよつと違うかもだけど」

なるほどな。というか、ウエンディって誰だ？

「ねえ、ウエンディって誰よ？」

分かる。今の島田の目は明久を射抜くを通り越し、射殺さんばかりに鋭くなってるのが分かる。漫画とかなら『ギンッ！』って効果文字でも書かれているだろう。

「えっと、ウエンディっていうのは僕が行ってる病院にいる中学生の子なんだよ。人懐っこくてさ。まあ、結構会話を端折ってくることが多いけどね」

いかん。島田の戦闘力（殺人力）が急激に上昇している。つかそろそろスカウターが壊れそうだ。

「ときに明久よ。今緑で思い浮かぶ異性とは誰じゃ？」

「え？ 秀吉」

「……お主とは色々と話し合わなければならないようじゃの」

そう言っって秀吉はげんなりしている。まあ、無理もあるまい。さてと。

「よっと」

「あ、ちよっと！ 坂本、返しなさい！」

俺は後ろの座席から島田から心理テストの本を掻っ攫う。えーと、何々？ 青は恋人、白は幼馴染、赤は元気の源、緑は友達、黄は妾……って、随分と的を射た心理テストだな、おい。なんというか、製作者っていか作者の悪意を感じるぞ。

ちなみに、こんなことをした理由はまあ、単純だ。こうやってか

らかって島田の怒りとか嫉妬とかの意識を別の方向に向けさせる必要を感じたからだ。でないと、最悪電車横転……いや、電車爆破事故に発展しかねん。それだけは避けないといけない。

「……（ムクリ）」

と、俺の席の向かいに座っていたムツツリーニが起きた。

「なんだ、起きたのかムツツリーニ」

「……空腹で起きた」

なるほどな。そういえばもう昼か。

「よし、そんじゃあ飯にでもするか」

俺の言葉で、明久たちもそれぞれ昼食を取り出し始める。ふう、何とか回避できたか。

「あ、その前にちょっとトイレ」

そう言って明久は席を立った。丁度いい。

「俺も行くわ」

そう言って俺も席を立つ。そして明久の後について行った。そして電車備え付けのトイレまで来たところで明久を呼び止めた。

「何雄二？ 用なら座席の方で聞くけど」

「いや、ここでなきゃ聞けないことなんだ」

「??:?」

「なあ、明久。さっきの心理テスト、なんで島田の名前が出なかったんだ？」

そう、単純な疑問だった。コイツなら島田の名前を出すと思っていたからおさらだ。

「え？ ああ、そりゃそうだよ。だってさっきの心理テストって、『友人の異性』でしょ？ まあ、それを言ったら瑞希ちゃんにフェイトは恋人だけどさ。だって、島田さんは別に友達ってわけじゃないもん。ただのクラスメイトだよ」

そんな、さもあらんとばかりの明久の答えに、俺はただ驚愕するしかなかった。

合宿と騒動と覗きの始まり

「ふいゝゝ、到着」

最寄の駅で降り、荷物の入ったリュックやバッグを担いで三十分あまり。ようやく今回の合宿を行う合宿場に辿り着いた。ちなみに一日目は特にやることは無い。やることをあえて挙げるなら外に集まって今回の合宿についてのことの最終確認みたいなことを二年生全員でやることぐらいだ。後はまあ、夕食にお風呂ってぐらいかな。

「そういえば雄二、外に集まるのって何時だっけ？」

「ん？ 確か三時ぐらいじゃなかったか？」

「じゃあ、それまではちよつとした自由行動だね」

まあ、といっても現在の時間は二時。一時間ぐらいしかないけどね。でもたった一時間、されど一時間。やろうと思えば色々できる。

「そういえば雄二。ムツツリーニは？ 覗き？ それとも盗撮？」

「いや、救護室に行くって言ってた。何でも電車で酔ったらしい」

「そういえばなんか様子がおかしかったね。じゃあ、ひよつとして秀吉は付き添いかなんか？」

「いや、秀吉は別室だ」

「別室？ そりゃまたなんで？」

今までの感じから、秀吉も同じ部屋だと思ってたんだけどなあ。

「ほら、前の銭湯での騒動で鉄人がそうババアに言ったらしい。そのせいで秀吉だけ小さいながらも個室なんだと。ちなみに、風呂も秀吉だけ個室風呂だ」

そう言って雄二は合宿のしおりのとあるページを見せる。えっと、何々？

合宿所での入浴について

| | |
|-------------------------------------|--------|
| ・男子A B Cクラス…2 0 …0 0 …0 0 …2 1 …0 0 | 大浴場（男） |
| ・男子D E Fクラス…2 1 …0 0 …0 0 …2 2 …0 0 | 大浴場（男） |
| ・女子A B Cクラス…2 0 …0 0 …0 0 …2 1 …0 0 | 大浴場（女） |
| ・女子D E Fクラス…2 1 …0 0 …0 0 …2 2 …0 0 | 大浴場（女） |
| ・Fクラス木下秀吉…2 0 …0 0 …0 0 …2 1 …0 0 | 個室風呂？ |

「なんて徹底してるんだろう…」

「実際秀吉が男湯なんぞに入ったら湯船に鼻血っていう入浴剤が混じっちゃうからな」

そのときの光景が簡単に想像できる辺り、何気に恐ろしさがある。流石は秀吉。

「とりあえず、何かしょっか」

「そうだな、それじゃあこの探索でもするか」

「そうだね、浴場の場所とかもちゃんと知っておきたいし」

とりあえず合宿場をぶらぶらするとしようか。

pipipi!

浴場の場所を確認し、さて部屋に戻るかと思った時、携帯がメールの受信を告げる。ポケットから取り出し、液晶を見る。

『・フェイト

題名 お風呂のことで

『お風呂のことというか、なのはのことなんだけど、なのはのアレのことを先生に説明して、なのはを個室風呂にしたいんだ。だからちょっと来てくれないかな?』』

……なるほどね。そういえば説明してなかった。

『Reお風呂のことで

『問題ないよ。どこに行けばいいかな?』』

そう打ってメールを送信。一分経たずに返信が来た。

『ReReお風呂のことで

『私たちの部屋にきてくれないかな? 先生や代表には言っておくから』

『ReReReお風呂のことで

』了解。すぐに行くよ』

そう打って携帯をポケットに入れる。さて、行くとするかな。

「雄二。悪いけどちょっと用事ができたから、先に戻ってて」

「なんだ？ 俺も付き合うが」

「……。いや、雄二は部屋に戻ってて」

そう言っ僕は女子部屋のエリアへと、できるだけ早足で向かった。こればかりは、雄二はつき合やすわけにはいかない。これは、できればあまり誰彼問わず言うべきことではないから……。



「—————というわけなんで、お願いします」

「なるほどな……。そういうことなら仕方あるまい。特別に許可しよう」

「ありがとうございます、西村先生」

「ありがとうございます」

「ありがとうございます」

僕の説明を終えて、鉄人は許可をくれた。くれた許可というのが、

なのは個室風呂を使用させて欲しいというものだ。

「しかし……、そう言われればなんとなく納得がいくものがあるな。高町がいつも長袖というのが」

「鉄Z……西村先生。このことは内密でお願いしたいんですけど……」

「分かっている。誰も言わんことを約束しよう」

この辺は鉄人は一番信用できる。話したのが鉄人でよかったよ。

「それでフェイト、瑞希ちゃん。なのはのことはよろしくね？ 僕は風呂の入り口で一応待ってるから」

「うん。お願いね？ アキ君」

「うん。任せてよ」

「明久なら信用できるよ」

「はい♪ 一番信頼できます」

「ふむ。信頼されてるな、吉井」

「あはは、そう言ってもらえると嬉しいですね」

そう言われるのは嫌いじゃない。というよりあまり言われたことが無いからへんにこそばゆい。

「ねえ、明久」

「あの、明久君」

「ん？ なに、二人とも」

「「……一緒に風呂入らない（りません）？」」

「是非とも！ ……って違う！ まずいからね！？ それはまずいからね！？」

最後の最後で結局こうなった……。というか、鉄人が呆れてるし……。

☆

その後、二年生を全員集めての最後の注意事項の説明が行われた。内容はまあ、騒ぐなどかここには勉強で来てるんだぞとか、そんな感じの話をして終わった。

だけど、この日はそれだけでは終わらなかった。夕食を終え、後は風呂に入って寝るだけとなった時間。僕は昼間にしたなのは達との約束を果たすために部屋を出ようとしたときだった。

ドバンツ！

そんな力任せと言わんばかりの勢いでに開け放たれた。そしてほぼ同時に複数人の女子が部屋に雪崩れ込んでくる。なに？ なにごと！？

突然の出来事に泡を食ってる僕と雄二、そして戻ってきたムツツリー二に、先頭の女子が告げた。

「さあ、観念しなさい！ この覗き魔ども！」

僕らの合宿一日目はまだ終わらない。

怒りとアリバイと知っているつもりか？（前書き）

今回は警告を流します。今回の話はアンチ美波率がかなりのものです。ご注意ください。

怒りとアリバイと知っているつもりか？

はつきり言って突然だった。

突然部屋に入ってきた大勢の女子たち。そんな女子たちに対して、明久たちはあっという間に囲まれる。

「おい、一体何のつもりだ？」

雄二は突然の出来事でありながらも、できる限り冷静に女子たちに問いただす。

「何のつもり？ よくもまあそんなことが言えるわね？」

そう言うってくるのはCクラスの代表、小山友香だ。

「何？」

「これを見なさい」

そう言って小山はポケットからあるものを取り出し、それを見せる。

「これって……？」

「……CCDカメラと小型集音マイク」

明久の疑問に、ムツツリーニが応える。

「そうよ。そして、これらは女子風呂に仕掛けられていたわ」

「女子風呂に！？ それって大変じゃないか！」

「そうよ。だからあんた達を肅清しに来たのよ」

「は……………?」

その言葉に明久はキョトンとしてしまう。それはそうだろう。自分は何もしていないというのに、いきなり粛清しにきた、である。

「つて、ぐああああ！　ちょ、ちよつと待て翔子おおっ！！」

「……雄二、覗きをするなんて許さない」

部屋の隅では、既に雄二が翔子に粛清されていた。ミシミシと雄二の頭蓋がきしみ始める。そして、明久にも。

ガシッ！　ギギギギ……

「がっ！　ぐ…………し、島田さん！！?」

明久の腕をねじり挙げているのは、美波である。

「全く！　女子のお風呂を覗くなんていい度胸してるじゃないのよ吉井！」

「が…………つう！　僕は、やってない！」

「しらを切ろうったってそうはいかないんだからね！」

明久の言葉などすぐに否定し、更に腕をねじり挙げる。このまま行けば確実に関節がとれるか筋を違えるかするだろう。その周りでは、他の女子が「やっちゃえやっちゃえ！」と煽っていた。

「（くっ、どうしよう。こうなったら強引にでも抜けるか?）」

関節を極められながら、明久はそう思案する。明久が本気になれば、それこそ美波の関節技ぐらい簡単に外せる。だが、やり方が少々荒っぽいのだ。だから下手したら傷つける、とまではいかなくとも少々痛い思いをする可能性もある。

「さあ、吉井！ 観念して神経と骨を差し出さない！」

「ちよっと待って！？ 神経と骨を差し出したら、一体何をするつもり！？」

もう正当防衛として多少荒っぽくやろうか？ そう思ったときだった。

バシッ！

一つの手が美波の手をとり、そのまま明久を引き剥がした。

「キャアッ！」

引き剥がされた勢いで、美波は畳に倒れこむ。

「大丈夫、アキ君？」

「なのは。助かったよ。後数秒遅かったらちよっと手荒なことしてたから」

「そう。よかった」

その手の持ち主、なのはに対して明久は礼を言う。

「それにしても驚いたよ。女子が騒いでるって話を聞いて、何かな？ と思ったらこんなことになってるんだもん」

「はい、ビックリです」

さらにフェイト、瑞希がやってくる。

「あなた達、何でこんなことしてるの？ 理由によっては許さないけど？」

「ソコの男子たちが女子風呂の覗きをやったのよ！」

なのはの間に、小山が言い返す。

「ふうん。ねえ、証拠は？」

「これよ。小型のマイクとカメラ」

「これが……。じゃあ、他には？」

「……他に？」

フェイトの間に、小山が「え？」という顔をする。いや、小山だけではなく、後ろにいる女子達も似たような顔をしていた。

「これだけじゃあ、証拠とはいえないよ。それこそ、監視カメラとかに映ってるって言うなら話は別だけど」

「そ、そんなのいないわよ！ Fクラスなんだから、こいつ等がやったのよ！」

「……たった、それだけで？」

なのは、瑞希、フェイトは呆れてしまった。たったそれだけで、明久たちを覗き犯と断定したのである。呆れるという方が無理がある。

「……はつきり言うけど。それだけじゃ明久たちがやったと断言できないよ」

「なんでよ!」

「まず証拠が足りなさ過ぎ。ただ小型カメラにマイクを見つけただけでしょう? それだけで犯人は特定できないよ」

「それに、Fクラスというのが理由の一つなら、私となのはちゃんも犯人と見られますよね?」

「とうか、アキ君達以外のFクラスの皆のところには行ったの?」

「そんなに穴だらけなのに、明久たちが犯人だ、って……。よくも言えるね?」

フェイトたちの正論の元、どんどん女子達の穴だらけな推理が露わになってくる。いや、女子達のはもはや推理と言っているものかどうかすら怪しい。

「言えるわよ! Fクラスを中心人物だもの。前の試召戦争みたいに、騒ぎを絶対に起こすわよ!」

「そうよ! 女のこの気持ちなんて欠片も分かってない吉井なら、こんなこともするわよ!」

そんな、美波の言葉に部屋の隅であいも変わらず拷問を受けていた雄二が悲鳴を上げながら器用に「あ、ダウト」と心の中で呟いた。

パーンッ!!

そんな、聞いている方が痛くなりそうな音が部屋に響いた。

「あ、っ…………え…………?」

頬を赤く染めた美波が、分けが分からなと言わんばかりの顔でなのはを見た。見られてるなのは顔は、正直言って表情が窺い知れない。

「……島田さん。あなたは……あなたはどれだけのことがあって、アキ君のことを分かっているつもりなの？」

「え……？」

「まさかとは思うけど、同じクラスで名前を知ってるからなんて言わないよね？ アキ君が自分の名前を知ってるからなんて言わないよね？」

「え、いや、それは……」

「はつきり言うけど。そんなの分かっている内に入らないよ……。というか、なにまるで自分はアキ君のことを何でも知ってますみたいな顔してるわけ？ アキ君のこと、名前以外何も知らないくせに……！」

なのはの放つ、明らかな怒りと、殺気。それに当てられた美波、そして後ろにいた数名の女子が「ひっ！」と悲鳴を小さく上げて一歩後ろに下がる。

「確かに、なのはの言うとおりだよね？ 名前以外知らない人が、なに明久の隣が自分の居場所みたいな顔してるのかな……？」

「そうですね……。まるで明久君にああするのは自分の義務みたいな顔でしてましたよね、島田さん……」

いや、なのはだけではない。フェイトも、瑞希も、二人そろって殺気と怒りを前に出していた。それに恐怖するあまり、瑞希が己の呼び名を「美波ちゃん」から「島田さん」に変わったことに気がついていない。それほどのものである。

そして、そこまで来て

「おい、一体何の騒ぎだ！」

鉄人西村は遅まきながら部屋にやってきた。

☆

「ふむ、なるほどな」

鉄人は女子達から事情を聞き、頷いた。

「たしかに、高町たちの言うとおりだな。それだけで吉井たちが犯人と決め付けるのは、些か早計だ」

そんな鉄人の言葉に、女子勢から「ええ!？」と声がる。

「それに、どうやっても女子風呂にカメラやマイクなどを仕掛けられるとは思えんがな」

「ど、どうしてですか!？」

小山の言葉に、鉄人はゆっくりと話し始める。

「もともとこの合宿場は、大きめの宿屋を文月学園が買い取り、改装して使用している。そのため、廃棄する必要のないものはほぼ確実に買い取る前の状態で仕様、または保管している。そして、女子風呂にはそういった覗きなどの対策として扉には扉そのものについている鍵と、更に南京錠にナンバーを揃えて開けるタイプの鍵がついている。この三つのカギを開けて、初めて女子風呂の扉が空くのだ」

「で、でも！ 土屋とかなら開けられます！」

たしかに、ムツツリーニは開錠、もといピッキング技術があり、ほとんどのカギを開けることができる。が……

「それはムリだ。合宿場に来てすぐ、土屋は体調不良を訴え救護室に向かった。それから夕食間際までずっと救護室にいたのは救護室の先生が確認している。要するに、土屋に犯行は不可能だ」

「な、なら他の二人なら！」

「残念だが、俺と明久はシロだ。明久は合宿場に来てしばらく経った後、姫路たちの部屋に向かい、その後鉄人のところに行ったと俺は聞いている。その間、女子三人は明久から離れていない。俺は俺で、食堂で飲み物と軽食を食ってた。これに関しては木内先生が俺を見てる。つーか俺の向かいの席に座ってたからな。その後はババアのあの長ったらしい話が始まるまでそこにいた」

そんな雄二の言葉に、小山の顔がどんどん青くなる。

「じゃ、じゃあ……」

「俺達、つまりお前達が犯人といった俺達にはちゃんとしたアリバイがある。そういうことだ」

この雄二の言葉で決着だった。

この後、小型マイクとカメラは鉄人が回収。教師の方で調査をするということで、話はついたのだった。

こうして、合宿一日目はようやく幕を閉じた。島田美波に、極大なまでの傷跡を残して。

怒りとアリバイと知っているつもりか？（後書き）

はい。どうも、更新遅れて申し訳ありませんです。次回はついに、ついにこの小説の明久の新武装、『レヴァンティンΩ』がロールアウトです！　そして、その話が掲載されると同時に、レヴァンティンΩの絵も、みてみんなに載せますのでお楽しみに。Dr. クロさん、できましたよー！

推理と究明と新しい力（前書き）

新装備、リフトオフ！（ミサトさん風）

わたしは、三番目だから……（装備デザインの意味で）（綾波風）

使わなきゃダメだ使わなきゃダメだ使わなきゃダメだ……使わなきゃ、ダメだっ！（シンジ風）

そんなわけで新装備、登場です！　ちなみに、装備の紹介的なモノを後書きで書きます。あと、今回は画像投稿サイト『みてみん』に投稿します。アスタリスクとユーザー検索すれば大丈夫のはずなので、是非とも見てください。

推理と究明と新しい力

バカテスト 問題提供 Dr. クロ様

【問題】

死んだ方がマシだと思うことを書きなさい。

姫路瑞希、フェイト・T・ハラオウン、高町なのはの答え

『大事な人との、大切に、暖かい時間。それが失われることが何よりもつらいです。』

教師のコメント

なるほど、それは確かにそうですね。だからこそ、人は失わないように必死に今を生きてるのでしょうか。

吉井明久の答え

『僕の女装写真が全国にアップされる。』

教師のコメント

それはむしろ世間的な死だと思います。

土屋康太の答え

『ハードディスクの大破。財布の紛失。決定的瞬間に目にゴミ』

教師のコメント

大変なのは分かりますが、流石に死ぬのはやりすぎです。



波乱の一日目が過ぎた翌日の二日目。食堂では様々な雰囲気があった。理由としては、昨日の覗き騒ぎが原因である。

昨日下された三人組の無罪を未だに信じず、ブツブツと愚痴を言う女子。

昨日の一件を聞いて、三人に同情する男子。

そういったことに関して傍観を決め込んでいる男子。

未だにブツブツ言う女子に呆れる女子。

などなど様々であった。

そんな中で、明久たちは別のことを考えていた。

「で、昨日の騒動だけど結局誰が真犯人だったのかな？」

明久はそう周りの者達、雄二やなのはたちに問いかける。

「そうだな、まず俺達じゃないことは確かだな」
「そうじゃの。それだけは確かじゃの」

そう言う雄二と秀吉。

「ちゅーかそもそも男子ですらない可能性もあるわな？」

はやての言葉に、周りは頷く。

「そうだよな。西村先生はお風呂に入れる時間まで、扉は厳重に錠錠してあるって言っているし」

フェイトの言葉に、はやてはどこからかメモを取り出す。

「まずは、三人のアリバイやな」

そう言ってメモに色々と書いていく。

・女子風呂覗き事件。湯煙に見え隠れするピ―。くアイナさんは見た！く

？アリバイ

吉井明久 合宿場に来て少し経った後、高町なのはの部屋に。その後は女子三人と一緒に行動。
霧島雄二（雄二・ナカジマ） 合宿場に来た後は吉井明久と行動を共に。その後は食堂で食事。

ムツツリーニ 合宿場に来る途中に電車で酔う。その後、合宿場に來たら夕食まで救護室にいた。ちなみに救護室の先生は紫のガーター。

？事態

女子風呂（脱衣場）に小型カメラとマイクが発見される。これの一部の女子が上記三人が犯人として行動。

「ちゅーことやな」

「色々とツツコミどころがあるんだが……」

「……（コクコク）」

書かれたメモをなのはたちはじつくりと凝視する。
ちなみに、アイナさんとは原作に出ていた機動六課の寮母さんである。（どうでもいいことだが）

「ねえ、はやてちゃん。このカメラとマイクって、脱衣場のどの辺りで見つかったの？」

「ん？ ああ、聴いた話やけど、脱衣場の部屋の隅やな。ただ、カメラとかの色が黒やったから白の壁じゃ結構目立つやろな。小さくても」

「あれ？ それじゃあ誰でもわかるんじゃない？ カメラと違って別に何かで隠されてたわけじゃないんでしょう？」

「そうなんやよね。別に籠とかで隠されてたわけじゃなかったようやし」

その言葉に、全員が唸る。そして……

「もしかして、さ」

突如として声を上げた明久に、全員の視線が集まる。

「自作自演なんじゃないのかな？」

「自作自演だあ？」

「うん。だって女子風呂には入浴時間まで誰も入れなかったんでしょ？　だとしたら、男子にはムリだよ、まず」

「まあ、そうじゃの。入浴時間になってからでは遅すぎるのじゃ」

秀吉の言葉に、全員が首肯する。

「だとしたら、女子しか犯行はムリだよ」

「まあ。でもよ、そんなこととして誰が得するんだ？　レズでもな

いとムリがあ、る……………？　……………まさか」

「そうだよ雄二。同性愛者だよ」

明久の言葉に、全員が納得した。

「確かにそれなら女子がやっても問題は無いよね？　まあ、いろいろ

と問題あるけど」

「せやな」

フェイトの言葉にはやても頷く。

「だとしたら、かなり絞り込めるよ？」

「はやてちゃん？」

はやての言葉に、全員が首を傾げる。それを尻目に、はやてはメモに新たに書き始める。

？犯人像

同性愛者

恐らくDクラスかEクラス所属。

「ここまででは絞り込めるな」

「八神さん。どうしてDクラスとEクラスなの？」

明久の問に、はやてはニツと笑う。

「この絞込み重要なのは二つや。まず比較的見つけやすいところにあったカメラにマイク。そして、入浴時間や」

そう言うってはやては脱衣所の図を大まかに描き始める。

・脱衣所見取り図

● 籠置き場

理想郷への入り口↓

「大体こんな感じやな。ちなみに●がカメラとマイクがあった場所や。で、見て分かると思うけど、結構分かりやすい位置に置いてあんねん」

「そのようだな。これじゃあ、下手すりゃ入ってすぐに見つかるぞ？」

「そう、そこや。ここで入浴時間が出てくる。さて、ムツツリーニ君。AクラスからCクラスまでの女子の人数は何人や？」

「……74名」

「せや。考えてみい。そんなにいんのに、なんで最初の三クラスの女子達は見つけられなかったんや？」

「あ、ということは……」

明久の言葉に対してはやては頷く。

「せや。最初の三クラスが入ったとき、そのときはまだカメラもマイクも無かったんや」

「ということは、次の三クラス、D、E、Fクラスの誰かが仕掛けたということになるね」

「そうや。恐らく犯人は丁度入れ替えのときに仕掛けたんや。念のためにな。人数が多ければ見つけやすくなるからなあ」

「そして、それを見つけたのが小山さんだったんですね」

「そして、昨日の明久たちに対する一件が起こった」

はやての推理に、なのは、瑞希、フェイトはそれぞれ応える。

「だけど八神さん。何で犯人はそんなことしたんだろう？」

「そこなんよ。ソコはまだ分からへん」

ソコまで来て、はやての推理は終了したのだった。

「ま、とりあえず犯人は男子じゃないってことが分かっただけでも収獲だな」

「あと、色々な犯人像もね」

確かに、それが分かっただけでも十分な収獲だった。

☆

それから学習室で勉強。明久はあいも変わらず左に瑞希、右にフエイトを据えお勉強。そのため、やたらとFFF段の妬みオーラが酷かったのは言うまでも無い。

「……雄二。一緒に勉強できて嬉しい」

「止める翔子。周りのFFF団の連中が俺をまるで親の敵を見るような目で見てる」

「……最近スバルも一緒だったからここで雄二分を独り占め」

「何の成分だそれは」

ちなみに、そのころ当のスバルがくしゃみをしたとかしてないとか。



その後は昼食を摂った。そして、午後が始まる前に、明久たちは学園長に呼び出された。

「一体何の用ですが、ババア？」

「……アンタには一度この学園の長が誰なのかじっくり話し合う必要があるね」

そう言っババア、もとい学園長はため息をつきながらポケットを探る。

「例の、カートリッジシステムの件だよ。ようやく腕輪の方の大まかな調整が終わったからね。今回はその腕輪を使って動作テストをしたいのさ」

そう言っポケットから一つの、青い腕輪を取り出して明久に放

る。

「ととっ！ ……これが、その腕輪ですか？」

そう言って明久はその腕輪を見る。青に赤い縁取り。三つの黄色のスイッチらしきものに、中心部に緑色の、菱形コアがある。

「そうさね。じゃあ、まずは召喚獣を召喚しな」

「あ、はい。それじゃあ、試獣^{サモン}召喚！」

既に展開されていた召喚フィールド内で召喚をする。そして、いつもどおりの幾何学模様が現れ、召喚獣が出現する。

「つて、あれ？ なんか召喚獣の装備が変わってますけど？」

身に付けているのはいつもどおりの改造学ラン。だが、持っている武器はいつもの木刀ではない。金属性の、一風変わった剣であった。

「アンタの召喚獣の武器だけ、カートリッジシステム専用の装備にしたよ。金属製なのはオマケだよ」

「ほう、それはいいな。装備が少しでも良くなると試召戦争が多少だが有利に進む」

それを聞いた雄二がにやりと笑う。実に楽しそうである。

「じゃあ、操作を説明するよ。まず、左手にはめて見て、左側のスイッチが属性付加。一応設定は炎にしてあるよ。そして右側が装備の形態変化。銃形態に変化するよ。そして、コアの向こう側のスイッチがいわゆる決定ボタンさね。それを押して“カートリッジロー

ド”と言う。早速やってみな」

「はい、それじゃあまずは属性付加で……これで、これ。カートリッジロード！」

そう言うと、腕輪の緑のコア部分が光り、持っている武器の手元部分がガシャンッと動き、中から薬莢が飛び出る。その瞬間、刀身が炎に包まれる。

「うわっ、すご……」

「もともと400点オーバーの腕輪にも属性付加能力はあるからね。やりようはあったよ」

「そんじゃあ、明久。今度は形態変化だ」

「うん。って、どうやって元に戻すんです？」

一応ブンブンと武器を振ってみるが、一向に戻る気配は無い。

「戻す方法は簡単だよ。真ん中の緑のコアを押せばいい」

そう言われるままに緑のコアを押す。すると、刀身から炎はフツと消える。

「それと、言っておくけどカートリッジは一教科につき五発しか使えないからね。よく考えて使いな」

「え？ あ、はい。それじゃあ今度は形態変化で……カートリッジロード！」

再びガシャンと薬莢が飛び出る。すると、グリップとカバー部分が傾き、傍目から見ると銃の形になる。

「おお……」

「能力は言うまでも無く銃として使用できる。一応弾数は決めてないよ」

「すごいな。これなら近く遠距離が全てカバーできる。戦略の幅がかなり広がったぞ」

その能力を見て、雄二は感心する仕草をしたのだった。

「それと、たまに腕輪を持ってきたよ？　いろいろと微調整が必要だからね」

「はい。そういえば、この武器ってなにか名前って無いんですか？」

「名前かい？　一応、『レヴァンティンΩ』って言うのが名前だよ。まあ、正確には開発コードと言った方がいいかもね」

「レヴァンティン……Ω、ですか」

「さて、あとは……ハラオウン」

「はい？」

学園長はフェイトに声を掛ける。突然のことだったために、フェイトは首をかしげた。

「これを……アンタに渡しとくよ。本来の“持ち主”のアンタにね」

そう言って、学園長はポケットから取り出したそれを取り出し手渡した。

黒地に、紅いスイッチ。そして金色の丸いコアの腕輪を。

推理と究明と新しい力（後書き）

はいつ、というわけで新装備、レヴァンティンΩ登場です！

レヴァンティンΩ

武装タイプ 剣・銃

付加属性 炎

使用者 吉井明久

キーラさんの説明講座

「さて、ようやく出てきたね。画像投稿サイトみてみんなに投稿した絵を見てもらえれば分かると思うが、基本的な形は本家レヴァンティンを遵守している。銃形態に関しては……なに？ 変形がシンプル過ぎるって？ いいのさこれで。現実に戦闘の途中で昔のロボットアニメみたくガシャガシャ……なんてやってようやく変形完了なんてやってられない。そんなことを相手は待ってくれないしね。ようはシンプル・イズ・ベストなのさ。ちなみに、銃に変形したからって遠くをすぐに狙い打てるわけでもない。初めて銃を持った人間に100メートル先の的を狙えなんてムリだしね。まあ、マグレなら何とかなるだろうけどね。ま、ようは何でアレ練習が必要ってことさ」

過去と今、愛の一つの形

「あの、これは……？」

フェイトは手渡された黒い腕輪をまじまじと見る。それは、どこか明久の腕輪と似ていた。

「おいちよつと待てババア。腕輪は優勝した俺と明久にしか出ないんじゃないのか？」

その腕輪と関連性を考えたのだろう。雄二が目ざとく言う。

「当たり前だよ。この腕輪はそれとは別の腕輪さね。もっと正確に言えば、吉井のつけている腕輪はこの腕輪がモデルなんだよ。要するにオリジナルなのさ、この腕輪は」

「オリジナルって、どういうことですかババア長？」

「アンタは……まあいい。もともとカートリッジシステムはワタシが考え、開発したものじゃないんだよ」

「それとこの腕輪が私のものであることに、どう繋がるんですか？
学園長先生」

ババアのその言葉に対して、フェイトは確かにはと思える事を聞く。それ聞いて、ババアは少し思案する顔をした後。

「……ふむ。ハラオウン。この中でアンタが小学……三年生の頃からの付き合いのジャリはいるかい？」

「え？ は、はい。明久となのは、あと瑞希です」

「そうかい。なら、その三人を除いて部屋に戻んな」

「は？ おいババア、そりやどういことだ？」

「どうもこうも無いよ。そのままの意味だ」

そう言ってババアはシッシツと雄二たちにする。

「話が進まないんだ。さっさと戻んな。じゃないと西村先生にでも特別補習でもさせるように言うよ?」

「げ、横暴だぞババア神!」

「ホントにそうさせるよ!?」

そう言いながら、雄二と秀吉、そしてムツツリーニを部屋から出す。そして扉を閉め、カギをかけた。

「さて、と。ハラオウン。そしてあんた等も。一応これだけは聞いとくよ? 特に後ろの三人。分からなかったそぶりを見せた時点で坂本たちと同じように部屋から出てもらうからね」

そう言って三人を一瞥した後、こほんと軽く咳をする。

「あんた達は、『プレシア・テストロッサ』を知ってるかい?」

「……! ……知ってます。フェイトの、本当の母親。フェイトの産みの親です」

「はい、私も知ってます」

「私입니다」

上から明久、なのは、瑞希の順で応えた。それを聞いて、学園長は満足気に頷く。

「よし。じゃあ聞くけど、彼女がどんな職業だったかは知ってるかい?」

「いえ、そこまでは」

「……母さんは研究者で、何かを研究していました。でも、まさか……」

フェイトは何かに感ずいたらしく、学園長を見る。

「そうさね。このカートリッジシステムは、いや……試験召喚システムをほぼ現在の状態にしたのは、あんたの母親、プレシアだよ」

「……！ フェイトの本当のお母さんが……」

「試験召喚システムの」

「……開発者」

「母さんが……」

明かされた一つの事実に、四人は驚愕を隠せない。ムリもない。自分の、親しい者の親が今の試験召喚システムの開発者だ、なんて言われれば驚きもする。

「いや、システムを開発したのはプレシアじゃないよ。正確には、骨組みがあつたこのシステムに肉付けして、加工して、現在の根幹を作ったのがプレシアさ。骨組み、基礎の開発者は別にいるよ。そして、その腕輪は、プレシアがこのシステムを搭載した学校に、もしも娘が入学したら、プレゼントしたいって、いつて開発して作ったのさ。ま、渡すには時期的には丁度良かったからね」

「そう、ですか……」

「優秀だったよ、ホントに。まあ、唯一つ欠点があつてね」

「欠点……？」

フェイトが学園長に聞き返し、明久たちが学園長を見る。そんな彼女達を一瞥して、学園長が言った

「娘の自慢話がうるさすぎるんだよ。やれ、『家に帰ったら肩を叩いてくれた』だの、『一生懸命カレーを作ってくれた』だの、『

百点の答案をもってきた』だの。ホントに嬉しそうに、幸せそうに言ってくれたよ。おまけに難しすぎるシステム処理をさも普通にやりながら、さ」

「ああ、さん……」

フェイトの脳裏に、あるシーンが思い起こされた。

『フェイト……。貴女の名前はね？ “運命” って意味なの……。どんな破滅的な運命にも、致命的な運命にも、宿命的な運命にも立ち向かえるような強さと、優しさ、を、持てる……よう、に……ね……』

病院のベッド。泣きじゃくる自分。そんな自分を笑顔で安心させ、泣き止ませようとする母親。

『母さん！ 母さん！』

『フェイト……。あなたを、私は……。愛してる……わ。永遠に、ね……』

ピーーーーーーーーーーーーーーーー

「母さん……」

ポタリ、ポタリ……

己をどこまでも愛してくれた母親。そんな愛する母親が遺してくれた腕輪。それに、一つ、二つと涙が零れ落ちた。そんな彼女の肩を、明久は優しく抱きしめたのだった。

☆オマケ☆

「そういえばババア長？」

「なんだい？ クソジャリ」

「何で今まで渡さなかったんですか？ あの腕輪。別に一年生の時に私といっても問題は無かったんじゃない」

「.....」

.....さあ！ さっさとシステムの調

整をしなきゃね！」

「忘れてたんですね、今まで……」

☆オマケMk-2☆

H A ☆ Y A ☆ T E 「……………なんでやあー……………」

！ なんで私が今回の話で出番これだけ何やあー……………！！！！」

アスタリスク「ワロスwww m9 (^A ^)」

訓練と特訓と見せ付けられる差

さて、新しい力を手にしたわけだが、使いこなせなくては宝の持ち腐れである。というわけで、学園長承認の元、模擬戦をすることになった。ちなみに、これが理由で午後の勉強は事実上の欠席になったことを明久が嬉しがったのは言うまでも無い。

ちなみに、フェイトの腕輪の能力は二つ。一つは電気属性付加。そして、スタイルチェンジである。スタイルチェンジは言ってしまうとステータスの増加だった。学園長曰く『ソニックフォーム』というこの形態。使用中はスピードのステータスがかなり上昇する。そしてこの形態のとき、装備の形状が変わり、杖から鎌に変わる。確かに、スピードが高いのに、杖のままではあまり意味が無い。スピードが高いのなら、それを生かせる装備の方が良いに決まっている。

どうでもいいことだが、カートリッジシステムの暴走云々のあの話。実はフェイトのオリジナルの腕輪から、属性付加と、スタイルチェンジの際の武器の形状変化のみを抽出したために、バランスが悪く、調整に手間取ったのだと言う。それを聞いた際、明久は「普通にそのままコピーすればよかったんじゃない？」と言ったら、「自分しかできないものを作ったかったんだよ」とのこと。

ちなみに、どこからか話を聴きつけたはやてが「私も参加する」と言ってきた。本人曰く「出番が欲しい」との事。すこぶるどうでも良いが。

何はともあれ、訓練をしようとしたとき、瑞希が声を上げた。

「学園長先生。私も自分の腕輪が欲しいです」

「ほう？ そりゃまたなんでだい？」

「だって、そうすれば学園長先生だっているんな人からデータを取れるじゃないですかっ」

「ふむ……。まあ、確かに一理あるね。よし、いいじゃないか。この合宿中、ジャリの訓練の手伝いを最後までしてくれたら、特別に作ってやろうじゃないか」

それを聞いて、瑞希は嬉しいそうに「やりました！」と笑顔を作ったのだった。

「……時に瑞希ちゃん。実際の本音は？」

「フェイトちゃんだけ明久君とペアなんてずるいです！」

「本音乙」

はやての問いに、一瞬で答えたのだった。

それからは、ずっと模擬戦だった。せっかく近接武器になったのだからと、明久とフェイトが近接戦闘をしたり、同じ射撃タイプとということではと明久で射撃訓練したり……

「フェイトちゃんには負けられないんです！」

「私だって負ける訳にはいかないよ！」

ガキンッ！ ガキンッ！

「フェイトちゃんには分らないんです！ そんな風に細いくびれに憧れて、大好きな甘いものを我慢しなきゃいけない人の気持ちがない！」

「瑞希だって分かってないよ！ そんな風に大きい胸だもん！ 明

久がおっきい胸が好きだって知ってるでしょう!? なんと明久に夜這いを掛けて胸を揉んでもらおうと思ったことか!」

などなど、女の戦いが起きたりと様々であった。色々問題があるが。

「つーか何気に吉井君の性癖を知られとんのやけど、そのへんどうなん?」

「……言わないで」

それから約三時間。訓練もようやく終わり、今日は解散となった。その際。

「そうだ、ババア長」

「なんだいクソジャリ」

「腕輪の操作とか、結構体力や精神力を使いそうなので、少しトレーニングをさせて欲しいんですけど」

「ほお、そりゃまた殊勝だね。で、その許可を私に貰おうと」

「そうです」

「ふむ。まあ、別に構やしないよ。ただし、トレーニングは夕食の後だ。午前は合宿の本来の目的の勉強。午後は訓練だからね」

「分かりました。それでいいです」

そうして今度こそ解散となった。

夕食も終わり、時間は7時半。早めのお風呂をなのはたちは満喫することになった。

「それじゃあ、よろしくね、アキ君」
「うん。まあ、ゆっくり温まりなよ」

そんなやり取りをして、明久は個室風呂の扉の前に椅子を使って座る。そして、ポケットからこの周辺の地図を取り出して、今夜から行うトレーニングコースを検討し始める。

「ふーん、やっぱり高原ってこともあって基本的に歩くためのコースが多いな」

自然を肌で感じる。それが基本コンセプトになっているこの卯月高原では、様々なランニング・ハイキングコースがある。

「でもま、やっぱり決まったコースよりも自然が多いところを行ってみるのもいいかも。今夜は月も星も出てるし、迷うことは無いだろうし」

そうやって色々考え始めて二十分ぐらいたった頃だった。

ドタバタ……ドタバタ……

「? 何だろう?」

何か騒がしい。そのことに明久は気づく。そして……

『退くな！　ここが我等の意地の見せ所だ！』

『へへっ、やっぱ俺って、不可能を可能に……』

『ちょ、おまw』

『少佐w』

『つーか遊んでる場合か！　って、おわあ！！』

『う、ウルズ6！！』

『さあお前達！　さっさと来い！　このまま補習室で反省文だ！』

『いえ、待ってください西村先生。それが終わったらいつそのこと座禅でもさせてみたらいかがでしょう？』

『ほう、いいですね。そうすればこいつ等も少しはマシになるでしょうな』

『くっ！　シグナム先生！　できれば鞭で！　鞭で叩いてください！！　そして「さあ、気持ちいいか？　このイエローモンキー」と蔑ずむ目で言うてください！』

『おい、だれかこのバカ止めろ！！』

『ちょ、ドMが全力全開www』

『前言を撤回したい気になってきました』

『奇遇ですね、私もです』

「なにやってるんだか……」

聞こえてきた一連の会話に、明久は呆れるしかなかった。

☆

そして時刻は9時。明久はトレーニングウェアを着て外に出る。事前に話は西村教諭に通してあるので、合宿場を出る事に関しては、とやかく言われなかったのだが……

「雄二、何でここにいるのさ？」

自分の隣に、体育着を着た雄二がいた。

「なに、俺も運動しようと思ってな。なにしろずっと勉強漬けだからな。ちよつとくらい体を動かしてもバチは当たらねえよ」

そう言って屈伸をしたりなど準備運動を始める雄二。

「（……うーん、付いて来れるかな？ 結構なペースでやるんだけど）」

そう考える明久。だが、目の前の雄二は簡単な運動だと思っている感じである。

「雄二、一応言っておくけど、結構なペースでやるよ？」

「ん？ まあ別に大丈夫だろう。俺だって結構体力があるほうだ」
「そう。ならいいけど」

☆

月と星。二つが輝き地上を照らす雲ひとつ無い夜空。そんな夜空の下を、二つの影が走る。だが、二つの影には明らかな差が合った。一つの影は俊敏に、且つスマートに森を滑るように走り抜ける。もう一つの影は、先を行く影に必死についていく形だった。

先を行く影。明久は木々をすり抜けながら後ろを見て、告げる。

「ホラ雄二、もっと速く。じゃないと予定の分が終わらないよ？」

「……ぜ、は、……ぜ、は……く、ふうふう……おま、少し……ペース……落とせ……」

息も絶え絶えと言わんばかりに雄二が言う。だが、帰ってきたのは意外な一言だった。

「何言ってるの？ これでもかなりペースダウンしてるんだよ？」

まあ、丁度いいからそろそろ休憩しようか」

そう言って明久はゆっくりペースを落とす。そして近くの傾いている木に腰を落とした。そして雄二は地面に直接座り込み、荒く呼

吸を整え始めた。

「ぜえ、ぜえ……お前、一体どういう、体力を、してやが……」
「それでも、結構鍛えてるんだよ」

そうサラッと明久は告げる。ちなみに、そんな明久はほんの少し汗を掻いているだけだった。

「あ、あと一分ぐらいしたらもう行くけど、雄二はどうする？ ムリなら合宿場に戻っても構わないけど？ 月も星も見えるから、帰れないわけがないと思うけど……！？」 雄二、伏せて！！」
「な！？」

明久は雄二に叫んで強引に伏させる。そして、手近にあった小石を数個、後頭部に何かが通り抜けるのを感じながら、気配があった場所に投げつける。

ココンッ！

投げた石は近くの木々に当たる。

「（上か！）」

明久は上を見る。ソコには月光に照らされた一つの影。だが、月明かりの逆光でその容姿を確認することはできない。だが、ほんの僅かな影から分かることはあった。

「（あの体格……女！）」

女性特有の体つきから、そう確認する。

「しっ！」

繰り出された拳に対して、明久は蹴りを繰り出す。その相手は拳と蹴りがぶつかる反動を使ってクルクルと回転して地面に着地する。そしてそのまま一気に明久との距離を詰める。その勢いと共に拳を突き出す。それをいなし、腹部に拳を突きつけ……寸での所で止めた。

「やれやれ、何でここにいるんだ？ 吉井」

「それは、こっちの台詞ですよ、トーレさん？」

月光に照らされた青い、短髪の女性。トーレに問いかけたのだった。

☆

「こちらはトーレさん。僕が通っている病院の人だよ」

「トーレだ。よろしくな、少年」

「坂本雄二だ」

三人はトーレが持っていた簡単なランプを中心に円を作って簡単

な挨拶をする。

「それにしてもトーレさん。何でこんなところに？　またドクター、先生の依頼？」

「ま、そんなところだ。チンクが今ドイツの方だからな。私が動くことになった。ウーノ姉さまもクアットロもこういったことには向いてないし、ドゥーエ姉さまは武者修行だかなんだかでどういうわけかネパールだ」

やれやれ、と言わんばかりに首を振る。

「で、今度は何を探してたんですか？」

「ん、これだ。『ヨルダケ草』に『ヨルダケ』だ。」

そう言ってトーレはバッグからいくつかのケースを取り出す。一つは葉草らしきもの。もう一つは妖しげなきのこだった。

「ま、名前のとおり、夜だけに採取して、始めて効能を発揮するからな。しかも生息地域が数が限られている。で、ここがその少ないうちの一つだったわけだ。で、採取して帰ろうとしたときに明久を見つけてな。久しぶりに力試しとでも、と思ってな」

「趣味が悪いですよ」

「ドクターよりはマシだ。知ってるか？　ドクターは以前ルーお嬢様を遠めに見ながらこう言ったんだぞ？」

『はっはっはっ。私はロリコンの変態さ。パンツを履いた少女がいるならどこにだって現れる』

「ってな」

「大丈夫かな。ルーちゃん……」

「ま、ノーヴェもいるしな、大丈夫だろう。……………多分」

「いつか先生が新聞の一面に乗るんじゃないかと思うと、なんだか
なあ……………」

「言うな」

そんな声が、夜風に乗って消えた。

差と、癒しと、秘策。(前書き)

いいサブタイが思いつかない日々です。 Σ (、 $\forall$ 、;) なんかい
案ないかなあ……。

差と、癒しと、秘策。

トーレとの会話から数分。トーレがそろそろ行くと言って話しは終了。明久と雄二は再び特訓を再開した。が、やっぱり明久と雄二の差は激しい。明久がすすいと森を抜け、雄二はそれに必死こいて着いていく。

そんな中で、雄二は別れ間際にトーレに言われたことを思い出していた。

『少年。どういう経緯で吉井の特訓に付き合っているのかは知らんが、あえて言おう。止めておけ。君と吉井とでは基礎などが何から何まで違う。喧嘩屋上がりに着いていけやしない。差を見せ付けられて絶望するだけだぞ』

実際、その言葉どおり見せ付けられていた。いや、今の現状でも明久は自分が着いてこれるようにスピードを緩めているのである。

そして、森を抜け、舗装された道に出たところで、明久は足を止めた。

「雄二。これから僕は別の特訓をするんだけど、雄二は戻った方がいいよ」

「はあ……はあ……、何、言っただ……？」

「これから更に違うことをするんだよ。それに雄二は確実について来れないからね。だから、舗装されたこの道を歩いていけば合宿場につくから。今日はこれで帰りだよ」

「……………明久」

「なに？」

「正直に言ってくれ。俺は、邪魔か……？」

「……正直に言えば、ね。ホントはさ、今頃はさっき言った別の訓

練をしてるはずだったんだよ」

「……そう、か。分かった、俺は戻る」

そう言っただけ雄二は舗装された道を歩いていった。自身の、あまりの弱さにうな垂れながら。

☆

合宿三日目 AM 6:00

「翔子。何してる」

「……ぐうぐう」

色々打ちのめされた翌日。俺は不貞寝と同様な気分で布団に潜り込んだのを覚えている。しかし、だがしかし。俺が布団に潜り込んだとき、翔子は絶対にいなかったはずだ。だからこそ、俺はこの寝たふりをしている幼馴染に事情を聞いている。

「翔子。寝たふりはやめろ。で、何してる」

「……肉布団？」

「何でそんなことしてる！？　　というか、お前はどこでそんな言

葉を知ったんだ!？」

「……姫路とハラオウンが教えてくれた。これを見ると相手は絶対に喜ぶって」

「俺の貞操と人生が絶対的な危機に瀕してるんだが？」

あの二人……一体何教えてやる。

「……雄二」

「あ？　なんだ。つーかいいい加減布団から出る。そして自分の部屋に帰れ」

「……何か、あった？」

「……!」

ちっ、相変わらず妙なところでいい感してやる。

「……雄二。何かあったら、何でも言って。私は、雄二のためなら何でも力になる。私だけじゃない。スバルも」

「……」

「それに……」

「……それに？」

「お義母さんも」

「お前がお袋をそう呼ぶ日は絶対に来ないからな!？」

畜生、いい感じの台詞が立った一言加えただけで台無しだぞ。

「……だから雄二。泣かないで」

「誰が泣いた」

「……雄二が。寝てる時、雄二泣いてた。目に、跡がついてる」

そう言われて、俺は顔を拭う。言われてみると、確かに顔に何か

濡れたような感触があった。

「……翔子」

「……なに、雄二？」

「その、サンキュ」

そう言っ、俺はまた布団をかぶった。

☆

三日目の朝の食堂。そこには、一部の男子が共通の表情をしていた。明らかに寝不足で、目の下に隈を作っているのだ。

「昨日、何があったの？」

「ああ、なんでも一部の男子が女子風呂を覗こうとしたみたいなんや」

味噌汁を飲みながら聞く明久の問に、はやてが答える。

「あゝ、そういえばなんかやってたね」

「せや、結局全員西村先生にとっ捕まって反省文を書かされたそうや」

「なんというか、自業自得だね」

「不謹慎かも知れないけど、個室風呂でよかったよ私達」

そう言いながらなのははお新香を食べたのだった。

「で、例の犯人像なんやけど……」

「何か分かったの？」

「いんや、とりあえず何も。ただ、犯人像を更に絞る方法はある」

「方法って、何をするのさ？」

「ムツツリーニ君や」

「へ？ ムツツリーニ？」

突然出たムツツリーニの名前に、明久は首を傾げる。

「ムツツリーニ君はこういう関係の情報集めは得意やろ？ せやか

らムツツリーニ君にも協力をしてもらおうと思うてな」

「なるほどね」

確かにムツツリーニならこういったことに関して右に出るものはいない。これ以上の適材適所はなかった。

「ま、というわけで早速説得してくるわ」

そう言うってはやては席を立ったのだった。

一時間後、鼻血の海に沈むムツツリーニが発見されたのは言うまでもなく、どこからか、「これ以上、出番を減らせせへん！ ちゅーわけで、サアービスサアービスウ！！」という声が聞こえたこの事だが、真意は不明である。

☆おまけ☆

「……姫路、ハラオウン。昨日はアドバイスをどうもありがとう」

「あ、代表。で、どうだった？」

「……効果絶大」

「そうですか。それは良かったです」

「……二人のおかげ。本当にありがとう」

「いいよ、気にしないで」

「そうですよ。これくらいのこと、気にしなくて大丈夫です」

「……そう。二人はいい人。これからは、私のことは翔子で構わない」

「分かりました、翔子ちゃん」

「分かったよ、翔子」

今回の話の裏側で、そんな女の友情が育まれていたのだった。

八神はやての事件簿（前書き）

はやて「ふっふっふっ……ついにキタアーーーーー／（。△。）／
ーーーーー！ 私が主役になるときが！！ ここからや。ここか
ら私の主役交代劇が始まるんや！」

アスタリスク「ま、次回からはまた平常運転だけだな。つーか君が
活躍する話なんて全体で何話程度になるか。下手すりゃこれで終わ
りなんてことも……」

はやて「デアボリック・エミッション！！
アスタリスク「ギャハアアアーーーー！！」

八神はやての事件簿

さて、朝食も終わったので午前は再び勉強となる。

AクラスからFクラスまで、二年生全員を一つの大きな部屋を使って全員で勉強である。これに関しては、今回の合宿の目的である“勉強に対する意識の増加”のためのステップの一つだ。要するに、二日目で得たモチベーションの高さを、今度は拡散させようということだ。

もとより、EクラスとFクラス（一部の生徒を除く）以外は勉強に対する熱意に差はあれど、決して低くは無いため、モチベーションは高い状態で拡散することになった。なので、今のところこの大教室にはその高いモチベーションの赴くままに熱心に勉強に取り組む者。そしてそれに耐え切れずに早くも居場所（精神的な意味での）を無くし、グロッキーになる者（大抵がEクラスかFクラス）の二つに分かれた。

そんな中で、部屋の隅の一角では、勉強とはまた違う意味での熱心なことが起きていた。

「ちゅーわけで、私の話、推理を聴いてほしいんよ」

片手に教科書（保健体育）を持ち、片手の指で要所要所を指していきながらはやては話し始める。ちなみに、はやての行動は一種のカモフラージュである。言ってしまうえば勉強をしてるフリだ。

「まず、ムツツリーニ君から貰った情報やとな。犯人、仕掛けられたあのカメラとマイクの犯人にはちよつとした特徴があるんや」

「特徴？ それって何なの、八神さん」

「うん。それはな、犯人はお尻に火傷の跡があることなんや」

「……あのさ、八神さん。なんでそんなことをムツツリーニが知っ

ているのか気にならなかったの？」

「いんや、気にはしたよ？　で、聞いたら「……校内に綱を仕掛けた」っちゅうこっちゃ」

「校内に綱を仕掛けたって……」

「で、出てきたのがこれってわけや」

そう言うってはやてはポケットからレコーダーを取り出し、再生する。

『ザ、ザザ……毎度』

ほんの僅かなノイズ。それが晴れて一つの声が聞こえてきた。恐らく、今回の事件の犯人であろう人物の声だ。

『……雄二のプロポーズ。もう一つお願い』

『毎度。今回で二度目だからお安くしとくよ』

『……値段なんてどうでもいい。だから早く』

こんな言葉も聞こえてきた。

「しょ、翔子！　お前もう動いていたのか！？」

あんまりな（雄二にとって）事実には、雄二は驚愕の表情を崩せない。

『了解了解。だけど、合宿があるから引渡しは来週の月曜日に』
『……分かった。我慢する』

「あ、危ねえ……」

『……それにしても、これだけ物が結構あるけど、問題とかにはならないの?』

『正直、一度母親にバレてね。文字通り尻にお灸を据えられたよ。今でも跡が残ってるんだ。全く、乙女に対してひどいとは思わない?』

ソコまでのところで、はやては再生を止めた。

「ま、ちゅうことやな」

「あれ? でもこれなら霧島さん犯人の顔を見てるんじゃない?」

「私もそう思ったんよ。だから霧島さんには勉強が始まる前に聞いたんやけどな……」

「……相手は、覆面に口の辺りに変な機械を着けてた」

「なるほどね」

「……変な機械というのは、さっきの会話の声から判断するに、変声機」

「ま、ムツツリーニ君の言うとおりやろうな」

そう言いながら、はやてはノートを取り出して何やら書いていく。

? 犯人像

同性愛者

恐らくDクラスかEクラス

お尻に火傷の跡あり。

機械面に対してそれなりの知識、技能あり。

「こうなるわな。で、一番手っ取り早いのはお尻の火傷の跡や。今夜のお風呂の時間に誰かがお風呂でそれを確認する。これで犯人は

割り出せる。で、この役をなのはちゃんか瑞希ちゃんにしてもらいたいんよ。というか、Fクラスの二人しかおらんのや」

そう言いながら、はやてはなのはの方を見る。

「うーん……。力になってあげたいのはやまやまんだけど……。ちよっと私は無理かなあ？」

「ほえ？　なんかあるん？」

「うん。ちよっとね？」

「あ、でも私なら大丈夫ですよ？」

申し訳無さそうな顔をするのはに代わり、瑞希がそう言うてる。

「うん。じゃあ、頼めるかな？　瑞希ちゃん」

「はい。任せてください。そう言うわけなので、フェイトちゃん。今日はなのはちゃん方はよろしくお願いしますね」

「うん。大丈夫、分かってるよ、瑞希」

瑞希の頼みに、フェイトは快諾したのだった。

☆

それからは昨日と同じであった。午前は勉強をし、午後は腕輪の訓練。そして夕食である。そんな夕食で……。

「明久君。はい、あ〜んです♪」

「明久。はい、あ〜ん♪」

あいも変わらずな光景があった。

「……二人とも。あ〜んは箸とかスプーンとかで食べさせてあげることだよな？ その………食べものを口移しすることじゃないよね！？ 絶対そうだよな！？」

少々イラッと来るが。

そんな光景に対して他の生徒達の反応は様々。

今か今かと手元のフォーク（金属製）などを押し曲がらんばかりの力で握る者。

そんなもの手ぬるいとかしに自前の凶器を構える者。

一連の行動を奇異の目で見る者。

「ネタ！ ネタが来たっすー！ー！」と言ってメモ帳に必死に書きまくる漫研女子。

唯一まともな呆れてる者。

実に様々である。

そんな中で、須川亮は山菜の和え物を食べながらチラリとなのはの空いてる席を見た。

「（今更だけど……座ってみるか？）」

別に食事の席は自由である。席を替えたって問題があるわけではない。ただ、

「（でも、今動いたら……）」

上記の出来事でヒートアップしている輩が多いこの場所である。ここで自分が席をなのは隣の席に座ったらどうなることやら。

「（だけど、ここで逃げたら男が廢る！ 勇気を出せ、須川亮！ 別に一步踏み出すんじゃない、半歩だけだ。それだけのことじゃないか！！ よし！ 今俺は、リア充への第一步を、踏み出すぞおー！！！！）」

そう言ってお盆を持ち、席を立つ。そして、なのはの席の隣の椅子に手を掛け――――

「ご馳走様ー。あ、亮君。お先にねー」

た所でなのはが食べ終わり席を立った。

須川亮。リア充への第一步を、見事に踏み外した瞬間であった。

……………orz

夕食も終わり、いざ風呂の時間。瑞希ははやての約束通りに犯人（正確にはお尻にある火傷の跡）を捜すために女子風呂へ。

「（はやてちゃんが挙げた人とは……）」

頭で、今日の昼休みのときにはやてから渡されたリストを思い出す。そのリストには、同性愛者の疑いがある女子生徒。もしくは、機械関連に強い女子生徒が載っていた。

はやて曰く、同性愛者ではなく、そういったもの裏で売買するためにやってる可能性もあるのだとか。幸いにも、そんなに数は多くは無く、実際には7人程度だった。さらに、その人の特徴、顔写真まで載せてあったために覚えるのは簡単であった。

「（それにしても、どこから顔写真なんて手に入れたんでしょ……？）」

ふと、そんな疑問が思い浮かんだが、今はそれほど頃じゃないと頭を切り替えた。そして、服を脱ぎながら、それとなくターゲットの人物のお尻の部分を見ていく。

「（……あの人と、あの人は……違いますね）」

まず近場にいた二人のお尻をみる。が、茶髪ツインテールに黒髪ショートの二人には跡が無い。つまりこの二人ではない。

「（他の人はもう浴室ですね。仕方ありません。お風呂に入りながら見てみましょう）」

そう思った時だった。

「あの、瑞希？」

声を掛けられ、ふと声がしたほうを見る。

「……島田さん？ 何か用ですか？」

「その、さ……。なにやってるのかなって思ってた。ほら、今日の勉強時間のときも何か皆で話してたじゃない？ だから、何かするのになって。昨日と一昨日は個室風呂だから気になって」

「別になんでもないですよ？ 島田さんには関係なんて一切ありませんから」

声を掛けてきた人物。美波の言葉に対して、瑞希は淡々と応えた。

「え、でも……」

「関係ないんです」

「あ、あのさ。そういえば瑞希、私の呼び方、変わったよね？ 前は、名前で呼んでたよね？」

以外にも強めな言葉に美波はタジタジになりながらも、そう言ってくる。が、それは完全に地雷であった。

「当たり前じゃないですか。だって、明久君を傷つける人を名前なんて呼びたくありませんから。それに。分かっていると思いますけど、私を始めとして、フェイトちゃんもなのはちゃんも島田さんの事は欠片も許してないんですからね？ 一昨日のこと」

「あ、う……」

「それでは、これで」

そう言って、瑞希は浴室に入ってしまった。

☆おまけ☆

「（うう……ダメだよ私！ 瑞希がいないからってチャンスなんて思っちゃ！ でも、今しかチャンスはやっぱ無いわけで……ううん！ 落ちつ、落ち落ち落ち着くんだよ私！！ それに、なのはだっているんだから！！ あう、でも見られながらっていうのも結構いいかも……）」

そう言ってブンブンと髪を振り乱し、ときには顔を紅くし、ときには頭からプシューと湯気を出すそんな彼女を見て、高町なのはは、「フエ、フエイトちゃんが壊れちゃった……」

仮にも、男子から女神と呼ばれているはずの彼女のそんな事態に、ポカンとするしかなかった。

ちゃんす・チャンス・Chance!! (前書き)

本日の合言葉

アスタリスク「リア充、MO☆GE☆RO!!」(一、四、一)

キーラ「アホか……」

ちゃんす・チャンス・Chance!!

「(さて、後三人ですね……)」

四人目を調べ、瑞希はそう呟きながら桶にお湯を入れ、体に掛ける。お湯は瑞希の体を滑る様に流れ、滴り落ちる。本人曰く気になるくびれ。だが、実際はちゃんと引っ込んでいる。むしろ、これで気になるのだとしたら相当なわがままである。そして、けしからんほどに大きいその果実も含めると、充分スタイルは抜群である。ちなみに、その果実を見た左の生徒は鏡で己のソレを見て軽く絶望し、右の生徒はペタペタと己のソレを触る。そして、「何故、同い年なのにこんなにも差が……」と呟いていた。

あえて言おう。画像でお届けできないのが非常に残念であると！

まあ、そんな作者の下心からの、おとめ座の君の改悪台詞による叫びはともかく。瑞希は次のターゲットを見る。黒めの青のセミロングの髪をした女子だ。体を洗い、作者が鼻血を出し、いざ調べようと近づいた時だった。ガラリと扉が大きな音を立てて開き、一人の、既に体操着を着た女子が入ってくる。そして、

「男子がまた覗きに來てるわ！」

そんな言葉と共に、浴室にいた女子のほとんどがいきり立つ。

『また昨日の男子達ね！？』

『返り討ちにしてやるわ！』

『男って奴はこれだから！』

そう口々言いながら、女子達は浴室から脱衣所へと向かう。大方男子達を迎撃するためなのだろう。そしてその女子達の中には、今調べようとしていた女子も含まれていた。他のターゲットを探す、もう既にいない。同じように迎撃に向かったのだろう。

「（残念です。今日はこれでお終いですね）」

そう考え、瑞希も脱衣所に向かう。何はともあれ、彼女だって覗きは許せるものではないのだ。



「で、結局そのまま本日のお風呂は終了になったちゅうことなんやな」

「はい、そうになりました」

その夜。操作の結果を瑞希ははやてに報告していた。はやての周りにはなのは、フェイト、翔子もおり、はやて同様瑞希の報告を聞いていた。

「ということは、残りは後三人なんだね」

「ま、そうなるわな」

なのはの言葉に頷きながら、はやてはテーブルに置かれている三枚の写真を見る。

ターゲットリスト

・宗像 むなかたみお 美緒2年Eクラス 映画研究部所属。機械出しなどをして
いるとの事。

・網走 あはしりしほ 志保2年Dクラス 実家が電化製品を取り扱っている。
また、GL本が好きらしい。

・清水 美春 2年Dクラス 本校を代表する同性愛者。また、
島田美波ファンクラブ『帝国過激団 百合組』の組長。

「この三人なんだね」

フェイトの言葉にはやては頷く。

「とにかく、最後のチャンスは明日の夜の入浴時間。これがダメだったらこの事件は迷宮入りや」

はやての言葉に、その場の全員が頷いた。

☆

時刻は10時半。一応既に消灯時間は過ぎており、ほとんどの生徒が寝付いている。これが普通の高校なら、まだまだ起きていそうなものだが、この文月学園には鉄人西村がいる。なので、消灯時間に起きて騒いでいる生徒などいない。いたらそれは自殺行為と変わらない。

そんな中で……

「すうー……すうー……」

明久は布団に包まって寝息を立てていた。訓練も終わり、いい感じに疲れていたのですぐに眠れたのである。そんな彼に。

「……おじゃましまーす……」

「……おじゃましまーす……」

二つの影が近づいていた。まあ、隠す必要もないので言うが、瑞希とフェイトである。

「くすっ、明久の寝顔、かわいい……♪」

「写真撮っちゃまずいですかね？」

「どうかな？ でも、撮りたいし……」

二人は明久の寝顔を前に、そんなことを言い合う。そして、

「えいっ」

っんっん。

「あ、瑞希ズルイ。私も」

つんつん。

明久の頬をつつく。意外と柔らかい明久の頬に、思わず二人はとろけ始める。

「ン……んう……ふみゅ……」

「「はふう……♪☆」」

どこかあどけない寝顔。それに完全にノックアウトされた二人は思わずよだれと鼻血が出始める。そろそろ色々な意味でまずい状況になってきたので先に進めよう。

「んう？ んー……。アレ？ 瑞希ちゃんにフェイト？ どうしたの、二人して？」

そこで明久が目をしょぼしょぼさせながら起き上がる。

「えっとですね、明久君」

「えっとね、明久」

「うん」

「よく、旅行先とかで枕が替わると寝られないって良くありますよね？」

「え？ ああ、まあそうだね」

確かに、そういうのは良く聴く話だ。が。

「えっと、ソレがどうかした？」

「うん。だからね？ 変わると寝られないんだ」
「はい。変わると寝られないんです」

「（肉）抱き枕が変わると」

「ソレっておかしいよね!？」

「明久君も寝られませんかよね？」

「寝られないはずだね？」

「いや、僕は普通に寝られるから!」

「もう、明久君ってうそつきです」

「ついてない！ 僕は何一つ嘘をついてない!!」

どんどん逃れることができない事態に陥っていく。まるで蟻地獄である。

「大丈夫だよ、明久」

「はい。大丈夫です」

「な、なにが……?」

「私達がしっかりリードしますから（するから）!!」

「いや、違うってばー!!」

そんな明久が叫ぶその近くで、

「……雄二。私も頑張る」

「ま、まて翔子！ とりあえずその帯に手を掛けるのを止めるんだ
!!」

そんな事態が起きていた。また、これらが原因でムツツリーニの

布団が紅に染まっていたのだった。

それからしばらく。騒ぎを聞きつけた鉄人から逃げるために、一悶着あったのは言うまでも無い。

まあ、とりあえず……。

リア充MO☆GE☆RO!!

恐怖？ チャンス？ 肝試しの序章（前書き）

今回は短いです。

恐怖？ チャンス？ 肝試しの序章

四日目の朝。あいも変わらずそれぞれ多彩な表情を持つ生徒達。そんな時、そんな生徒達にババア長が朝の朝礼でこう言った。

「明日は帰るだけだから、今夜は肝試しでもしようかと思っているんだよ」

そんな言葉に、様々な反応が起きた。

男子（特にFクラス）は歓喜し、女子は「ええー！」と悲鳴に似た叫びを上げる。これに関しては当然とも言える。普段ならある程度はいざ知らず、二日目から男子が覗き行動をしているために、否定的なのだ。

そんな中で、ソレに対して好意的に受け、にぎわう女子もいた。ソレは当然、なのはたちもそれに該当する。

「肝試しかあー……。どうなるだろうね？」

机に頬杖をつきながら、なのははそう呟く。

「うう、正直言えばお化けは、と言うより肝試しは怖いです」

「うん……そうだよね」

そんな中で、瑞希とフェイトは少々顔を青くしてそう呟いている。

「そっか、瑞希ちゃんとフェイトちゃんはそういったモノが苦手だモンね？」

もともと二人はこういったオカルト関係は苦手としている。その

ため、こういったイベントはあまり歓迎ではなかった。

「でも、こういう時、意中の人となれたら嬉しいよね？」

なのはの言葉に、二人は「まあね」、と頷く。

「ま、と言ってもそうなる可能性のほうが少ないけどな」

そう言いながら、雄二は近くの席に座る。

「坂本君。そう言わないでよ」

「だがな、実際そうだろ？俺達二年生は三百人いて、ペアはくじで決まるんだ。その中で意中の相手になるなんてあり得ない」

確かに、雄二の言うことも事実である。三百人の中で意中の相手とペアになる方が難しいだろう。

「全く、坂本君は夢が無いなあ。そんなことい言つとると、霧島さんがペアになるよ？」

「は、言ってる狸。俺と翔子がペアになることは無い。実際、三百人、つまりは150組だ。可能性はゼロじゃないが、かなり低い」

「なんちゅーか、フラグやな」

「は？ 何言ってるんだ」

「いや、なんと言うかフラグゆうより……お約束？」

そう言っではやてはちよいちよいと雄二の後ろを指す。

「……雄二。番号を見せて欲しい」

「おわっ！ 翔子か。驚かせんな」

「……それより、番号を見せて」

「ん？ ああ、そうだな。ちょっと待ってろ」

そう言って雄二はポケットから青い紙を取り出す。ソコに書いてある番号を見る。

雄二……『666』

「で、翔子お前は……………！！！！？」

雄二は翔子の持っているピンク色の紙を見て…………その表情がムンクと化した。

翔子……『666』

「す、すまんが急用があ……………！！ は、離せ！ 離せ翔子お……………！！」

一瞬の内に逃げ出すが、一瞬の内に襟首を捕まれ、ジタバタする雄二であった。

「ハハハ、ワロスww m9（^▽^）」

「坂本君らしいね」

「うん。そうだね」

引きずられていく雄二を見ながら、はやてたちは心の中でドナドナを歌ったのだった。

ちなみに。

「お姉さま！ 一緒になりましょう！」

「ちよっ、美春！ 離れなさい！ 大体女子同士じゃ一緒になれないわよ！」

そう言って美波は4と書かれたピンクの紙を見せる。

「やっぱり、美春とお姉さまは運命の紅い鎖で結ばれているんですね！！」

「はぁ！？」

そう言って美波は美春が持っている“青い紙”を見る

4

「チョッ！？ なんで！？」

「お姉さま、男子よりも女子の方が一人多いので女子は一人だけ青い紙があるんです！」

「い、い……いやあああーーーー！！！！！」

怖がり方は計画的に（前書き）

休日に小説を書くようにしてますが……最近モチベーションがダダ下がりか低いってことが多いです……。

怖がり方は計画的に

午後七時。合宿場の近くの雑木林にて、肝試しは行われる。その近くでは、参加する生徒達がちよつとした賑わいを見せていた。そんな中……。

「あの、先生！ 俺のペアの娘がいんですが……」

「ん？ ああ、岸川だったら体調不良だそうだから不参加だそうだ」

「えーと鉄Z……先生。僕のペアのBクラスの女の子が見当たらないんですが……」

「ああ、睡眠不足だから参加しないと伝えて欲しいと言う伝言を貰ってるぞ？」

「鉄人！ あっしの相手がいんですが……」

「先生と言え。先生と。横海だったらご家族の不幸で帰ったそうだ」

「せんせー！ 俺の運命の人がどこにもいなーい！」

「早蕨だったらお化けアレルギーだから参加しないそうだ」

『『『『何故だああー！！！！！』』』』』

Fクラスの男子がペアになったほとんどの女子生徒がいらないという事態に、Fクラス男子、異端審問会ことF F F団の叫びは響き渡った。

だが、それも無理は無い。なにせ、件の覗き騒動の主犯のほとんどがFクラス男子なのだ。そんな奴等と一緒にになったら、どんなこ

とをされるか分からない。そう思う女子が正常なのだ。

だが、それでもFクラス男子が相手でも来るものはいる。

「それじゃ、よろしくね？ 亮君」

「はいっ！ 不肖須川亮！ 誠心誠意なのはさんのお供をいたします！！」

「……雄二。一緒に行く」

「ぐああっ！ わかった！ わかったからサブミッションを掛けるなあ！！」

「それじゃあ、よろしくね。明久」

「うん。わかったよ」

「……それじゃあ、よろしくお願いしますね、木下君」

「姫路よ。分かっているからそう落ち込むでない」

明久・雄二・秀吉・亮の四人である。

そして、こういった者達を一方通行な妬み・僻み・辛みなどで（理不尽な）粛清するのが……

『』『』『我等、異端審問会であるっ！！』『』『』

……むしろ、お化けなどよりこいつ等の方が怖い上に性質が悪いかもしれない。ちなみに、そんな異端審問会の制服（？）である黒装束と鎌などの武器などが、夜の闇に紛れ、僅かな月明かりで照らされて怖さ倍増である。事実、それを見て悲鳴を上げる女子が結構いた。

さて、それはともかく。今回の肝試しのルールを説明しよう。

まず、到着目的は雑木林を越えた先にある一本松。そこからペアの番号の札を持ってくるのだ。ちなみに、リタイヤしたいときは防犯ベル（元は異端審問会対策）を鳴らす。そうすれば、近くにいる教師が助けに来て、これまた近くの外灯がある舗装道路に連れて行ってくれるという寸法である。

ちなみに、夜闇に紛れてふしだらなことをした者には、もれなく鉄人とシグナムによる説教・二時間の補習授業がセットでついてくる。これはお買い得だ。（マテ

後は、木々等を故意におったりなどの自然破壊をしないというものなどが今回のルールだ。

「それでは、まずは一番のペアから行くように」

そんな鉄人の言葉により、肝試しは開始した。

☆

サーーーーー……

風が、雑木林を揺らす。そんな雑木林の中を、亮はなのとは共に歩いていた。

「結構暗いね」

「そうですね。月も出てるから、もうちょっと明るいかと思ったんですが」

そう言っつて亮は空を仰ぎ見る。月は確かに出てはいるが、よくよくみれば木々に月光が遮られているようである。

「こりゃ、道理で暗いはずだ」

「あゝそうだね」

「それにしてもなのはさん。こういった暗いところとか怖くないんですか？」

「え？ うーん、あんまり怖くは無いかな？ 部活で遅くなった時

とか、結構暗い夜道とか歩くし」

「ああ、そういうええそうですよね」

なのははテニス部に所属している。それ故に、遅くなることもしばしあった。

「そう、ですか……」

個人的に言えば。亮はなのはが怖がってくれることを期待していた。そうすれば、自分が手を差し伸べたり、怖がって抱きついてくるかとも思っていただけになおさら。

「（ま、世の中そう上手くはいかないよな……）」

「ねえ、そういう亮くんは怖くないの？」

「……え？ ああ、そうですね。怖くないです。まあ、流石に高校生ともなると、よほどのことが無い限り暗いところが怖いなんて事は無いですよ」

「そっかあ。そうだよね」

そんな風に話していた時だった。

ガサリッ！

『アオオオオーーン！！』

「にゃあああああっ！！？」

突然茂みから現れたそれに、なのはは反射的に腕を振るった。

……普段、サブやスマッシュを打ってる利き腕で。

ドガッ！！

「にゃにゃにゃにゃにゃ！ な、なんか出たなんか出たあっ！！」
「な、なのはさん！ お、落ち着いてください！ とうか、よく見て！」

あまりに突然であったため、なのはが自分に抱きついてるという状態を堪能することなくそれを指差す。

「ふえ……？」

そこにいたのは、着ぐるみを被った……

「長谷川……先生？」

数学教師、長谷川先生の変わり果てた（笑）姿であった。

「えと、いったいこれって……」

「まあ、肝試しですからね。先生たちがお化けに化けてるんじゃないでしょうか？」

「あゝ……」

そこまで来て、ようやく亮は自分が役得な状況にあることに気がついた。

「（……！！　こ、これは……。ああ、なのはさんの、柔らかい……」

「あ、あの亮くん？　その、なにが柔らかいの？」

「え？　それはまあ、なのはさんの………あれ？」

そこで、亮は思った。

「あの、俺、何かしゃべりました？」

「うん。柔らかいとか……」

「（ジイイイイイイイイイザアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアスツツツ！！！！）」

「あの亮くん？」

「えと、あの……そ、そう！　なのはさんの髪の毛、柔らかいなんて思ってた……」

「え？　ああ、そうなのかな？　まあ女の子の髪って男の子より柔らかいって言うしね」

「へーそうなんですかー」（棒読み）

よもや、胸が柔らかかったとは、口が裂けても言えない亮であった。そして、帰った後、彼は異端審問会から追い回されることとなる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0130q/>

バカとリリカルと召喚獣

2011年11月17日00時54分発行